

JH科学 魔法町シリーズ
二次創作 「カガクノミ
チ」

きやら める

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

JH科学、魔法町の世界観を題材にした二次創作です。

国立魔法科学大学の学生、湯川偉雄はたつた十六歳にして学長を務めるニーナ・アイ
ンシュタイン教授の助手という名の小間使いとして日々を過ごす。

小悪魔で天使なニーナに振り回されつつも、彼女の助手をやめる気が起きない湯川
は、ニーナ教授や彼女を敵視するミレーユ助教授が引き起こす事件に右往左往する。

いまより数百年先、数千メートルの積層建造物だつたり浮遊建造物で構成された街
を、ホウキで空を飛び、超科学を使う人々が住む魔法町を舞台にした、SFと魔法が入
り乱れる世界での連作短編となります。

原作者である John Hatchaway 様に許可をいただき公開しております。原作
および原作者様に関する情報は先URLをご参照ください。<http://mots.jp>

こちらの作品は Pixivとのマルチ投稿となります。

目 次

第一話 「花蝶風月」
第二話 「相思創 A I」
第三話 「色即乙喰」
第四話 「百花靈亂」
第五話 「清廉欠白」

211 147 91 33 1

第一話 「花蝶風月」

「花蝶風月」

* 1 *

「んーっ、一応できたかな」

大きく伸びをしながらそう呟いたのは、少女の愛らしさと女性の雰囲気を持つ、二一
ナ・айнシュタイン。

連日の作業で荒れてきてしまっている感じのある金色の髪を整えながら、彼女は国立
魔法科学大学内に与えられた実験室内で、壁沿いの机に置いたブラウン管モニターに向
い、冷めてしまつた紅茶のカップを傾けていた。

実験が大詰めであつたために片づけが追いつかない室内には、中央の大きな机の上と
言わず、決して広いとは言えない実験室の床と言わず、様々な機材や道具が放置された
ままとなつてゐる。

しかしこーナが操るPCを置いた壁沿いの机の真後ろ、実験用の机の端だけは片づ

き、充分なスペースの真ん中に目の細かい鳥籠があつた。

中には蝶。

ニーナの実験の産物であるその蝶は、透明な羽根を持ち、鳥籠の中に渡された何本もの渡木に數十匹が止まつてゐる。

「さて、仕上げと行きましょうか」

ニヤリと笑つて振り返つたニーナは、鳥籠の天辺に取りつけられた真空管と、その根源に接続されている太いケーブルを見、そしてPCテーブルのキーボードに手を伸ばす。

「さあ！」

期待に目を輝かせながらリターンキーを叩くと、鳥籠の真空管が黄色い光を放ち始めた。

それと同時に、金糸のような髪から覗くニーナの耳のイヤホンに取りつけられた、小型真空管アンプ——モントークテクノロジー、精神と物理を繋ぐ技術の産物であるそれもまた、青緑の光を放つ。

鳥籠がガタガタと揺れ始め、部屋にあるものすべてまた振動を始める。

鳥籠の真空管は光を強め、目を開けられないほどとなる。

光が分厚いカーテンが引かれた窓の外にも漏れ出るほどになつたとき、急速に真空管

の発光は収束していった。

ブラウン管モニターには、成功を示す文字列が表示されていた。

改めて見た鳥籠の蝶は、さつきまで透明だつた羽根がすべて、薄ピンク色に染まつて
いた。一匹残らず、すべてが薄ピンク色の蝶に。

「よしよし。これでよし。でもこれ、どうしようかしら？」

実験成功の嬉しさに頬を緩ませるニーナは、しかしピンク色の唇を指でなぞりながら
考え込む。

ふと壁に掛けられた、たくさんの時計がひとつに集まつた全太陽系時計の地球の表示
を見てみると、もう深夜に近い時間になつてしまつていた。実験に集中しすぎてしまつ
たらしい。

外からは聞こえる音はほとんどない。

微かに、近い階層を走る遠い電車の音と、二〇〇〇メートルに達する魔法科学大学の
校舎群の間を通る風の音だけだ。

椅子から立ち上がつたニーナはP.C.に終了の指示を与え、モニターのスイッチを切り
換える。

「実験の許可が出るとは思えないしなあ……。でも限定空間より広い場所で影響を確認
した方が結果は集められるし……」

荒れ果てている実験室内の片づけは諦め、手元の機材や書類だけ机の中に仕舞つたニーナは、家に帰るために愛用の反重力ホウキに手を伸ばす。

「ん？」

P.C表示から切り換えたモニターに映つているものに気がついて、ニーナはしばしそれに注目する。

「ふふふつ」

思わず含み笑いを零しつつ、モニターの電源だけ切つた彼女は照明を落として実験室の引き戸を開けた。

「さて、どうなるかしらね？」

楽しそうに声を弾ませたニーナは、そのまま扉を閉めた。

後には静まり返つた実験室と、時折薄ピンク色の羽根を小さくはためかせている蝶だけが残つた。

ニーナが実験室を出てきつかり十分。

静かに、引き戸が開かれた。

わずかに開いた戸の隙間から滑り込むように入つてきた影。

「鍵をかけ忘れるなんて不用心なこと。さあて、何かいいものがありますように……」少し低めの女性の声でそう呟いた人影は、照明を点けないまま暗い実験室の中を探るよう歩く。

見つけたのはほのかに光っているような薄ピンク色の羽根を持つ蝶が入った、鳥籠。「これね、いま実験していたのは」

真空管とケーブルが取りつけられた鳥籠に、ただの蝶でないことを見抜いた人影は、それを慎重に吊り下げられたスタンドから取り外した。

「どうしよう……」

手に取つたはいいものの、ウエーブのかかつた髪を揺らしながら周囲を見回していた人影は、カーテンが引かれた窓に注目した。

カーテンを開け、押し上げ式の窓を開放し、上弦を過ぎた月が浮かぶ屋外に、鳥籠を向ける。

鳥籠の小さな扉を開けると、それに反応したかのように薄ピンク色の蝶たちが羽ばたき、静かな星空へと飛んでいく。

まるで花びらが羽ばたいているかのようなその様子をしばし眺め、人影は窓とカーテンを閉めて忍び足で鳥籠を元の場所に戻した。

「これであの子の鼻を明かしてやれるわ」

鼻を鳴らし、人影は満足そうに頷いていた。

* 2 *

「うわ、鍵閉めてない。まつたく、ニーナ教授は……」

引き戸を開けて実験室に入った僕は、鍵がかかってないことに不安に感じるよりも、目の前の光景にげつそりと肩を落とした。

広い実験用の机の上にあるオシロやコイルはともかく、他にも積み上げられた検査機材やケーブルや真空管などなど。床に転がってる謎のポンベはいつたい何本あるのか。どつから持ってきたのか、たぶん壊れてる豆腐型PCに、無造作に置かれたあの箱は小型の恒温槽だろうか。

実験室の中は、荒れ果てていると言つて過言ではない惨状だつた。

今日、僕が来たのは二ーナ・アインシュタイン——国立魔法科学大学でも天才として名高い教授の、実験室のひとつ。

僕はここ数日別の実験にかかりきりで、数日ぶりにここに来たわけだけど、ここまでになつてるとは思わなかつた。

「とりあえず午前中は片づけかあ」

ニーナ教授がここで何かの実験をしてたのは知つてたし、それが大詰めだつたらしいことはわかつてた。重要な書類の類いは仕舞つてあるっぽいけど、茶渋が残るつてのに飲みかけの紅茶のカップすら放り出したままの室内に、僕は大きなため息を漏らす。

肩に提げた鞄から取り出したのは、白衣ではなく、白い割烹着。

ニーナ教授の助手となつて半年、僕にとつては白衣の次に必須の装備になつていた。若干一五歳で、入学するのすら簡単ではない国立魔法科学大学の教授に就任したニーナ教授は、天才というだけでなくその功績もまた凄まじい。

その功績が評価され、同時に様々な分野に手を伸ばしている研究を円滑に行うため、大学内に研究分野に応じていくつかの実験室を持つてゐる。

有名人であるが故、もの凄い倍率になつた研究生の応募に勝ち抜き、僕はニーナ教授のゼミに入ることになつた上、助手の大役まで仰せつかつた。

ただ、助手という名前の、小間使いだつたが。

学内にあるコレクションなんかを置いてある私室は塵ひとつないくらい綺麗にしてるのに、実験が大詰めになつたりすると余裕がなくなるためか、実験室なんかは彼女は片づけがおろそかになつたりする。

どんなに惨状になつても本人はどこに何があるか把握できて実験に支障はないらしいが、僕みたいな一般人には危険きわまりない場所となる。

最初の頃は事故を起こしたりもしたけど、ニーナ教授の助手となつて半年が経ち、彼女のある程度の行動パターンがわかつてきた僕は、本人がいなくても掃除くらいはこなせるようになつてきた。

壊れ物を安全な場所に待避させ、正体のわかる機材を邪魔にならないようまとめ、道具類を所定の場所に仕舞つていく。それから正体不明の機材なんかを手袋をして慎重に確認しつつ、片づけに入る。

ニーナ教授にとつてはさほど危険な場所ではないのかも知れないが、実験には液体窒素や反応物質を使うことだつてよくある。ヘタをすると爆発が起ころるどころか、理解不能な現象も起ることもあるから、実験室の掃除は慎重さと注意深さが要求される。

こんな風に掃除夫に甘んじてる僕だが、そんな状況にあつてもニーナ教授の側を離れる気が起きないのは、いくつかの理由がある。

国立魔法科学大学の生徒は、充分に勉学と研究に励むため金銭などの生活は保証されてるけど、決して余裕があるわけじゃない。ニーナ教授の助手をすることで得られる手当は、僕にとつて充分過ぎるほどに魅力的だ。そして天才の実験を一番近くで見ることで得られるものが多くあること、何より僕が生來の苦労性で、頼まれると断れないし、困つてる人には世話を焼きに行つてしまふというのがある。

「おはよう。もう来てたんだ？」

湯川くん

「おはようございます。と言つてももう十二時過ぎてますよ」

実験室内があらかた片づいて、一般人が入つても大丈夫になつた頃、そんな時差惚けした声とともに入つてきたのは、女の子。

僕が着ている大学の制服となつていてブレザーと同様に、濃紺のジャンパースカートに純白のブラウスを合わせ、ストライプのネクタイを締めている彼女こそが、地元では神童と言われ、十六歳で大学に入つた僕でも敵わない、ニーナ・айнシュタイン教授。一七〇cmの彼より頭ひとつ分近く小柄な彼女は、滝のように流れる金糸の如き髪に、制服に合わせた色合いのレースで飾り立てられたリボンを乗せている。

大学では私服も認められているのに、教授である彼女が学生と同じ制服を着ているのは趣味らしい。

確かに制服は学生にも人気だし、彼女が着ているようにブラウスの袖口やスカートの裾をレースで飾つたりといった改造もごく普通のこと。それが祟つて、そもそも年齢が年齢だし、学生に間違われることもあつたりとデメリットも発生するが。

そんなニーナ教授の人気の秘密は、学者としての功績と同時に、愛らしい顔と、一五歳とは思えない身体つきと、何より僕にとつて目が離せないのは、短いスカートと太股までを覆う横縞のタイツが織りなす絶対領域！

制服の他にもいろんなタイプの服を着てくることがあって、ファッショニにはかなり

気を遣つてる二ーナ教授は、自分の可愛さ、綺麗さを知つてゐるはずだけど、友達以外の他人からどう見られてゐるかはあんまり気にしてないらしい。

研究の功績や真摯に向き合う態度、天使のような見た目の美しさを持つ彼女は、天然ボケの一面も併せ持つ。

「そう思えば、ここでやつていた実験はどうなつたんですか？ 昨日は夜遅くまでやつていたみたいですが」

「んー。あれはまあ、いいかな？」

「どういうことです？」

そろそろ二ーナ教授が来るだろうと思つてゐた僕は、準備しておいたポットにヤカンからお湯を注ぎ、紅茶の準備を進める。

元気そうに見えるけど、いつもに比べ心持ち瞳が暗くなつてることから、昨日は夜遅くまで実験をやつていたんだろう。だから普段より心持ち抽出時間を長くして渋めにしたアールグレイをぴかぴかにしたティカップに注ぎ、PCが置かれた机の前に座つてブラウン管モニターでセキュリティのカメラ映像から、僕の掃除によつて物がどう動かされたかを見る二ーナ教授に手渡した。

しばしの間香りを楽しみ、小指を立てて持つたカップを傾け、ひと口飲んだ紅茶の渋さにわずかに目を細めてる二ーナ教授は、やつぱり美しい。

ただ普通の動作に、僕は一瞬見惚れてしまう。

教授としての仕事や研究をこなしつつ、同年代の友達とショッピングや遊びに出かけたりと、精力的に動き回る彼女のバイタリティとモチベーションは、どこから湧いてくるものなのだろうか。実は大学があるこの町、魔法町には二ーナ教授が三人いるなんて噂があるくらい彼女は活動的だ。

可愛らしさ、美しさなら二ーナより優れた女性は世の中にはいくらでもいるが、それでも彼女がみんなに人気で、僕にとつて一番魅力的に映るのは、どうしてなのだろうか。
——最初の頃は逃げ出そうと思ったこともあるけども。

そう思つてもいまも続いているのは、彼女の魅力に取り憑かれたからではなく、僕が苦労性で、苦労するのがわかっているのにそれでも放つておけない性格だからだと信じたい。

何しろ彼女に深く踏み込むことは、危険を伴うからだ。

天使のような彼女は、ちよつかいを出そとすると、小悪魔一面を見せる。

つい数年前、二ーナ教授がまだ学生だった頃、告白と同時に襲いかかろうとした口リコンの先輩は、現在はモントークテクノロジーを利用し、アカシックレコードへの読み書きが可能か否かを実験するため、生きた考える人として生涯を研究室内に過ごすことになつたと聞いたことがある。

教授になつたばかりの頃、ニーナ教授を排除するために掃除用真空管ドールを改造して差し向けた競合する研究をしていた教授は、翌日自宅を区画ごと「掃除された」という噂があつた。

どんなに魅力的であつても、ニーナ教授にヘタに手を出せば、彼女がそんな小悪魔な側面を見ることになる。

だから僕は、あくまで助手としての仕事をこなすだけだ。苦労するのがわかつていても。

「いいの、と言つても、確かこの鳥籠の中で何かやつてましたよね？」

思考で中段されていた話題を再始動して、ちょうどニーナ教授の後ろにある空っぽになつてゐる鳥籠を指さす。

「この実験室に來た最後の日には、鳥籠の中に何かが育つていたような記憶があつた。「一応完成したんだけどね。いまは、まあ、実験中、かな?」

「はあ」

ドキリとしまうような動作で唇を小指でなぞるニーナ教授は、僕の質問に曖昧な返事をする。
僕が関わつていらない研究にあまり深く踏み込むことはできないにしても、成果は発表されることはと思う。

曖昧に返事をする理由は、よくわからなかつた。

「そんなことより、湯川偉雄（ゆかわひでお）くん。今日はこれからやつてもらいたいことがあるんだけど、いい？」

小さく首を傾げながらにつこりと笑うニーナ教授に、僕はイヤな予感を覚える。こういう笑みを見せているときの彼女は、何かを企んでいるときだ。

半年の間に僕はそれを学んでいた。

「え……まあ、いいですけど」

「じゃあお願ひ」

それでも僕には、小悪魔で、天使な彼女お願いを、聞かないという選択肢はなかつた。

中学のときに習つたところによると、いまから三百年ほど前、二一世紀初頭の頃は、主な移動手段と言うと車や自転車などの、車輪を回して地上を走るものだつたらしい。

初めてそれを知つたときはそんな方法でどうやって町を移動するんだと思つたけど、その頃の写真や映像を見てみたら、建物は高いものでも数百メートル、多くの家は地面の上に数階程度の高さしかなかつた。

確かにそれなら、地上を車輪で移動しても問題ないわけだ。

ニーナ教授から用事を言いつかつた僕は、断ることもできず実験室に一番近い大学校舎のエントランスに立った。

首から提げているのは調査用に渡されたクリップボードとステイツク型のテスター。右手に持っているのは、ホウキだ。

エントランスの高さは地上から約一五〇〇メートル。

この辺りでは魔法科学大学の校舎は高い方だけど、別に東京一高いというわけじやない。

東京周辺、いまでは魔法町と呼ばれている町並みは、軒並み一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルの高さがある。

そんな高さの町を移動する手段は、階層ごとに行き交っている電車と、モジュール化され積み重なっている建物を貫くエレベータ。
そしてホウキだ。

ホウキ以外にも絨毯や反重力シユーズ、個人用ロケットとか家族向け反重力人力車とかもあるけど、魔法町の主な移動手段と言えば、手軽で小型でどこにでも持つて行けるホウキが一般的だ。

魔法ホウキとか反重力ホウキとか色々呼び名はあるけど、人間の持つ念力を增幅する、精神物理学の成果が内蔵されたホウキは、魔法町の生活になくてはならない移動手

段として普及している。

僕は愛用のアンダーソン社の最新型、ダブルサイクロンハウキにまたがつた。
大学から支給される決して多くない生活費と、ニーナ教授の助手で得られる手当と、暇を見つけてやつていていたアルバイトのお金で貯金してやつとこの前買うことことができたダブルサイクロンハウキは、従来型のハウキの発展型、サイクロンハウキをさらに発展させ、二重反転式サイクロンにより、推進にジェットを使うタイプのハウキの速度を超える超速度を得られるというご機嫌な性能を持つている。

地上三〇〇〇メートル以上に走っている高速空路のさらに上空、音速を超える乗り物でしか乗り入れられない、地上一〇〇〇〇メートル以上に位置する超高速空路も走れる速度が出せる。

ただしこれには罠があつて、オプションの風防と、耐寒スーツを着ていないと超高速空路にたどり着く前に風か寒さでめげることになる。

いまのところどつちも手に入れる余裕のない僕は、性能を出し切れないままダブルサイクロンハウキに意識を集中させた。

別にエントランスからでなくとも、けつこうみんな窓とか校舎のちょっとしたところにある開放広場とかから飛び立つけど、僕は一応ニーナ教授の助手。できるだけ行儀良くエントランスから飛び立つことにしていた。

ホウキにまたがつて蔓を両手で握りしめ、浮き上がるイメージをホウキに送ると、末端のダブルサイクロンがうなりを上げて回転を始める。

ある程度回転が安定したところで、念力の増幅倍率の高いホウキを操り、出力を絞つてふわりと空へと浮き上がった。

「しつかし、なんでまたこの時期に桜の調査なんて……」

僕が今日ニーナ教授から言いつかつたのは、大学周辺の桜の生長具合の調査。それも観光スポットになつてゐる、遺伝子改良により栄養を与え続ける限り永久に花を咲かせる永遠桜ではなく、春に咲く普通の桜の調査だ。

もうすぐ中秋の名月の時期である秋のまつただ中、気象予言序ですら春が近づかないと調査なんてしないのに、なんでニーナ教授はそんなことを調査するんだろう、と思つてしまふ。

でもおそらく何か理由があるんだろうから、僕は文句も言わず——言えず、調査へと乗り出した。

周辺三キロ以内を中心、最大五キロの範囲という話だつたけど、その範囲には天空湖となつてゐる不忍池を中心とした積層上野公園も、超江戸城の外堀空路沿い桜並木まで含まれる。調査する場所はここに来るまでに確認しておいたけど、一日で終わるかどうか微妙なくらいの数と範囲だつた。

エントランスから飛び立つた僕は、魔法科学大学最高峰である本館を離れレッドゲートを目指す。

僕と同じく制服を着ている人、カジュアルだつたりロリータだつたり着ぐるみだつたり、老若男女の人間、グレイ型やタコ型の宇宙人、化け物やロボットやＵＭＡが右と言わず左と言わず上にも下にも行き交う間を縫つて、安全運転でホウキを操る。レッドゲートに向かうメインストリートの左右は、庭園スペースとなつていて、庭園スペースと言つても、そこは一二〇〇メートル級の建物の屋上だ。

下を見るとどこまでも続く建造物。

途中の雲に遮られて地上は見えないものの、学生や教授や職員などの関係者だけなく、様々な人がいる魔法科学大学の校舎を、ずっと下の方まで無数のホウキに乗つたりやロケットを背負つた人が自由に行き交つているのが見えた。

庭園スペースに植えられてる桜に接近して、ニーナ教授に渡された何なのかわからぬいステイツク型のテスターを桜の木に当てて、お尻の部分についてる小さな画面に表示された数値を場所と時間とともにクリップボードに書き込んだ。

「あれ？」

テスターは何を検知してるものなのか教えてもらえないかったからわからぬけど、今年は早くもすっかり葉が落ちてしまつていて、黒に近い樹皮だけを見せてる桜に、若

干の違和感を覚えていた。

——気のせいか？

桜に注目するなんて春以来なわけだけど、大学創立時に植えられたという見事な枝振りと幹の太さの大桜もそうだし、その近くにある記念樹の若い桜にも、注目するのは春以来だからはつきりしないが、首を傾げてしまっていた。

「まあ、もつと調べてみないとわからないか」

呟きつつ校内の主要な桜の調査を終えた僕は、レッドゲートをパスして、とりあえず神保町方面を目指した。

神保町と言えば店舗数は太陽系一を誇る古本屋を中心とした書店街が有名で、隣接する音楽関係の店が並ぶエリア、また書店と同時にそつち方面の人には欠かせないスポーツ用品店、地球人ばかりか宇宙人にも対応してる食事処はとくにカレー屋が多いことでも知られている。

大学内以上にカオスな往来のある外堀空路の、空が見える神保町の上層付近を僕は流す。

この上層付近は安全だからいいとして、魔法町全体に言えることだけど、空が見えないほどの下層に行くのは素人には危険だ。

太陽光の影響が少なくなるのと同時に法律の縛りが何故か緩んでしまう古い町並み

では、その分興味深い店や物品に出会えるけれど、同時に会いたくない不穏な人にも出会ってしまう可能性が高い。

渋空や新宿なんかは上層から下層までしつかり治安が行き届いてるところが多いが、神保町の面白さは法律にすら捕らわれないカオスさであるとも言えるだけに、僕はこのままでもいいような気がしてる。

外堀空路を時速百キロくらいとのろのろと流して九段下へ、超江戸城外堀防壁の桜並木を調査する僕は、大学校内でも感じていた違和感を深めていた。

「たぶん、これがニーナ教授の目的なんだろうけど」

空路脇の路側エリアまでホウキを寄せて一本一本桜にテスターを当てて、出てきた数值を書き込んでいく僕は、ニーナ教授が何を考えてるのかを予想していた。

「また何か変なこと考えてなければいいんだけど」

研究熱心なニーナ教授は、でもたまにヘンなことを思いついて実行してしまうことがある。というか助手になつて決して長くない間に、もう何度かそうしたこと経験している。

いつものこと言えばいつものことだからたいていは問題ないけど、大事件になりうことまでやつてしまふ可能性だつて、ゼロではない。

「桜でそんな大事件になることはないとと思うけどさ」

他よりも異常と言えるレベルで数値が高い桜を見上げながら、僕は不安を感じざるを得なかつた。

* 3 *

「んー。やつぱりおかしいな」

すっかり日も暮れ、やつとひと通りの調査を終えて大学まで戻ってきた僕は、もうあんまり人のいないエントランスに降り立つて首を傾げていた。

定期的に合法薬を飲んでアクセラレートしてある前頭葉をフル活用して、自宅にしているアパートモジュールの格安部屋に置いてある脳ハードディスクにアクセスしてみるけど、違和感の正体はわからない。

気象予言序のデータを引っ張つてくればもう少し何かわかるかも知れないが、気象序のデータも公開してるのは初夏の辺りまでだろうから、いまの時期の桜に関する情報は得られそうにない。

どんなに脳ハードディスクで記憶を拡張し、脳R A I Dで高速アクセスを実現しても、それで天才になれるわけじゃない。

例えば魔法科学大学の図書館クラスの、もつと大きい、アカシックレコードくらいの

情報を持つていて高速に検索できるとしても、必要な情報がどこにあるのかわかつていなければ検索には時間がかかるし、そもそも必要な情報を取り込んでいなければ、検索は徒労に終わる。

薬や機械で学力や思考を加速しても届かないのが天才なんだろうと、ニーナ教授の側にいて最近よくわかつてくるようになった。

「終わったのかしら？」

僕が頭を捻つてる間にエントランスに現れたのは、夜の闇の中でもわずかな電灯に照らされ金色に輝いているように見える髪をしたニーナ教授。

「はい。一応ひと通り終わりました。細かいところまでは調査しきれてませんが」「充分よ」

昨日も遅くまで実験してたんだからもう帰つてるかと思つたけど、むしろ元気になつてる様子の彼女に、僕は検査結果を記録してるクリップボードを手渡した。

軽く折り曲げた指を唇に当てる彼女は、僕の調査結果を見て、ニヤリと笑つた。
「あら、ニーナ・AINシユタイン教授。奇遇ね。こんなところで何をしていて?」

ニーナ教授の高く響き渡る声とは対象的に、ハスキーライフで良く通る声が僕たちにかけられた。

見てみると、エントランスに現れたのは、手首までを覆うレース袖と裾にフリルがあ

しらわれた、深緑のワンピースを身につけた女性。

僕はあまり深く関わることがないからほとんど話したことはないが、彼女は生物工学を専攻しているミレーユ・シュレディンガー助教授だ。

ニーナ教授の髪を音もなく静かに流れ落ちる金糸の滝だとするなら、ミレーユ助教授の髪は荒々しく乱れ落ちるブラウンの滝。

そんなウエーブのかかつた髪を揺らしながら近づいてきた助教授は、僕たちを蔑むようく顎を反らし気味に睨みつけてきた。

確か僕と同じ一八歳のミレーユ助教授は、独自の研究でそこそこの成果を残しているものの、割り当てるための研究室が不足しているため、教授になれないという話を聞いたことがある。

老朽化しつつも予算の関係で——それ以外にも理由があるという噂だが——大学の校舎の増設が難しいため、実験室の空きができ次第教授に昇格予定らしい。

そんな立場だからこそ、多大な功績により大学内に複数の実験室を持つニーナ教授を目の敵にしていて、何かある度に突つかかってきてた。ただし、ニーナ教授の方はあんまり相手にしてないようだが。

「新しい研究の成果を確認しているところだけど、何か用かしら？」

——やつぱり、何かの実験だつたんだ。

最初から不穏に感じていたが、やつぱり僕が今日やつてた桜の調査は、ニーナ教授の実験だつたらしい。

色々と思うところはあるし、突つ込みも入れたいところだけど、余裕の笑みを浮かべて、ミレーユ助教授の前だから、僕はとりあえず黙つておく。

「いいえ、別に。でも、こんなところで成果の確認なんて、研究が奪われたり、情報が流出したりしないよう気をつけるべきじやなくつて？」

「何か言いたいことでも？」

「さあ？」

含み笑いを漏らしつつエントランスの端まで歩いていった彼女は、手にしたジエット推進式ホウキを横座りにして構え、ふわりと浮かび上がった。

「それではごきげんよう、ニーナ教授。貴女の立場が今後も変わらないといいわね」

そう言い捨てて、ミレーユ助教授はホウキの後端にあるジエット推進装置から青白い炎を放ちつつ、空を飛んでいった。挨拶を返す暇すらない。

「……なんだつたんでしょう？」

「さあね。気にする必要ないわ」

絶対何か仕掛けてきた合図だと思うのに、ニーナ教授は意に介した様子もなく、クリップボードに挟んである紙をめぐり、成果の確認を続ける。

「よし、これなら大丈夫ね」

ひと通り見終わり、手にしたペンで書き込みを行つたニーナ教授は、僕にクリップボードを返してきた。

そして、優しい笑みを浮かべた。

本人は意識していないんだろう、多くの男たちの心を驚づかみにしきただろうその天使のような笑みを浮かべているときのニーナ教授は、決して心まで天使であるわけじゃない。

たとえ実験室の掃除であつても、研究に関わることであればどんなお願ひでも助手である僕が受けるのは当然だ。

でも、天使のような笑みを浮かべ、心に小悪魔を飼い慣らすニーナ教授は、こんなとき助手としては受けるべきではないお願ひをしてくるのが常だ。

そうだとわかついても、僕は彼女のお願いを聞かざるを得ない。

「ひとつ、お願いがあるんだけど

「はい」

「明後日の金曜の夜から、印をつけたところの中で一番花見にいい場所を確保しておいてくれないかしら？」

「花見、ですか？」

「ええ」

秋の半ばに、それも桜が一番良く見える場所を確保するはどういうことだろうか。でも僕を見つめるニーナ教授の揺るぎない瞳は、冗談を言つてゐるわけではないのはわかる。

「わかりました」

「うん。よろしくね。他の準備はこちらでやつておくから」

「お願ひします」

嬉しそうに小さく笑い声を立てるニーナ教授に、わけがわからないまでも、僕は彼女が何かを仕組んでいることだけは理解できていた。

*

国立魔法科学大学の敷地内、レッドゲート近くの積層建造物の屋上、大学創設時に植えられたという大桜は、見事な咲きっぷりだつた。

毎年春に咲くはずの大桜は、金曜の夜辺りから急速に生長し、つぼみをつけ、土曜の昼頃には花を咲かせ始めて夜となつたいまは満開となつてゐる。

小さめの公園のようになつてゐるこのスペースに生えてゐる他の桜もまた、薄ピン

ク色の花を満開にしている。

けれども、少し離れたところの桜は一切花は咲かず、生長も見られない。

大学周辺の魔法町でも、同じようにスポット的に桜が開花してあるところがあるという報告を聞いていた。

——絶対、ニーナ教授が原因だよな。

わかつていたけど、僕はそのことを口にしない。

金曜の夜から僕が確保していたのは、桜の真下ではなく、少しだけ離れて大桜全体を眺められる場所。

僕の隣に座り、月見団子をつまみに、甘酒の入った湯飲みを傾けるニーナ教授は、楽しそうに桜を見上げていた。

魔法町の人たちは祭り好きだ。

他にもゲーム好きだつたり行列好きだつたりいろんな指向はあるが、祭りが好きなのは鉄板だ。

桜が咲いたとなれば例え秋でも祭りになる。

いま僕やニーナ教授、教授の友達やゼミ生がいるこの反重力絨毯の他にも、辺りを埋め尽くす勢いで絨毯やホウキが出て、みんな思い思いに桜を眺めていた。

それだけでなく、大学のサークル、出入りの業者、近くの町内会が咲いてる桜を囲む

ようには様々な露店を展開し、文字通りお祭り騒ぎとなつていた。

もちろんここ以外にも、桜が咲いている場所では中秋の桜祭りが開催されていることだろう。

灯された照明に浮かび上るのは、桜と、ニーナ教授の横顔。

うつとりと桜を眺める彼女の視線の先には、桜だけでなく、ちょうど今日が満月である月、中秋の名月がぽつかりと浮かんでいる。

月なんて今時ちよつと遠出するくらいの距離でしかないけど、人が歴史を刻み始めた頃から美しいものとして語られ続けてきたそれは、やはりいまも美しい。

そして、ニーナ教授も綺麗だ。

桜と、月と、少し肌寒さを覚える九月下旬の緩やかな風に金色の髪を揺らし、艶やかな唇に湯飲みを寄せている彼女は、まるで一服の絵のよう。

これを見られただけでも、最初はみんなに笑われながらも場所取りした甲斐があつたつてものだ。

「ふふふ。ニーナ・AINシュタイン教授、桜が咲いてしまつていますわね」

せつかく静かに花見を楽しんでいたというのに、その雰囲気をぶち壊して勝ち誇ったような声とともに現れたのは、ミレーユ助教授。

乗ってきたホウキを僕たちがいる反重力絨毯に寄せてきた彼女は、顎を逸らしてニー

ナ教授を完全に見下して視線を投げかけてくる。

「ええ、本当に綺麗ね。でも、それがどうかしたの？」

「これは、貴女の失態ではなくつて？」

「何のことかしら？」

勝ち誇つてる助教授と、余裕の笑みを浮かべてる教授の声はみんなにも聞こえてるだろうけど、ふたりの関係を知ってる人にとっては当たり前の光景で気になった様子はなく、露店の呼び声やいったい何人がやつてるのかわからないカラオケ大会によつて、少し離れた人まではこちらに注目している様子はない。

「とぼけても無駄ですよ？ これは貴女の実験室で——」

「その前にいい？ ちょっと見てもらいたいものがあるんだけど」

ミレーユ助教授の言葉を遮つたニーナ教授は、傍らに置いてあつた持ち運び用の小型ブラウン管モニターの電源を入れた。

不機嫌そうに眉根にシワを寄せながらも、ミレーユ助教授はホウキから身体を乗り出すようにしてニーナ教授とともにモニターを覗き込む。

「貴女が言つてくれたように、研究が盗まれたり情報が流出しないよう、うちの実験室にもある程度のセキュリティはつけてあるのよ」

モニターの角度と寄せ合うようにして身体の位置から、何が映つているのかは僕か

らは見えない。

でも、勝ち誇っていたミレーュ助教授の顔がペンキで塗ったように青くなるのを見て、僕はなんとなく事情を察した。

そんなミレーュ助教授の顔を見ている二ーナ教授は天使のような小悪魔な笑みを……。

——違う、あれは悪魔の笑みだ。

その横顔はいつもと同じ天使のような笑みなのに、瞳の奥にいるのは、相手のことを把握し切れてない天然ボケ気味の小悪魔ではなく、こうなることをわかつていた様子のある、悪魔だ。

「それで、どうする？ 全部報告する？ このことも含めて、ね」

「くつ。な、何でもないわ。ワタシの氣のせいだつたようよ！ ぐぐぐつ、憶えてらつしゃい！」

まるで三下悪役のような捨て台詞を残して、ミレーュ教授はジエットを吹かして凄い速度で飛んでいつてしまつた。

絨毯に座り直した二ーナ教授は、何事もなかつたかのように花見と月見を再開した。「つかぬことをお訊きしますが、なんで花見なんですか？」

さすがに黙つていられず、白玉せんざいのお椀を手にした二ーナ教授に、僕は遠回し

な質問を投げかけてみる。

「一度桜と中秋の名月のコラボレーションというのを見られるといいな、と思つていたのよ」

「……そだつたんですね。あとそれから、まったく関係ないことなんですが、あの実験室で研究していたのはどんなことだつたんです？」

「遺伝子操作した昆虫の実験ね。精神物理学の応用して人の想いを込めた昆虫を植物に寄生させることで、望んだ結果を得られるかどうかの。ヘタをすると季節外れの花見をすることになつたり、込める想い次第では周辺の植物を根絶やしかねないから、実験には慎重を期する必要があつたのよね」

天使のような笑みを浮かべて、この桜祭りは自分には関係ないように装つている二一ナ教授だけど、たぶん偶然巻き込まれたんだろうミレーユ助教授のことも含めて、今回の件を誰が引き起こしたことなのかなんて、いまさら言うまでもない。

「もうひとつお訊きたいんですが、寄生するつてことはたぶん植物の遺伝子操作を行うんですね？」 危険はないんですか？」

「大丈夫よ。操作するのはほんの一端で、生長に関わる部分だけのものだから。突然変異の可能性はあるから、その辺りの検証は充分にやらないといけないんだけどね。でも突然変異の確率的には極々低くて——」

そこまで言つたニーナ教授が沈黙した。

僕とニーナ教授の間にひらひらと舞い降りてきた桜の花びら。
いや、薄ピンク色の蝶。

桜に目を向けると、花びらのような蝶が、月を掠めるように何匹か飛んでいるのが見えた。

どうするかなて思うよりも先に、強く吹いた風が蝶を空に舞い上げ、すぐに見えなくなつた。

ニーナ教授を見てみると、驚いた顔をしていた彼女は、一度目をつむり、目を開けたときには、どこか遠くを見ていた。

「本当、いい夜ね」

どうやら気にしないことにしたらしい。

毎日が不思議が一杯の魔法町で、いまさらこんなことくらい気にする人はいないだろう。僕も気にしないことにする。

花びらを舞い散らせる桜と、丸い大きな月と、足を崩して絨毯に片手を着き、緩やかな風に金糸の髪を揺らしてうつとりとしているニーナ教授がいれば、いまの僕には充分だ。

小悪魔で、悪魔で、それでも天使なニーナ教授の側にいることを、僕は望んでいるか

ら。

「花蝶風月」

了

第二話 「相思創A I」

「相思創A I」

* 1 *

「真空管ドールとロボットの違いはなんでしょう？」

昨日掃除したばかりだというのに、もうスナック菓子の袋や飲みかけのペットボトルが散乱している実験室に入った途端、二ーナ教授からそんなことを訊かれた。たまたま通りがかつた受付で持つていってと言われた郵便物を小脇に抱えた僕は、それを実験用の広いテーブルに置いて、ため息を吐く。

「真空管ドールは真空管とそれ用に造られたボディにより発現する、未解明なことの多いアノログ人工知能によつて制御されていて、ロボットはプログラムを基本とするソフトウェアで構成されるデジタル人工知能で制御されている。その違ひですか？」

「なんだ湯川君、知つてたの」

「そりやあまあ、精神物理学を専攻するなら、アナログ人工知能とデジタル人工知能の違いについては勉強しますしね」

相変わらず静かな滝の如く流れる金糸のような髪を指でいじりながら、ニーナ教授は唇を尖らせてつまらなそうにしている。

深緑のシャツにミニスカートを合わせ、ネクタイを締めてるニーナ教授はいつになくゴスロリ成分は少ないが、絶対領域が眩しいニーハイソックスにはしつかりレースがあしらわれている。

椅子に座つて脚を組んでるから、微妙なところで見えてしまつていて、目のやり場に困るが、誘つてるわけじゃない。

ニーナ教授の場合、他の人からどう見られているかとか、世辞の言葉よりも、自分が綺麗か、可愛らしいかの方が重要らしい。みんなから見ても高評価な容姿と服装は、自分のためのものであつて、どんな風に見られているかはよく理解してないようだつた。

そうしたちよつと天然な部分がトラブルの原因になつたりもするけど、生来の性質なんだろうから、僕はわざわざ指摘したりはしない。

それがニーナ・アイシュタインという、たつた一六歳にして国立魔法大学の教授にして学長を担い、世界に天才として名を轟かせ、その評価に値する功績を残してきた女子なのだから。

一八歳で大学老院生となり、ニーナ教授の助手に抜擢されてからそろそろ八ヶ月。僕はそんな彼女とのつき合い方がわかつてきていた。

「真空管ドールは精神物理学的にはかなり興味深いテーマだから、いろいろ実験してみたいとは思うんだけど、難しいのよねえ」

「まあ、仕方ないですね」

真空管をロボットに取りつけるとなぜ人間とほぼ同等の精神が生まれるのかについてはわからないことだらけ。だけど発現することだけは確かだから、真空管ドールには人間ほどではないにしろ権利と義務がある。

法律で守られてるそれらにより、真空管ドールは本人の意志を無視してロボットのように分解したりすることはできない。

ニーナ教授と話しながら、僕は手早く手紙の仕分けをする。

連絡手段としては電子メールも存在するが、地球以外の星との交流も行われてる現在、こうした電子的な手段はどんなに高性能なフィルタをかけてもスパムや勧誘などで埋まつて、既知の相手以外のメールを拾い上げるのは簡単ではない。

だから電子メールが一般的になつて数百年も経ついまは、逆にアノログな手紙の方が有用だつたりする。

と言つてもやっぱり世界的にも名の通つたニーナ教授宛に送られてくる手紙の大半

は、ほとんどが不要なものだ。たくさん届くダイレクトメールや怪しい団体からの勧誘を弾いたり、手紙を彼女に渡すべきものかどうかを判断するのは助手の役を任じられる僕の仕事だ。

「アナログ人工知能のことを研究できれば、もつといろいろわかると思うんだけどね」

「逆にデジタル人工知能では、アナログ人工知能と同じ精神は獲得できないんですか?」

「ほぼゴミ箱行きだらう手紙の束を、念のためニーナ教授が見るかも知れないから廃棄予定のボックスに入れ終え、意味のある手紙を一通ずつ確認しながら、僕はそう問うてみる。」

話に食いついてきたのが嬉しいのか、妙ににこやかな笑顔を浮かべるニーナ教授。

「いろんな人の論文とか研究成果を見たことはあるし、自分でも実験したことはあるけど、いまのところは無理ね」

「どうなんですか? 町で見かけるロボットなんて、人間とほとんど見分けがつかないものが多いんですけど」

「人間に似せてつくられたタイプのロボットは、本当に見分けがつかないものがけつこうある。」

「肌の質感や髪、表情なんかは人間のそれと遜色はない。目はカメラアイだから判別つくようでいて、機械義眼を埋め込んだり多機能コンタクトレンズをつけてる人間もい

て、ひと目でロボットと人間を判断するのは困難だ。

「確かに外見はほとんど変わりないわね。それを言つたらグレイ系宇宙人とか岩石系宇宙人なんて、地球人じや見分けつかないわよ、本人たちにとつてはもの凄い違いがあるらしくて、ひと目でわかるらしいけど。それに行動とかも、成長型だつたり、巨大データベースに接続して稼動するタイプのロボットは、反応も人間と違いを感じるのは難しいしね。でも、少なくともひとつ、人間やアナログ人工知能と、デジタル人工知能では決定的な違いがあるんだけど、何かわかる?」

「……なんでしょう?」

外見的な違いは薄く、行動も人間や真空管ドールと違いを感じられないロボットとの決定的な違いは、僕には思いつけなかつた。

生まれ方だつて、真空管ドールは工場で生産されてるわけで、部品は一部ロボットと共にしてたりするから、人間と真空管ドールに対して、ロボットの決定的な違いにはなり得ない。

さすがにわからない僕は、手紙の仕分けをする作業の手を止め、首を傾げてしまう。にんまりと笑うニーナ教授は、得意げに人差し指を立てて見せながら言う。

「それは、魔法が使えるかどうか?」

「魔法ですか?」

「ええ、そうよ。人間も真空管ドールも、魔法を使って、反重力ホウキで空を飛んだりできるけど、ロボットにはそれができない。ロボットには魔法は使えない。人間だって種族差や個人差で魔法力の強さはまちまちだけど、ゼロという人間はいない。空を飛んだりする方法は、別に魔法以外にもあるからそれほど困ることはないけどね。精神物理学において、魔法が使えるか否か、使える場合、使えない場合の原因やその理論はとても重要なのよ」

そう言つてワインクするニーナ教授に、思わず胸がキュンとしてしまうが、本人は無意識にやつてているだけだろう。

「まあそんなこんなで、真空管ドールについては調べてみたいんだけど、難しいわねえ。真空管にアナログ人工知能を発現させる効果が発見された当時、いまでは考えられないほど凄い実験とかやってたみたいなんだけど、その頃の論文なんかはいま手に入らないのよねえ」

「なんでしたら、突然今日はそんな話を？」

「うん？　ちょっとね。昔やつてた研究の節目にあたる時期でね。ちょっとそんなことを思い出したの」

一六歳とは思えないくらい大きく柔らかそうな胸の下で腕を組み、ニーナ教授はうなり声を上げる。

機材の購入に使つてゐる業者からの重要と書かれた手紙を手元に置きつつ、どうやらニーナ教授個人宛らしい、横開きの薄い緑色をした封筒を差し出す。

「あ！ 今日か明日届く予定だつた機材、入荷の遅れで来週になるそうですよ。こういふのは電話か直接営業の人があつてくれないと……。実験遅れちゃうのに」

納期遅延の連絡を手紙で送つてくる業者に後で文句をつけようと思いつつ、僕はゆつくりと顔を上げる。

けつこう適當だつたり遊んでたり、実験室だらうと構わず散らかしたりするニーナ教授だけど、研究に対してもいつも真摯だ。機材の納期遅延で実験が遅れるなんてことになつたら、すねたり文句を零したりかも知れない。

そう思つて恐る恐るニーナ教授の顔色を窺つてみると、なんだか惚けた顔をしていた。

僕が渡した手紙の、おそらく裏書きを見て、口を半開きにしながら、驚いてるのか目を見開いてる。

「教授？」

「あ、うん。納期遅延ね。わかつたわ。じゃあ実験は来週以降ね」
手紙に目を向けたまま、ニーナ教授は顔を上げずらしない。

僕の話は聞いていたようだけど、その声は僕に向けられてゐるような感じはしない。

宛名しか見てなかつたから誰からの手紙かはわからないし、いまの僕の位置から差出人は見えない。

「じゃあ今日はもうやることないわね。今日はいいわよ。機材が届いたら知らせて頂戴」

「あ、いえ。明日また掃除するんで、来ますけど」

「ああ、うん。そう。それはお願ひね」

上滑りだつたニーナ教授の聲音に、徐々に色がついてくる。

呆然としていた顔にも、抑えてるようだけど笑みが零れてきていた。

——そんなに嬉しい人からの手紙だつたんだろうか。

そんなことを思つても、教授のプライベートにまでは踏み込むわけにはいかない。
気になるけど、時間ができたことはいいことだ。

手伝いをしてるニーナ教授の実験の他に、僕にも僕が決めてやつてている研究がある。

それを続けるために大学老院にまで入つたんだし。

「じゃあまた明日」

「はい。二ーナ教授。お疲れ様です」

まだ手紙に釘付けになつたままのニーナ教授を残し、僕は後ろ髪引かれながらも実験室を後にした。

* 2 *

——これは明らかにおかしいよな。

僕の前に座っているのは、ニコニコと笑うニーナ教授。

機嫌のいいときはこんな感じではあるんだけど、今日の笑顔は格別だ。まるで顔が光を放っているような満面の笑みを浮かべている。

注文した食事が来るのを待ちながら、僕はこつちを見ているようで見ていないニーナ教授の顔を見つめて、考え込んでしまっていた。

僕たちがいるのは国立魔法科学大学の中にある食事処のひとつ。

テラス席や中二階席があつて、オープンスペースなのに観葉植物なんかによつてすぐ隣の席との間が区切られていたりと、内装はかなりオシャレだ。

軽食や喫茶がメインだけど、学内食堂だけあつて丼物からラーメンまでメニューも豊富で美味しい。ただし内装と味の分だけちょっとお高い値段設定なので、昼時のいまも満席と言うほどには埋まつていない。

他にも学内にはもつとリーズナブルだつたり量が多い店があるから、この店は教授や外から来た人なんかによく利用されていた。

けつこう苦学生である僕が今日、この店に来たのは、二ーナ教授に誘われたから。
それも奢ってくれると言う。

意外と出不精で、お昼はお菓子や出前で済ませてしまうことも少なくない二ーナ教授
は、お金関係にはきつちりしてるので、基本は割り勘だ。

教授とは言え年下の女の子に奢つてもらう気はあんまり起きないので、それ 자체は気
にしたことなかつたけど、今日は珍しく奢るから着いてこいと言われて、思わず頷いて
しまつっていた。

機嫌の良さが半端ない証拠だろうけど、何かがおかしい。

——昨日は逆だつたしな。

昨日の二ーナ教授は、今日のテンションの高さとは逆で、憂鬱そうにため息を漏らし
てばかりいた。

今日と昨日で違い過ぎるテンションは、おかしいと気づくに充分なものだつた。

——あの手紙が届いてからだよな。

一昨日、手紙が届くまではそれ以前の二ーナ教授のままだつたから、いまの様子はあ
の手紙が原因であることは明らかだ。
でも内容はもちろん、差出人も見ていない手紙がどんなものであつたのかは、僕には
わからない。

「お待たせいたしました」

「ありがとう。さあ、湯川君も食べて食べて」

運ばれてきたのは思ったよりボリュームのあるカルボナーラとたらこスパゲティ。ニコニコと笑いながらニーナ教授は自分用の小皿にカルボナーラを盛りつけて、食べ始める。僕も「いただきます」と声をかけてから、たらこスパゲティを小皿に移して食べ始めた。

味はかなりいいんだけど、あんまり食べた気にならずに流し込んで、僕は食後のコーヒーを飲み干す。

「えっと、じゃあ、ありがとうございます」

「うん。また後で」

氣色が悪いくらい機嫌のいいニーナ教授を残して、僕は席を立つ。

笑いながらもこつそり教授の手が上着のサイドポケットに伸ばされているのは、そこに例の手紙が入っているから。

嬉しいのか憂鬱なのかわからぬ手紙を、ニーナ教授は机身離さず持ち歩いていた。

「うわっ、と！ すみません」

ニーナ教授のことが気になりながらも、食堂から実験室に向かおうと建物内に続く出

口を潜ろうとしたとき、人にぶつかってしまった。

「ああ、うん、いいのよ……。つて、あれ？ 湯島君、だつけ？」

「湯川です」

軽く肩が当たつただけなのによろめいて、僕にしがみついて身体を支えてるの女性は、ミレーユ・シュレデインガー。

若くして生物工学の助教授をしている彼女は、国立魔法科学大学の中でも次に教授になるだろう、と目されている人物だ。

教授になれない理由のひとつに施設の不足が上げられていて、ニーナ教授が実験の内容に応じて複数の実験室を校内で占有しているため、何かと食つてかかるとのある女性だつた。

——教授になれない理由は施設の不足だけじゃない気もするけど。

ついこの前起こつた事件のことを考えると、施設の不足以外に教授になれない理由が彼女自身にありそうな気がするけど、それは口にしないのが利口というものだろう。

ニーナ教授とは違うけど、ミレーユ助教授も今日はなんかおかしい。

ただこちらは見た目でわかりやすいおかしさだ。

飾り気の多い濃紺の、スカートの裾がふくらはぎまで覆うワンピースを着、荒々しく膝裏まで流れ落ちる滝のような、ウエーブがきつめのブラウンの髪は、今日はいろんな

ところで跳ねて凄いことになつてゐる。

いつもなら人を小馬鹿にしたような高飛車な態度のことが多いのに、テンションは昨日のニーナ教授並みに低く、それを表すかのように目の下には歌舞伎役者かと思うほどくつきりとした隈ができていた。

たぶん極度の寝不足だ。

ニーナ教授はニーナ教授で胸はもちろん身体のすべてが女の子らしく柔らかいけど、美しさと同時に可愛らしさが強い。

一九歳でニーナ教授とは三歳しか違わないのに大人びた魅力を漂わせ、ニーナ教授以上の胸を押しつけるようにしがみついてきてるミレーユ教授に、僕はどうしていいのかわからず動くことができない。

「どうしたの？ 湯島、じゃなくて湯川君。浮かない顔して。何かあつた？」

「え？ 僕ですか？」

確かにいまはニーナ教授のことが気になつていたけど、ひと目で見破られるほどとは思つていなかつた。

というか顔だけなら僕よりミレーユ助教授の方が酷そうだ。

「悩み事なら聞いてあげるから、ちよつとつき合いなさい！」

「いや、僕は、ちよつとつ」

いきなりテンションが上がったミレーユ助教授は、僕の腕を引っ張っていく。
食堂から出ようとしていたのに、僕は抵抗しきれずに逆戻りすることになってしまった。

*

食前のオレンジジュースをストローですするミレーユ助教授は、顔を顰めながら呟く。

「二ーナ教授がおかしい、ねえ……」

彼女がちらりと走らせた視線の先には、紅茶を飲みながら今まで開いていた手紙をポケットに仕舞う二ーナ教授。

わざと狙つたわけではないだろうけど、入り口から少し入つた奥まつた場所にあるこの席は、二ーナ教授からは少し離れていて、気づかれた様子はない。観葉植物も置いてあるから、いまの様子ではこちらに気づくことはないだろう。

席に着いたミレーユ助教授はウエイトレスを呼びつけて、二ーナ教授ほどでないにしろほつそりとした身体のどこに入るのか疑問を覚える量の注文をした後、僕に何があつたのか問うてきた。

「いつも割とおかしいと思うけど

「いや、そうかも知れませんけど、いまはそうじやなくって……」

「少しはまともになつたとか？」

「それも違つて……。それよりも、ミレーユ助教授こそその隈、どうしたんですか？」

「ずいぶん失礼な言葉を口にする口調や表情こそいつもとそんなに変わりないが、目の下の隈はそのままだ。

ニーナ教授と同じように、ミレーユ助教授もけつこうな研究狂いで知られてる。たぶんその手の理由だろうとは推測ついていたけど、気になるので訊いてみた。

「急ぎの依頼があつて、十日ほど実験室に籠もつてたのよ。まったく、まともに寝られやしなかつたし、外に出ることもできなかつたわ。これが十日振りのまともな食事なのよ。そんなことより、ニーナ教授よ」

詳細はわからなくとも手紙が原因なのはわかってる。

おそらくプライベートなことだろから、あんまり他の人に話すべきじゃないと思つたけど、話を逸らすのには失敗していた。

「一昨日から様子がおかしいんですよ。憂鬱にしてたり、機嫌が良かつたり。手紙を見てばっかりで何も手に着かないみたいだし」

「へえ。なるほどねえ」

面白い物を見つけたように嫌な笑みを見せたミレーユ助教授は席を立つ。

「あ、料理は食べちゃダメだからね！ ワタシが全部食べるんだからつ」

「僕はもう食べましたから」

「絶対よ！」

頬を膨らませてそう言い残した彼女は、するとするとテーブルの間を縫つてニーナ教授の前に立つ。

止めるべきだつたのかも知れないけど、いまさら間に合わない。

僕が話したことがバレないよう、観葉植物の影に身体を隠して、葉っぱの間から助けが必要な状況にならないかどうか見ていてことしかできない。

いつもだつたら険悪なやりとりをするのが常なのに、注文した料理が僕の前に次々と運ばれてくる間に、ふたりはなんだか仲良さそうに話をしている。

「ねえ！ 聞いて聞いて!! 研究室ひとつ空けてワタシに譲つてくれるつて！」

満面の笑みを浮かべて戻ってきたミレーユ助教授がそんなことを言う。

ニーナ教授の方を見てみると、すでにミレーユ助教授のことなんて気にしてる様子もなく、頬杖をついてうつとりとした表情を浮かべてる。

「……たぶん憶えてないと思いますよ、何を話したかなんて。一昨日からそんな感じでしたから」

「そうでしょうね。湯川君の言う通り、おかしくなつてるわね」
 寢不足でハイテンションになつてても、さすがにニーナ教授のおかしさには気づいてくれたらしい。

キノコとベーコン入りのペペロンチーノにスペアリブ、担々麺に加え大盛り五目チャーハンが並んだテーブルに着き、ミレーユ助教授は食事を開始した。
 フォークとナイフとスプーンを駆使して上品に料理を口に運ぶミレーユ助教授は、でも恐ろしいペースで皿から食事を消していく。

「ニーナ教授は、恋をしてるわね」

大食いの人気が見せる豪快な食べっぷりとはまた違う、魔法を見てるような速度ながら優雅な動きで食事を摑り終え、ナップキンで柔らかそうな唇を拭つたミレーユ助教授は、そう言つた。

「……どうでしようか？」

「ええ、そうよ。気分が浮ついたり沈んだり、人の話を右から左に素通りしたりって、典型的な恋の症状でしよう？」

「それはまあ、そうなんですが」

得意げに話すミレーユ助教授に、僕は首を傾げることしかできない。

ニーナ教授の人気は大学の中と言わず外と言わず高いが、こと恋愛になると微妙にな

る。

尊敬や羨望、その裏返しである嫉妬の感情を向けられることは多い。けれど思慕となると、少なくとも僕が助手になつてからは数回、微妙なのがあつた程度だ。

元々人づき合いがそんなに得意でないこともあつてか、恋愛よりも研究や趣味の方に気を取られてるからか、二ーナ教授自身から誰かを好きになつたりつき合つたりという話もとくに聞いたことがない。

教授として、仕事として、友達として男の人とのつき合いはあるけど、恋愛関係で男の影を感じたことは、一度もなかつた。

むしろけつこうあからさまな言葉を向けられても、二ーナ教授が気づかなくてスルーしてしまつて、勝手に相手が玉砕するという場面が過去にあつたくらいだ。

——過去の武勇伝も関係してるんだろうけど。

二ーナ教授は過去に実力行使で自分の女にしようとした男の人に、実力行使の返事をしたことがある。

それ以来、彼女にストレートな告白をする人はいなくなつたらしい。

「二ーナ教授はけつこう恋愛音痴っぽいんですね」

「わかつたようなこと言つてるけど、湯川君はどうなのよ。恋愛経験あるつて言うの？」
「僕は一応、地元にいたときは彼女いましたよ。こつちに来るときには別れましたけど」

「……そうなの？」

僕の返事に意外そうな顔をするミレーュ助教授。

「ずいぶん失礼なことを考えてそうな気がするけど、確かにいまの僕は研究の方が樂しくて、女の子と遊ぼうという気にならないのは確かだ。」

相対的に格好も助手として失礼にならない程度にはしてるけど、オシャレに氣を遣つてるほどというほどではない。女の子に声をかけられるようなことも大学に入つてからはないくらいに。

ニーナ教授という比較対象が側にいるから、こちらから声をかけようと思える女の子がいないというのもあるかも知れない。

「地元では頭がいいってことでそこそこ有名だつたんで、それなりにモテてましたからね。まあ、こつちに来るのが決まつた時点で振られましたけど」

割と早い段階で気づいてたことだつたけど、その頃つき合つてた子はあんまりいい彼女ではなかつたらしい。

気になつて大学に入つてから地元の友達に聞いてみたら、僕が彼氏であることを自慢して回つてたそうで、連絡した頃にはもう新しい彼氏とつき合つてることだつた。

僕も決して恋愛経験が豊富というわけではない。

でもなんか、いまの二ーナ教授の様子は、確かに恋愛感情のような気がするんだけど、どこか少しづれがあるような気もしていた。

「元に手を寄せて驚いた顔をしてるミレーユ助教授に、せっかく訊かれたのだからと僕も訊いてみることにする。」

「そういうミレーユ助教授はどうなんですか？ 恋愛経験豊富なんですか？」

「え？ それは……、その、ね——」

二ーナ教授ほどではないにしろ、ミレーユ助教授だって校内で人気があつて、一九歳で助教授になるほどの天才。

二ーナ教授に比べると大人びた雰囲気と顔立ち、胸の大きさに勝るプロポーションは、女性としての魅力は充分過ぎるほどだ。

「ワタシにはほら、つき合うに足る男がいないというか、ワタシが好きになるほど魅力的な男がないというか——」

「……ははは。そうですか」

思わず僕は乾いた笑いを返していた。

突つ込まれて長いウエーブの髪を振り乱しながら慌ててるミレーユ助教授は、高慢だつたり大人びていたりするいつもと違つて、ちよつと可愛らしい。

恥ずかしそうに顔を赤くして軽く握った拳を唇に当て、そっぽを向いてるミレーユ助

教授にも、彼氏がいたことがあるつて話は聞いたことがない。

ニーナ教授と同じく研究莫迦で、ニーナ教授以上に変人入つてゐるミレーユ助教授のことを、恋愛対象としては避けてるという人が多いなんて話を聞いたことがあつた。

「そ、そんなことよりよ！ そのニーナ教授に届いた手紙の内容見て報告してちょうだい」

「……なんで僕がそんなことしなくちゃならないんですか」

咳払いをして食後のコーヒーを一気飲みした後にミレーユ助教授が放つた言葉に、僕は呆れながら返事をしてしまう。

もしあの手紙がニーナ教授の想い人から届いたものだつたとしても、それを覗き見る権利は僕ではない。

ましてやそれをミレーユ助教授に報告する義務なんてない。

口元に笑みを浮かべ、いつもの人を見下すような視線を向けてきたミレーユ助教授は言う。

「それだつたら貴方、生物工学部に来なさい。ニーナ教授のところより優遇するわよ？」
「さすがに分野が違ひ過ぎて、いまさら無理ですよ。それにいまの待遇には満足していませんし」

「ちつ」

いつも上品に振る舞つてゐる彼女にしては下品に舌打ちし、顔を歪める。

僕が専攻してゐる精神物理学とミレーユ助教授が専攻する生物工学は同じ理学部だけど、方向性はかなり違う。

魔法や超能力を扱う精神物理学は、広い視野で見れば生物工学とかなり被つてゐる部分もあるけど、僕は魔法の使い方について主に研究してゐるから、ミレーユ助教授のやつてることと重なつてゐる部分がほとんどない。

「でも、その手紙に興味はあるでしよう？」

「うつ」

復活して口元に笑みを浮かべて言うミレーユ助教授に、僕は反論できない。

恋愛なのかどうかはともかくとしても、いまのおかしなニーナ教授の様子は心配でもあるし、その原因が気になつてもいた。

「これ、ワタシの連絡先と自宅の住所よ。三日ほど休みの予定だから、覗き見ることできたら知らせに来て頂戴」

名刺を僕の胸ポケットに突っ込み、ミレーユ助教授は注文伝票を手に取つて席を立つ。

「あつ……」

その気はない、と言う暇も与えず、さつさと会計を済ませて出て行つてしまつた。

「……どうしよう」

残された僕は、顎に手を当てて考え込んでしまう。
手紙を見る権利も、ミレーユ助教授に報告する義務もない。
でも気になつてるのは確かだし、心配もある。

観葉植物の影からちらつとニーナ教授の方を見てみると、うつとりとした顔で、また
ポケットから取り出した手紙を眺めていた。

——このままじゃいけないのも、確かだしな。

積極的に覗こうとは思わないけど、見る機会があつたら、と考えてる僕は、大きくな
め息を吐いていた。

* 3 *

「ううーん」

腕を組みながら歩く僕は悩んでいた。

昨日ミレーユ助教授から手紙を盗み見るよう言われてしまつたわけだが、ニーナ教
授のプライベートに触れていいかどうかは判断がつかなかつた。

心配でもあり、気にもなつていて、でもやはり個人的なことに踏み込んでいい立場に

あるわけじゃない。助手という比較的彼女に近い立場にあると言つても、引くべき線はあるように思えていた。

まだ朝早い時間、週明けには注文していた実験機材が来て実験が再開できることを考えて、僕はまだ学生の姿もない廊下を、二ーナ教授が使っている実験室に向かつっていた。

「おはようございます」

いつもよりも早い時間なのにすでに鍵がかかっていないことを確認して、僕はそう声をかけながら扉を開けた。

「……教授？」

声をかけても反応のない二ーナ教授は、部屋の真ん中の広い実験用のテーブルとは別に、壁沿いに置いてある机に突つ伏している。

近づいてみると、寝息を立てているのが聞こえてきた。

何時からいたのかわからぬけれど、机の上にも側の床にも、スナック菓子の袋なんかが散らばつていて、空いたペットボトルなんかが散乱している。

お菓子が好きでよく食べてゐる二ーナ教授だけど、ここのことろ本当に量が増えてる気がする。口寂しいのかも知れない。

長い睫毛をしたまぶたは安らかに閉じられていて、一六歳の女の子らしいあどけない寝顔を見せていた。

いつも増して綺麗に梳かれた金色の髪が顔にかかるつていて、ただ眠つてゐるだけなのに、まるで一服の絵のように美しい。

形のいい胸は机に押しつけられて、その柔らかさを目に見える形で表している。実験室に関係のない人が入つてくることはほとんどないとは言え、女の子がこんな無防備に眠つているなんていくらなんでも不用心すぎる。

「いたずらでもされたらどうするつもりなんだ」

ふつふつといつもニーナ教授に向けているのとは違う感情が湧き上がつてきて、押さえることができそうにない。

僕は半分無意識に、ニーナ教授の顔に手を伸ばしてゐた。

「ん？」

顔に触れそなとこままで近づいて、僕は気がついた。

例の手紙が、机の上に置いてある。

見てはいけないと思いつつも、僕は手紙に目を向けずにはいられない。手に持つていた極太マジックにキヤップをしてポケットに收めながら、横開きのシンプルな封筒に注目してしまつた。

便せんも開かれたまま封筒から出され、ニーナ教授の手が置かれているていても、二枚あるそれの内容は見ることができた。

「……なんだ？　これ」

ダメだと思つていても見てしまつた手紙の内容に、僕は眉を顰めていた。

書かれていたのは数字やアルファベット、記号といったものの組み合わせ。

薄い罫線に沿つて書かれたそれは手紙の文面のように思えるけど、僕には全く内容がわからなかつた。

「何かの暗号？　いや、でも……」

無意味な文字列ではなく、なんとなく法則性があるのはわかるから、たぶん何かの文章だ。

でも暗号とは違うような気がする。あくまで勘だけど、この数字とアルファベットと記号の組み合わせで、文章が出来上がつてるようだ。

強いて近いものが上げるなら、プログラムのコードに似ているかも知れない。かといつてプログラムコードほどの明確な記述法があるものとも違う。

プログラムコードに近い言語で書かれた散文、まさに文章といった風体のものだつた。

ただ一ヶ所だけ、僕にもわかることが書かれていた。

——これは、時間と場所、だよな。

場所については座標で書かれているから調べてみないとわからないけど、時間について

てはひと目でわかる。明日の午後だ。

「本当にこれは、いつたい何なんだ？」

恋する乙女のようになつた二一ナ教授。

その原因となつた内容不明の手紙。

そして送り主から指定された日時と場所。

心配や気がかりとは別に、僕はいま起こつていて、不安を覚え始めていた。

*

スカイプラチナタウンの町並みを、最高速度は音速を超えられるダブルサイクロンホウキに乗つて、僕はできるだけ気を遣つて慎重に飛ぶ。

超高級住宅街であるここは、国立魔法科学大学周辺の積層構造物がそそり立つ町並みと違つて、閑静な住宅街だ。

空路は一直線に伸び、空に浮かぶ建物はすべて一軒家。庭園プレートに綺麗な庭をつくつてる家も多く、一軒一軒が上下左右充分な距離があり、建て売りの高級住宅街とも違い、左右の家の区画は接続されず小道になつていて、家の形はそれぞれに違う。

こんなに空間を贅沢に使つているのは本当に上流階級の人たちが住んでる家だけで、

とてつもなく贅沢なことだ。

ホウキに乗つてすれ違う人たちも明らかに貧乏学生の僕とは違う人種で、場違いさに緊張してしまう。

でもこの町の中に、僕の目的の場所がある。

「ええっと、ここだな」

過去最低だつたんじやないかと思うほどの低速安全運転でホウキを操つてたどり着いたのは、この町の中では比較的小さな家の前。

それでも前庭は綺麗に調べられていて、建物は僕が住んでるぼろアパート一棟分のモジユールよりも大きいかも知れないほどだ。

魔法町じや見るのも珍しい門の前に降り立ち、僕は呼び鈴を鳴らした。

「——ようこそいらっしゃいました。湯川様、でいらっしゃいますね？」

比較的狭いと言つても軽くボール遊びくらいできそうな前庭の向こうの建物から顔を見せたのは、にこやかな笑顔を浮かべた女性。

いや、門の前までやつてきた彼女の目は、カメラアイ。

清楚な黒いワンピースに胸までを覆う白いエプロンを身につけた彼女は、おそらく口ボットメイドだ。

「あ、はい。ミレーユ——、シュレデインガー助教授はいらっしゃいますか？」

「——在宅しております。湯川様がいらっしゃいましたら通すよう言いつかっておりますので、どうぞ」

プログラムされているんだろうけど、ずいぶん丁寧な対応で門を開けてくれたロボットメイドの後を着いていく。

——このロボットメイドは、デジタル人工知能で動いてるんだよな。
目の前で揺れているポニーテールの髪を見ながら、僕は少し前にニーナ教授とした話を思い出す。

表情も口調にも違和感はないけれど、どこかつくりもの染みた感じのするロボットメイドは、人間や真空管ドールと違い、デジタル人工知能で稼働している。

人間の精神や真空管ドールのアログ人工知能と、ロボットのデジタル人工知能の違いは魂があるかどうか、なんて議論もあるようだが、あまりはつきりしたことはわかつていいない。

真空管ドールもまた工場で生産されることには変わりないから、その違いは魔法が使えるか否かの差以外には詳しいことはわかつていなかつた。

案内されて玄関から家の中に入つた僕は、思わずぽつかりと口を開けてしまつた。

——お金持ちだつて噂は、本当だつたんだな。

ミレーユ助教授の家はもの凄いお金持ちだつて話は聞いたことあつた。それは嘘でも冗談でもなかつたらしい。

こんな高級住宅街に住んでいるのもそうだけど、綺麗な家の内装も、かなり高級そつた。それも彼女はここにひとりで暮らしてゐるという話だつたはずだ。

「——こちらです」

案内してもらつた二階の一室。

ロボットメイドの微笑みに促されて、僕は櫻か何かの分厚い扉のノブに手をかけて中に入る。

「——お嬢様。湯川様をお連れしました」

この部屋だけで僕のぼろアパート一室の三倍の床面積はありそうなそこは、どうやら寝室だつたらしい。

足が沈み込む感触のある絨毯の上、部屋の真ん中に置かれた天蓋つきのベッドでもぞと動いて起き上がつたのは、ミレーユ助教授。

「ん……。湯川君？」

「うお！」

乱れ放題の髪で、まだ目を閉じて眠そうな顔をしてゐるミレーユ助教授が來てゐるドレスのようなネグリジェは、肌が見えるほど透けていた。

「え？ やつ。あの、僕は——」

「よく来たわね。ふわあーっ」

大きな欠伸をしてベッドから下りた彼女は、一昨日あつた目の下の隈もすっかりなくなり、目のやり場に困つてそっぽを向くことしかできない僕に微笑む。

「少し待つていて頂戴。すぐに着替えるから」

「あ、はい。わかりました……」

見ているこつちが恥ずかしいのに、当の本人は少しも恥ずかしがつてる様子がない。上流階級の人にはプライベートの場所では肌を晒すことあまり恥ずかしがらないらしいという話を聞いたことがあるけど、ミレーユ助教授もそうなのかも知れない。

もちろんそれなりの相手に対しては羞恥心を感じるものみたいだけど、僕のようなんだの学生程度にあられもない姿を見られるのは気にならないなんだろう。

ロボットメイドに促されるよりも先に部屋を出て、僕はひと息吐いた。

客間に通してもらい、淹れてもらつた美味しいコーヒーをすすつていると、ずいぶん時間が経つてからロボットメイドとともに、シャワーでも浴びてたらしさいきっぱりしたミレーユ助教授が入ってきた。

「お待たせしたわね、湯川君。ふわあ、ふわあーーっ」

まだ眠たいらしく、手を添えてはいるけれど大欠伸をする彼女。

大学内で見る姿と違つて、助教授らしさも品のある雰囲気もあまり感じないいまの様子が、もしかしたら本来の、一九歳の女の子であるミレーユ助教授の姿なのかも知れない。

「いつたいいつから寝ていたんですか」

「帰つてからずつとよ。一昨日貴方と別れて家に帰つてから、ずっと」

「……よく寝ますね」

「そりやあ十日も籠もつててまともに眠れないで過ごしていればね。聞いてよ、湯川君！」

思わずしてしまつた質問に食いついてきたミレーユ助教授。

僕と同じくロボットメイドからコーヒーをカップに注いでもらつた彼女は、身を乗り出すようにして話を始める。

「十日前、もう十二日前ね。超特急つて依頼が入つたのよ」

「依頼、ですか？」

「そうよ。大学だから主にやつてるのは研究だけど、企業から調査の依頼や、場合によつては個人からの依頼も入ることがあるのよ。うちはけつこう外部にも知られてるところだし、手広くいろんなことやつてるものだから、そういう依頼もあつたりするの。その依頼、いつたいどんなものだつたと思う？」

「いや、さすがにわからないんですけど」

精神物理学専攻の僕は生物工学の方面については詳しくない。表に出てくる成果くらいはチェックしてるけど、日夜どんなことやつてるかまでは確認したことはなかった。

それにミレーユ助教授は大学内でも有名だけど、彼女自身がどんなことをやつてるかまでは、同じ校内のことであつても、秘密にすべきこともあるだろうから、耳にしたことはない。

「成人男性の身体の生成よ」

「……それって、大丈夫なんですか？ 法律とか、そういうのは」

「問題ないわよ。人工クローンはとくに違法ではないし、内臓や欠損四肢の補填のために医療の現場では広く使われているもの。全身のクローンをつくることも、実験目的などでつくられるものもけつこうあるのよ」

「そんなもんなんですか」

言われてみれば、確かに治療方法として疾患のある内臓をクローン生成したものに取り替えたり、失った四肢をクローン生成で再生させるようなものは、けつこう使われていることを思い出す。

歴史の授業で習ったのでは、昔は人工クローンについては倫理問題でずいぶん紛糾し

たようだけど、いまの技術ではごく一般的なものだし、宇宙に出てしまえば地球の中の倫理なんて大きな問題になるようなことでもない。

新しいコーヒーを注いだカップを片手に、得意げな笑みを見せるミレーユ助教授は話を続ける。

「でも宇宙には自然生殖の原則はあるのは知ってるでしよう？」

「ええ。でもあれは法律ではないのですか？」

「違うわよ。法律に近い形で扱われてはいるけれど、罰則があるようなものではないし、明確にクローリンの生成について禁止した法律は存在しないわ。ただ、あの原則がある限り、人工クローリンによる生殖活動は行われることはないでしようね」

自然生殖の原則は、割と宇宙では守られているものだ。

この宇宙には自家クローリンによつて増殖する人間もいるし、そもそも生殖活動を行わない生物すらいて、古くから生成槽を使つて子供をつくるのが普通の星もある。

凄いのになると超長寿命で、自己進化して一個体一種族なんてのまでいる。そうした生物でも他の個体と交わつて、恐ろしく低い頻度で進化の素体となる子供を生成してたりする。

宇宙の広さは飛んでもない。

「禁止はされていいけれど、全身の人工クローリンは犯罪に使われる可能性も高いもの

だから、監視は厳しいのよね。ちゃんとした理由とはつきりした身元があれば問題にないことはないわ」

「そんな面倒な依頼をどうして受けたんですか？」

「仕方なかつたのよ。ワタシがお世話になつた恩師の教授の姪に当たる人からの依頼ですね。断るわけにはいかなかつたの。うちの教授は面倒臭がつてどこかに逃げちゃうし。センサーの邪魔にしかならないから、実験用の全身クローンなら絶対つけないけど、髪の長さもこれ以上とか、筋肉量は充分にとかつていろいろ細かく指定されてて、繊細な作業と頻繁に監視が必要だつたから、学生に任せられるような仕事でもなかつたのよ。結局ワタシがほとんどひとりでやることになつたの」

「それで十日間も泊まり込みですか」

「そつ。本当大変だつたわよ……」

そう言つて大きなため息を漏らすミレーユ教授。

あんなにくつきり隈が出るほどだつたのだから、その苦労はだいたいわかるというものがつた。

今日の用事とは関係のない話だつたけど、だんだんと興味が出てきて、僕は思わず訊いてしまう。

それで、そんな全身クローンなんてつくつて、何に使うつて言うんです？ まさか、身

体を入れ換えて延命、とか?」

「さあ? そこまでは聞いてないけど、実験目的らしいわよ? それにやつぱり禁止はされていいけれど、全身クローンへの身体交換は受ける医療関係者はまずいないわよ」

「そうなんですか?」

髪や筋肉にまで気を使つて生成される成人男性の全身クローンの使用目的なんて、僕には身体の交換しての延命くらいしか思いつかなかつた。

あつさりそれを否定するミレーユ助教授は、三杯目のコーヒーにミルクと砂糖をたっぷり入れて、ひと口すするようにして飲む。

「身体交換はある意味究極の延命手段だけど、難易度が高すぎるのよ。いまの技術を以てしてもね」

「へえ」

「実験だけなら以前から行われてて、手段は主にふたつ。ひとつは古い身体から新しい身体に脳を物理的に移植する方法。移植手術自体は可能なのだけれどね、どうしても上手くいかないのよ」

「どういうところがです?」

「老いた古い身体と、若い新しい身体では、他人の身体ではないから違和感はそれほど大

きくないはずだけど、その小さな違和感が精神に影響して、ほぼ全員が病んでしまったの

「なんでもた。四肢とかだと大丈夫ですよね？ 身体の一部を機械化してる人もいるのに。それに比べればまだ違和感少ないから、大丈夫なものなんじやないですか？」

「そこは難しいところだね。大きな違和感はそのうちその違和感を含めて自分の身体の一部と認められるようになるものなんだけど、小さな違和感がずっと長く続くというのは堪えられないものみたいでね」

「なんででしょ？」

「詳しいところはまだわかつていないけれど、強い痛みは何度も受けていると覚悟ができると言うか、そのうち我慢できるようになるものなの。でも小さな痒みは我慢できない、というのに近いらしいわね」

「なるほど。確かに痒みって我慢できませんよね……」

本当にその通りなのかどうかはわからないけど、痛みより痒みが堪えられないというのは何となく納得できた。痒みは長く続くと気が狂う人がいるくらい堪えがたいものだと聞いたことがある。

「もうひとつの方方法とは？」

「もうひとつは、脳情報の転写よ」

さつきまでの眠かった様子もなく、話してゐる間に瞳に楽しそうな光りを宿したミレー
ユ教授。

「記憶の、ですか？」

「いいえ、違うわ。脳は記憶だけでは機能しない。脳神経同士の接続構造によつて思考
も変化するの。脳情報を転写する場合は、脳のそうした神経接続網をすべて記録して、
新しい身体の脳に時間をかけて転写、というか再構成するものなんだけど、再現率が九
〇から九五パーセントくらいなのよ」

「それじゃあ足りないんですか？」

「全然。脳神経の接続が二パーセントも変われば、人は別人つてくらい性格や能力が変
わつてしまふのよ。最低でも九九パーセントを超えないと実用とは言えないわ。それ
に延命に使うとなると、何世代か脳情報の転写で延命し続けることも視野に入れないと
いけないけれど、第一世代の段階で別人を生み出すことになつてしまふからね。最小で
も五パーセントも不足するのでは、まともな病院ではよほどそれ以外に方法がない場合
を除けば受けないわね。闇医者とかなら別でしようけれど。だからいま延命のトレーン
ドは、身体の機械化や薬を使つた外部手段、人間由來の強化細胞の移植とかDNA改造
辺りね」

生物工学の助教授だけあつて、生物に関する話となるとミレーユ助教授は饒舌になる

らしい。

「それじゃあ本当に、何のためにそんな細かい指定の全身クローリンの生成なんて依頼してきたんでしょう？」

「さあね。こちらとしては犯罪利用の可能性が出てくるようなものでなければ問題はないわ。フルカスタムDNAの成体クローリンだから、その手の可能性は低いでしょうし、直接でないにしろ、恩師に恩返しもできたしね」

「そんなもんですか」

「そういうものよ」

意外とそういうところはドライなんだな、と思いながら、僕は温くなつてきたコーヒーを飲み干した。

「それで、今日の用事は、例の件じやないの？」

「あつ。そうです。例の手紙の件なんですが……。つて、もうこんな時間？　ええつと、ニーナ教授が待ち合わせの時間がもうすぐなんです。細かい話は行く間に話しますから、ちよつと来てもらつてもいいですか？」

「ええ、もちろん行くわ。ニーナ教授の男関係が見られるんだもの、行くしかないわよ」

尻尾と羽根でも生えてきそうな暗く意地悪な笑みを見せるミレーユ助教授に、僕はちよつと後悔する。

でも今日のことは僕ひとりではわからなすぎて、「スキャンドルよ、スキャンドル！」と声を弾ませてるミレーユ助教授とともに、反重力ホウキを持つて外に出た。

* 4 *

調べてわかつた手紙で指定された座標は、大学内の食堂だった。一昨日昼食を摂った場所。

秘密の話でもするだろうに大丈夫なんだろうかと思うけど、一年中二十四時間出入りが可能な国立魔法科学大学と言えど、週末と深夜は人が減る。

週末の今日、昼食時からも外れたこの時間に食堂にいたのは、早々に食事を摂つてさつき出ていつてしまつた学生と、ニーナ教授、そして僕たちだけだつた。

先に来ていて外に面した、直接ホウキで乗りつけられるテラス近くの席に、緊張した面持ちのニーナ教授が座つている。

指定の時間にはまだ少し余裕があり、どうやら待ち合わせの人はまだ来ていないらしい。

そこから少し離れた、教授からは見えない斜め後ろの席に、僕は興奮を抑えきれないらしいミレーユ助教授とともに座つてコーヒーを注文した。

最初に注文したジュースは早々に飲み終え、ボトルごと置かれた水をコップに注いで、何度も飲んでいるニーナ教授。

指定時間きつかりに、外のテラスにふわりと反重力ホウキで乗りつけたのは、僕より年上の、二十代半ばくらいに見える爽やかな青年だった。

——あれは……、マヅダのスカイスター？ またずいぶん渋いホウキには様々な方式がある。

魔法町で一般的な移動手段として普及しているホウキには様々な方式がある。僕が使っている魔法力から直接推進力を得るサイクロン系ホウキの他に、多くのホウキでは魔法によって反重力を得てイオン式やジェット式で推進を行う。人間の弱い念力を增幅するホウキの増幅方式も様々だ。

マヅダのスカイスターの一般走行用モデルは、ロータリーア式の念力増幅器を搭載した形状が特徴的で、レース用の高出力ジェットをデチューンして推進に使っている。

ただしロータリーア式増幅器は、起動念力の閾値が高く、使用者を選ぶことで有名な上、操作も一筋縄ではいかない暴れ馬で、レース仕様の出力と整備のしにくさも相まって、マニア向けのホウキとして知られていた。

そんなピーキーなホウキを優雅に乗りこなしてテラスに降り立つた男性を、僕は観葉植物の影からじっくり観察する。

——あの人ガ、ニーナ教授が好きな人？

少し離れてこの場所からでもわかる柔らかな笑みと雰囲気の彼は、軽く手を上げながらニーナ教授の席に近づいていく。

教授は慌てて椅子から立つて、たぶん久しぶりだからだと思うけど、顔だけじゃなく、全身を上から下まで何度も眺めていた。

「けつこう、いい感じの人ですね」

そんなに気を遣つてないのもあるけど、自分の容姿にさほど不満を感じたことがなかつた僕でも、ニーナ教授のお相手には劣等感を抱いてしまうほどだった。

何より彼が纏う雰囲気が、貧乏学生とは違つて余裕があり、大人びた貫禄を漂わせている。

別にニーナ教授のことが好きとかそういうことではないが、自分より明らかに格上と感じる彼に、抱いてしまった敗北感を拭えずに小さく息を吐いていた。

「そうね。いい感じね。……ふんっ」

「ミレーユ助教授？」

僕の声に答えた彼女は、先ほどまでの鼻息の荒かつた様子はなく、伺い見てみると眉根にシワを寄せ、不機嫌そうに顔を顰めていた。
話し込んでニーナ教授に気づかれてしまうのもまずいと思つて、ミレーユ助教授の様子が気になつたけど、僕はニーナ教授の方に注意を戻した。

最初の緊張はほぐれたのか、和やかに話をしてるふたり。

そのうち鞄から取り出したノートにお互いに何かを書きつけたりして、話というか議論を交わすようになつた。

——研究仲間？ いや、でもな……。

学者だけあつて、ニーナ教授は同じ分野の学者や生徒と議論を交わすこともある。でも彼女の場合、他の人より一歩も二歩も進んだことをやつてはいるが、特殊な方面に手を伸ばしてることが多いから、まともな議論がやりとりできる相手というのはけつこう限定される。

学内では研究に関する議論を交わせる人は何人かいるけど、それは僕が全部把握してる。外部の人でも連絡取り合つてゐる人については、会合の際などにスケジュール調整しなくちやならないこともあるから、顔と名前と連絡先はだいたい憶えてる。

あんなに若くてニーナ教授と熱く激しい議論を交わせる人物を、僕は知らなかつた。小一時間ほど喧嘩じやないかと思えるほど激しいやりとりに発展した議論の後、ノートを仕舞つたニーナ教授と彼はそれ以前の雰囲気に戻り、新しく頼んだ紅茶を飲みながら笑顔を交わし合う。

——でも、違うな。

にこやかな笑顔を浮かべてるニーナ教授に対して、男性の方は笑顔ではあるけど、どう

こか影が差しているように僕には思えていた。

まだ続いてるふたりの話は、そこから段々と雲行きが怪しくなつていった。

何かを諭すように話して見える男性に対し、声こそ聞こえないけどニーナ教授は怒つたような表情をし、それは段々と落胆へと変わっていく。

そして、新たな人物が反重力ホウキに乗つて現れた。

「やつぱり……」

「え？」

ワインレッドのロングスカートを穿き、地味めのジャケットを羽織る清楚な感じな女性を見て、ミレーユ助教授が呟くように言う。

それを問うより先に、迷うことなくニーナ教授のテーブルに歩み寄った女性は、男性の隣に立つ。

椅子から立ち上がった彼は、女性に寄り添うようにして、彼女と手を繋いだ。

見た目には同じ年頃のふたりは、僕の目からでもお似合いの恋人同士に見えた。

「これは……」

もう結論を言葉にしなくともわかる。

ニーナ教授は何かを飲み込むように目を強くつむつた後、微笑みを浮かべてふたりのことを見た。

そんな教授に深く頭を下げ、ふたりは手を繋いだままテラスに出て、互いのホウキに乗つて飛び去つていった。

どさりといつた感じに椅子に身体を預けたニーナ教授に、僕は立ち上がって側に寄つていくことも、声をかけることもできなかつた。
でもミレーユ助教授は立ち上がる。

「行くわよ」

「え？ でも……」

誰に對してなのかわからない怒りの色を瞳に浮かべ、僕のことをちらりと見た彼女は、それ以上何も言わずにニーナ教授の方に行つてしまつ。

ふたりだけにできなくて、僕も席を立つてふたりの元に急ぐ。

「聞かせてもらうわよ、ニーナ教授」

「ミレーユ助教授？ ……湯川君も？ どうして？」

「そんなことはいまはどうでもいいでしよう。あの男は誰なの？ いえ、何なの？」

「——じゃあ、あの身体をつくつたのは、貴女なのね」

「そういうこと。事と次第によつては警察沙汰にもなりかねないんだから、ワタシには聞く権利があるでしよう？」

一度うつむき、唇を噛んで何かに堪えるようにするニーナ教授は、顔を上げていまに

も泣きそうな微笑みを浮かべた。

「うん……。そうね。わかつたわ」

丸テーブルのニーナ教授の正面にはミレーユ助教授が座り、僕はふたりと同じ距離の位置に座る。

当事者でも関係者でもない僕がこの場にいるのは居心地が悪いけど、いまさら席を立つわけにも行かないし、何があつたのかは知るべきであるように思えた。

「何から話したらいいのかな……」

「最初から話なさい。全部聞いてあげるから」

「うん……」

怒つてるように眉根にシワを寄せているミレーユ助教授だけど、その口調は荒々しくはない。

諭すように言つたその言葉に、表情を曇らせたままのニーナ教授は話を始める。

「あれは、もう十二年前の話。まだその頃は本格的なことはやつてなかつたけど、興味のあることを調べたり、自分なりに実験やつてたりしたのよ」

十二年前と言えばまだニーナ教授が四歳の頃。

確かにその頃合いから精神物理学やその周辺に關することで名前が知られるようになつたと、僕の記憶にある。天才としてはもう少し前から名が知られていたけど、具体的な成果があつたわけじゃない。

脳N A Sにアクセスしてその頃のことをいま調べてみたけど、ニーナ教授の成果が表で発表されたのは五歳のときがたぶん最初だ。四歳のとき、彼女が何をやつていたかまではわからない。

「そのとき興味があつたのは、人間の精神とデジタル人工知能の違いについて。人間は魔法が使えるけど、デジタル人工知能は使えない。その違いがどこから生まれてくるのか調べるために、あるものをつくったの」

「あるもの、と言うと？」

思わず突っ込んでしまつた僕に、優しげな笑みを浮かべるニーナ教授。
でもその笑顔は悲しげだ。

この前、手紙が届いた日に僕に話しかけてきたことは、もしかしたらこの話と、あの男性に関係があつたのかも知れない、と思い至る。

「そのときつくつたものに、私は電子網遊弋型自己進化人工知能、と名前をつけた」「それって、もしかして？」

「……何よ、それ」

僕はその名前からだいたいどんなものか予測がついたけど、生物工学専門のミレーユ教授にはわからなかつたらしい。きよとんとした顔で僕とニーナ教授の顔を交互に見ている。

口が重いらしいニーナ教授に代わつて、僕が説明する。

「たぶんですが、一種のコンピュータウイルスです。名前からしてネットの中を自由に動き回つて、状況に応じて進化していくタイプの」

「あくまでつくつたのは人工知能で、何かを壊したり盗んだりするウイルスじやなかつたんだけどね」

「それでも端から見たらウイルスつて判断されますよね」

「そうね。最初に与えた命令や、進化の方向によつては充分ウイルス化する可能性はあつたしね。あれのはそういう進化をするような命令を与えないけど」

紅茶をひと口飲んで唇を濡らしてから、ニーナ教授は話を続ける。

「あの頃はまだ、やっていいこととか悪いこととかの前に、知らないこと、知りたいことに全力だつたからね。四歳だつたけど女の子だつたし、男の子にも興味はあつたんだけど、同じくらいの歳の子とは話が合わなくなつてね。話が合うくらいの歳の人はずいぶん年上ばかりで、ちよつと悩んだりしてたの。だから電子網遊弋型自己進化人工知能に与えた命令は、十二年後、話の合う素敵な男になつて、戻つてくること」

いまにもこぼれそうなほどの涙で瞳を揺らすニーナ教授は、それでも嬉しそうな笑みを浮かべる。

「その命令は、正しく果たされた。素敵な男になりすぎて、恋人までつくつて戻つて来ちゃつたんだけど」

こんなにつらそうな笑顔を、僕はこれまで見たことがなかつた。

泣きそうなのに、必死で笑顔を浮かべているニーナ教授は、まるで大声で泣き叫んでいるように僕には見えていた。

ニーナ教授が恋をしていたのかと問われれば、僕にはそれに対して答えられる言葉がない。

そうであつたのかも知れないし、そうでなかつたのかも知れない。

ただ彼女は、この十二年の間、彼が自分の元に戻つてつて來ることを、期待していたのは確かだ。

「彼がこつちのことを探つてる感じがあつたのは、何となく気づいてた。たぶん彼だろう、つて。それで戻つてきた彼は、同じ精神物理学を勉強してて、さつき話してて、凄い知識を持つてるのも確認した」

本当に嬉しそうな、満面の笑みを浮かべてるニーナ教授は、もう抑えることができず、涙を頬に零れさせる。

「たぶん、理想の男つて言えるくらいの人になつてた」

「でもあいつは貴女とじやなく、あの女性と一緒になることを望んだんでしょ？」

「それで黙つて聞いていたミレーユ助教授が口を開く。

「うん、そう。精神物理学をいま以上に研究するためには、身体が必要だつたんだつて。それでネットでたまたま知り合つたあの人に助けを求めて、デジタル人工知能の自分を認めてくれて、……お互い想い合える存在になつていつたそうよ」

「さつきの女性はワタシの恩師の姪に当たる人よ。確か外神田魔工学大學で精神物理学の教授をしてたはずで、聞いた限りではずいぶんヘンな発想をする変人だと聞いてるわ」

慰めてるわけではない様子の、澄まし顔で女性の素性を明かすミレーユ助教授。

変人つて意味ではそんなデジタル人工知能をつくつた二一ナ教授も、全身クローンをひとりでつくつてしまふミレーユ助教授も負けていなさそうな気がしたけど、あえて僕はそれを口にしないことにした。

「彼は言つたわ。この人と一緒に生きたい。この人と一緒に歩んでいきたい。そのために人間の身体と、有限の寿命を手に入れたんだ、つて。それから最後に、つくつてくれてありがとう、つて……」

笑つてることもできなくて、両手で顔を覆つた二一ナ教授は嗚咽を漏らし始める。

「……でも、あの人は反重力ホウキに乗つてましたよね？ デジタル人工知能じや魔法は使えないんじやなかつたでしたつけ」

「そう思えばそんな話も聞いたことあるわね。ほほ人間の身体に電腦を乗つけても魔法は使えなかつたはずよ」

僕が口にした疑問に、ミレーユ助教授も首を傾げる。

「どうして魔法が使えるようになつたのかはわからない。元がデジタル人工知能でも、進化して得たのかも知れないし、ネット上では無限だつたはずの彼が、人間の身体を手に入れて有限の存在になつたからかも知れない。でも、それはもうあのふたりが追求すべき研究テーマね。こつちは別のアプローチで調べていくしかないわ」

目を真つ赤にしながらも、顔を上げたニーナ教授が言う。

笑おうとしてるみたいだけど、頬がひきつって上手く笑えていない。
無理して笑おうとしても、零れてくるのは笑みじやなく涙ばかりだ。

「はあ、まつたく……」

鬱陶しそうに頭を搔いたミレーユ助教授が、盛大にため息を吐く。

「つまり貴女は、失恋したつてことね？」

「失恋とは、ちよつと、違うと思うけど……」

「好きだったかどうかは知らないけど、気になる男に恋人がいたんでしょ。それで泣い

てるなら、それは失恋って言うの。少し違うと言つても、少しだけでしょ。だつたらそういうこと」

反論の言葉が思いつかなかつたらしく、ニーナ教授はうつむきながら唇を引き結んで押し黙る。

そんな様子をちらりと見たミレーユ助教授は、手を上げて店員を呼んだ。

「いま、ケーキバイキングは大丈夫?」

「はい。承つております」

「じゃあそれを三人。大至急よろしく」

「かしこまりました」

丁寧な口調で答えた女性の店員は、早速奥に下がつて準備を始めたらしい。

「ここ」のケーキは美味しいのよ。普段も出してるけど、パティシエが鬱憤溜まるとケーキを大量につくつて、そのときだけゲリラ的にケークバイキングが開催されるの。今日やつてるなんて運がいいわね

「いまはそんな気分じゃないんだけど……」

「鬱憤が溜まつたり、気持ちが沈んではときは美味しいものをやけ食いするのが一番よ。奢つてあげるから吐くまで食べなさい」

そんな話をしてる間に運ばれてきたのは、カットはしてあるけどホールケーキが三

つ。

この時点で食べきれる気がしない。

「やけ食いはいいんですけど、どうして僕まで……」

「ここまで関わったんだからつき合いなさい。男の子なんだからたくさん食べられるでしょう？」

「うう……」

甘い物は好きだけど、そんなにたくさん食べる方じやない。

鼻歌を歌いながらチーズケーキに手を伸ばしているミレーユ助教授に、僕も覺悟を決めてショートケーキを小皿に移し、フォークでひと切れ口に運ぶ。

「――美味しい」

生クリームは甘いのにしつこくはなく、舌の上でとろけるよう。スポンジの控えめな甘さと、酸味が強めのイチゴともマッチしていた。

ニーナ教授の方を見てみると、チョコレートケーキを口に含んで、赤いままの目を見開いていた。

「もつとじゃんじゃん持ってきて！」

ミレーユ助教授の声に新たに運ばれてきたフルーツタルトと巨大なプリンアラモード。

夕食も入らなそうなその量に何も言えなくなる。

ニーナ教授の方を見ると、僕と視線を合わせた彼女は、少し寂しそうではあつたけど、自然な笑みを見せていた。

「はあ……」

大きくなめ息を吐いた僕は、小皿のショートケーキを一気に食べて、フルーツタルトに手を伸ばした。

そこからはケーキが運ばれてこなくなるまで、僕とニーナ教授とミレーユ助教授は、食べて食べて、ひたすら食べまくつた。

* 5 *

「苦しい……」

昨日食べたケーキはどれくらいの量だつたろうか。

二ホール食べた段階で数えるのは止めた。

胃薬を飲んで寝たのにまだ重くてたまらない胃を抱え、濃いめのコーヒーを何杯飲んでも甘つたるさが残る口を引き結びながら、僕はまだ朝早い大学内を歩く。
「おはようござります」

すでに解除済みの鍵を確認し、扉を開けると、どこか懐かしむような目で手紙を開いているニーナ教授がいた。

「おはよう、湯川君」

手紙を封筒に収めて机の引き出しの中に仕舞つた彼女は、椅子から立ち上がりつて僕に微笑みをくれる。

その目は、まだ微かに赤い。

でもいま浮かべている笑みは、それ以前の彼女の浮かべるものに相違なかつた。

「そう思えば実験器具の到着が遅れてるって話だつたと思うけど、いつ届くの？」

「予定では明日です。今日はまだ、何もできませんね……」

「じゃあ今日は明日の準備しかできることないかな。湯川君、お願ひね

「……僕に丸投げですか」

「ふふつ」

仕事を僕に丸投げしてくるニーナ教授にげつそりしながらも、本調子を取り戻したらしいことに安堵を覚える。

——やつぱり、ニーナ教授はこうでなくちゃね。

ため息を吐いた後、僕も笑みを返していた。

「でも今日はどうしようかしらね。他の仕事も朝のうちにあらかた片づけちやつたし、

やることないのよね」

「少しは実験の準備しましようよ」

「ううーん。それに、ちょっと困つてるのはよね」

僕の提案なんて右から左に聞き流したらしい二ーナ教授は、顎に手を当ててなにやら考え込む。

「どうかしたんですか？」

「昨日ケーキ食べすぎて、体重計が怖い……」

やけ食いの成果が身体に表れるのは仕方ないことで、それを女の子が気にするのも当然のことだ。

それでもやつただけの意味はあつたようだし、肉さえ増えなければ問題ないことだろう。

——二ーナ教授はもう少しふくらしても良さそうだけど。

胸はともかく腕も脚も細い彼女は、もう少し柔らかい身体をしてても良さそうだとは思う。でも女の子なのだから、体重はどうしても気になるのは仕方ない。

「だつたら後でお空場でも行きませんか？ 夏にプールだつたブロツクを改装したフィールドアスレチックが先日オープンしたばかりなんですよ。障害ホウキレースなんかもできるみたいですし、魔法使つたり身体使つたりすれば、カロリー消費しますよ

ね

「いいわね、レース。負けないわよ」

意外と負けず嫌いのニーナ教授は目を不適に輝かせて乗つてくる。

僕だつてダブルサイクロンホウキのマスターだ。負けるつもりは欠片もない。
対抗意識を燃やす僕とニーナ教授は、攻撃的な笑みを交わし合つた。

「そこに行くなら、ミレーユのことも誘つて上げようかしらね」

「いいですね」

「き、昨日奢つてもらつたからだからね！　ミレーユに貸しをつくりたくないだけだからね!!」

聞いてもいらないのに理由を述べるニーナ教授に、僕はちょっと笑いそうになつていた。

——うん、いつも通りのニーナ教授だ。いや、これまでとはちょっと違うか。

今まで通りの様子だけど、これまでとは少しだけ変わった彼女。

まだ一六歳の彼女は、これからもいろんな経験をして、変わっていくんだろう。これからもつと素敵な女性になつていくんだろう。

僕もまだこれから、いろんな経験をして、いろんなことを知つて、より僕らしい僕になつっていく。そのつもりだ。

デジタル人工知能になんて負けていられない。

「だつたらさつさと出かけられるよう、準備手伝つてくださいよ」

「えーーっ。うう……。あ！ そうだ。ミレーユのこと誘つてくるから、その間に準備お願いね！」

そう言い残して、僕とすれ違つて小走りに実験室から出て行つてしまふ。

すれ違い様、彼女が残していくた「ありがとう」の言葉を胸に抱きながら、僕はもうひとつため息を漏らして明日の準備を開始したのだつた。

「相思創A.I」 了

第三話 「色即乙喰」

「色即乙喰」

* * *

「マズいな……」

老若男女の「人間」はもちろん、グレイ型や鬼型、岩石型などの様々な生徒や教師や関係者が行き交う廊下を歩きながら、僕は小さくつぶやいた。

鼻がむずがゆい。

肌がかゆいなら搔けばいいが、くしやみが出るほどでないむずむずがあるのは、鼻腔の奥だ。指を突っ込んでも解消できるものじやないし、こんな人が多い場所でそんなことはできない。

そもそも鼻の穴に指を突っ込むなんて品のないことは、若干一六歳にして国立魔法科学大学の学長を務めるニーナ・アインシュタインの助手たる僕が、できるわけがない。

それはニーナ教授の品位も落とすことになりかねない。

——できるだけ草のあるところは避けてたんだけどなあ。
十月もまつただ中、秋本番のいま、僕は自分の身体が花粉症にさいなまれてることに気がついた。

鼻炎の薬でも準備しておけば良かつたんだけど、イネ科の植物で起ころる秋の花粉症は、スギ花粉で起ころる春のと違い、飛散距離が短いためアレルゲンに近づかない限り起こりにくい。

油断していた僕は、薬の準備をしていなかつた。

「ああ、湯川君」

これからニーナ教授のどこに行つて気の重い報告をしないといけないのに、と思つてる僕の気をさらに重くさせる事実に顔を顰めていたとき、声をかけられた。

正面からやつてきたのは、僕と同じくらいの、女性としては背が高い人。

濃い紫の足首丈のワンピースは、レースや襞で飾られ、ニーナ教授に通ずる、ロリータではないがゴシックな雰囲気を醸し出している。

綺麗なウエーブを描く、荒々しい滝のような長い髪をしたその女性は、ミレーユ助教授。

以前はニーナ教授の関係者ということで、見かけても睨まれたり無視されたりするこ

とが多かつたのに、つい先日のA-Iの事件以来、割と気さくに声をかけてくれるようになつていた。

助教授という役を担つてゐるんだから考えれば当然だけど、噂ほど子供っぽかつたり悪い人ではないらしい。

ニーナ教授と仲が悪かつたのは、やつぱり自分の研究室を持ちたいという向上心とうか、功名心だかがあつたからのようだ。見知つてみれば悪い人ではない。

——そんなこともないか。

いまだニーナ教授に対してもちよつかいを出してることを考え、僕は思い直す。

「ちよつと湯川君？」声かけてくるんだからボオツとしてないで返事くらいしたらどうなの？」

「え、あつ。はい。ここにちは、ミレーユ助教授」

美しく整つた顔の眉根にシワを寄せ、自分の考えに没頭してしまつた僕を睨みつけてきている彼女に慌てて返事をする。

人が行き交う廊下の隅に寄つたミレーユ助教授に視線で促され、僕も端に寄る。

腕に下げたバッグに手を入れて何かを探り出した彼女は、それを僕に押しつけてきた。

「はい、これ。一昨日話してた奴」

手渡されたのは、小さなタブレットケース。半透明なそれには何錠かのカプセルが入っている。

「ああ、憶えててくれたんですね」

「たつ、たまたまよ！　余りがあつたから、せつかくだから消費してもらおうと思つただけ！」

「ありがとうございます」

素直に謝意を述べると、顔を少し赤くしたミレーユ教授は早口に言い訳していた。

「昨日、たまたま彼女と校内の食堂で出会つた僕は、そのとき花粉症の話をしていた。そしたら試験が終わつた試供品の薬があるということで、機会があればだけど、分けてくれると言われていた。

まさかこんなに早くもらえるとは思つてなかつたから、ちようど症状が出てきたタイミングでもあつたし、素直に嬉しかつた。

「一昨日も少し言つたけど、花粉症なんて鼻の粘膜取り替えちゃえばいいんじやないの？」近くに細胞ガアデンの支店ができたし、そこなら安いのあると思うけれど

「ううーん。それは、どうかなあ」

「手術なんて半日で済んで即退院できるし、確か細胞ガアデンには手術の代わりに、機能代替細胞に置き換えるDNA活性薬というのも売つてたと思うけれど？」

脚派、というより絶対領域至上主義である僕ですら視線が釘付けにされそうな、大きく柔らかそうな胸の下で腕を組んで小首を傾げているミレーユ助教授。

不都合のある身体の器官を機械や人工培養器官や、高機能器官に取り替えるというのは、魔法町ではごく一般的に行われていることだ。

医療機関で行う手術が確実だけど、合法のものから非合法のものまで、DNAをいじるような薬も数多くある。

ミレーユ助教授が言うように、花粉症なんて症状を抑える薬を使わなくとも、根治方法がいくらでもあるのが、いまという時代だ。

でも僕は、どうしてもそういうものには抵抗があつた。

「そういうので手術するのは、なんか抵抗ありますね……。薬の方は、細胞ガアデンって店はあんまりいい噂聞かないんですけど、どうなんですか？」

「私が行くのは反重力町の本店の方だけど、たまにくつ掘り出し物があつたりして面白い店よ」

「……自分に使う薬を買つたりするんですか？」

「……主に実験用よ」

真正面からミレーユ助教授の瞳を見つめて問うたら、目を逸らされた。

店長だかオーナーがやり手で、品揃えはもちろん、銘品から珍品まで手に入るという

細胞ガアデンは、扱ってる商品だけの問題でなく、強引な販売方法でトラブルつてる話をちょくちょく聞く。

知り合いの知り合いにも、その店にはまり込んで大学から消えたという人がいた。……どういう理由で消えたのかまでは聞いていなかつたが。

「でも湯川君、手術も薬もイヤなんて、ちよつと考え古いんじゃない？ 貴方なら、脳N A Sは使つてんでしょう？」

「それはまあ、使つてますけれど」

陥しげに目を細めて問うてくる彼女に、僕は領きを返した。

遠隔地に設置した外部ストレージと脳を接続して記憶領域を増設する脳N A Sは、扱うのにちよつと知識が必要なのと、セキュリティに気をつけないとクラッカれて飛んでもないことになる場合はあるが、世の中に普及している。

通信方式はいくつかあるが、記憶と記録を接続するモントーク技術を応用した極超短波によるものが主流だ。

極超短波の送受信を行うためには外部アンテナを装着したり、身体に埋め込んだりする。

僕はできるだけ快適なアクセスを目指して、脳N A S用に超小型の增幅装置とアンテナを身体に埋め込んでいた。

「なんと言ふか、微妙なんですけど、機能を増やすためなら許容範囲なんですけど、機能を代替するために身体をいじるのは抵抗ありますね」

「わからなくはないわね」

僕の言葉に同意してくれたミレーユ助教授は、腰に手を当て、魅力的な胸を反らして言う。

「まあ、私はそんなことをしなくとも、完璧なのだけれどね！」

どこからそんな自信が出てくるのだろう、と思うけれど、顎を逸らして僕を見下ろしてくる彼女の身体については、文句のつけようもなく完璧だと思えた。でも……。

——この人の性格のつけ替えは、手術や薬じやできそうにないな。
得意気に笑うミレーユ教授に、僕はそんなことを考えていた。

*

わざかに締め切つていらない実験室の扉の隙間から見えたのは、和服の後ろ姿。
小柄な女性のようだけど、ポニーテールに結われた髪から覗くうなじのラインが美し
い。

「来客かな？」

ミレーユ助教授と別れ、小走りにニーナ教授の待つここまで来た僕は、軽くノックをしてから扉を開けた。

「あら？ こんなには」

真っ先に振り向いて僕に声を掛けってきたのは、後ろを向いていた和服の女性、というか女の子。

年の頃はたぶんニーナ教授より若い。

暖かみを感じる肌の色をしたその顔立ちに朗らかな笑みを浮かべる女の子は、控えめながら美麗な柄の和服と相まって、日本人形を思わせる出で立ちだ。

ニーナ教授よりもさらに小柄な彼女に、僕は見覚えがない。

不審者というわけではないだろう女の子にどう対応するか考えあぐねて、いつも通り椅子に座つて、じっくり見つめてしまいたくなる、濃紺のミニスカートと黒のニーハイソックスで形作られた絶対領域を見せつけるニーナ教授に目を向けると、彼女は不機嫌そうに眉を顰めていた。

「初めてまして、ですね。ニーナの助手の方でしようか？」

「あつ、ええ、はい。湯川偉夫（ゆかわひでお）です」

「ご丁寧にありがとうございます。わたしはゾフィア・フランケンシュタイン。ニーナ

とは以前からの知り合いです。よろしくお願ひします、湯川さん」「はいっ、よろしくお願ひします」

伸ばされた小さな手に、僕は自分の手を伸ばして握手をする。

猫を被つてるときの二ーナ教授よりもさらに丁寧な口調と、静々とした華麗さを感じるその女の子、ゾフィアさんの様子に、見た目よりも年上なのかも知れないと思う。

「ええっと、もしかして、お邪魔でしたか？」

名前にも憶えがないので、二ーナ教授とは僕が大学に入る前からの知り合いかも知れないゾフィアさん。

助手とは言え邪魔してしまったかと思い、僕はにこにこと笑顔を浮かべているゾフィアさんと、なにやら相当分厚い紙束を手にして難しい顔をしている二ーナ教授に恐縮してしまう。

「お茶でも淹れますね」

「必要ない」

いつもの紅茶ではなく、ゾフィアさんに合わせて日本茶でも入れようと一步踏み出た僕を、二ーナ教授の鋭い声が止めた。

「お構いなく」

やつぱりにこにこ笑っているゾフィアさんにもそう言われ、動けなくなつた僕はその

場に立ち尽くす。

——どうしたことだろう?

今日はちょっと抑えめの、でも濃い紅のネクタイを締めた紺色のシャツの袖口や、ニーハイソックスには精緻なレースがあしらわれた服装の二ーナ教授。彼女が目を落としている紙束は、そのまま本にできそうなほどに分厚い。

しかめつ面で紙束を読む二ーナ教授を、にこにことした笑顔で見つめているゾフィアさんが持つてきたもの、というのがいまの状況だろうと思う。

知り合いであるというのを否定せず、時間がかかりそうな紙束を読む間もお茶すら出さないという二ーナ教授の指示には、その曇りきつた表情も合わせて、不穏なものを僕は感じていた。

「今日は実験があるからここまで。預かっておくから、読んだら連絡するわ。さ、湯川君。実験の準備に入つてちようだい」

興味引かれる事柄でも見つけたのか、片眉をピクンとつり上げた二ーナ教授だつたけど、直後にそう言つてめくつていた紙束を戻し、いつも通り美しいのに、いまは少し乱れた感じのある金糸のような髪をかき上げながら立ち上がった。

ゾフィアさんがいたことでお預けを食らっていた僕は、頭を搔きながらそんな二ーナ教授に報告する。

「あー、それなんですが、今日は実験できないんですよ。液体窒素が手に入らなくつて」「液体窒素が手に入らないつて……。在庫の管理と保管は徹底させてるはずでしょう？」

この国立魔法科学大学の学長も兼任しているニーナ教授は、実験資材や機材の管理にはうるさくはないが、徹底するよう指示を出している。

大学という場所だから、意外なところから新たな知見が生まれることもあるわけで、余裕は持たせてあるし、ちよろまかしや遊びでの使用を徹底的に取り締まつていたりはしない。ただ、そうした用途での消費についても管理しているし、監視している。

面白いことがあつたら首を突つ込もうと思つてやつてる気がしないでもなかつたが。液体窒素は大学でも消費量の多いものなので、在庫は切らさないようにしているし、突発的な不足にも対応できるよう複数の業者と提携して管理されている。

それなのに今日は、その液体窒素の在庫が壊滅していた。

これから行うニーナ教授の実験でも使うというのに。

「それがですね、今日搬入される予定だつた液体窒素が事故で全部流出してしまつたそ
うなんです。いま魔法町の極々小さい地域では秋の雪祭りが開催中ですよ……」

「いつたいなんでそんなことになつたの？」

「そこまではちよつと、情報が来てないそうで。事故があつたそなんですけれど。影

響が大きいんで急いで手配してあるなんですが、どんなに急いでも到着は明日になる予定です」

「……つたく」

いつになく不機嫌そうな顔になつて、唇を噛んでいるニーナ教授。

ゾフィアさんを邪険にしている雰囲気はあるのに、それをはつきりと態度や言葉で出しているない、この曖昧な様子はいつたい何なんだろうか。

今日使う予定の液体窒素はそんなに大量じやない。

大学で契約してる業者以外にもつき合いのある店なんかはあるし、液体窒素の入手が無理つてわけじやなかつた。

でもさすがに、僕の反重力ホウキでは大型のボンベをぶら下げて飛ぶのは無理だし、小型のボンベ数本を持って帰るのも骨の折れる仕事だ。

実験を理由にゾフィアさんを遠ざけるのは無理そうに思えた。

「それはちょうど良かつたかも知れません」

ぽんと手を叩いて、ゾフィアさんはにつこりと笑む。

さらに不機嫌そうに眉を顰めるニーナ教授のことを気にした様子もなく、彼女は僕に笑いかけてきながら言う。

「液体窒素を買ってくるついでに、わたしの実験につき合つていただけませんか？ 湯

川さん

「実験？」

「ええ。わたしもニーナと同じように、科学を目指す者なのですよ。今日はその成果である論文と、理論を実践した発明品を持ってきましたのですよ」

言つてゾフィアさんが大きな巾着袋から取りだし、広げたもの。

白い半月のようなそれは、二枚の布を縫い合わせたような造作で、まっすぐな部分が開くようになっていた。服に縫いつけられていないポケットのようだ。

「なんなんですか？ それは」

「これはこうして使うのですよ」

和服の帯のところにペたりとポケットを貼りつけたゾフィアさんは、ずいぶん伸ばせるらしいポケットの口を引つ張つて大きく開け、手首に下げていた巾着袋をその中に入れた。

そして、閉じられたポケットの口。

たぶん論文を入れてきたんだろう大きな巾着袋を入れたのに、閉じられたポケットには厚みはない。広げて見せられたときと同じペラペラだ。

「これは……もしかして！」

「ええ、その通りです」

ニーナ教授とは違う、可愛らしい笑顔をゾフィアさんは浮かべる。

「四次元——」

「空間ポケットです」

「で、でもこれはやっぱり四次——」

「空間ポケットです」

「……」

「空間ポケットです」

どう考へても創作伝承上の青ダヌキが持つていたポケットと、形も機能も同じものだとしか思えない。

それなのに空間ポケットと主張するゾフィアさんの変わらない笑顔に、僕はそれを以上指摘することを諦めた。

「伸ばせると言つても入り口のサイズに限界がありますから、大型のボンベは無理です。ですがこの中に入れれば重さもなくなりますから、小型のボンベならば何本でも収納できますよ」

「これは……、すごいですねつ」

素直にそう思う。

宇宙人が行き交い、真空管を取りつけられたドールが人格を持つて闊歩する魔法町と

言つても、中に入れるだけで重さもサイズも関係なくなる空間ポケットのようなものはこれまで存在していなかつた。

ニーナ教授の助手になつて、やつかい事はもちろん、不思議なことにも出会つてきた僕だけど、この空間ポケットというゾフィアさんの理論を実証したんだろう発明品に、興奮を覚えずにはいられなかつた。

「それではニーナ。貴女の実験のためでもあるし、しばし湯川さんを借りますね」

「ちょっと行つてきます、ニーナ教授！」

巾着を取り出したゾフィアさんの手によつて、シャツの上から僕のお腹の辺りに貼りつけられた空間ポケット。

思わず興奮して声を弾ませてしまいながら、僕はニーナ教授に買い出しに行くことと、ゾフィアさんの実験につき合う意志を告げた。

「……まあいいけどね、湯川君がその気なら。でも行くのはいつものあの店でしょ？ だつたらポイントつけてきてちょうどいい」

そう言つたニーナ教授は、机の引き出しからちよくちよく利用している実験機材の店のポイントカードを出して差し出してきた。

「わかりました。では早めに行つて帰つてきます」

「氣をつけて行つてきてね」

なんとなく気になる聲音と視線で言われ、僕はそれについて訊こうと口を開く。

「さあ、早く行きましょう、湯川さん」

何かを言う前に、僕の腕に腕を絡め身体を密着させてきたゾフィアさんに、言葉を飲み込んでしまう。

つややかな黒髪からだろうか、間近から香つてくる女の子らしい匂いに、僕は何も言えなくなってしまった。

目を細めて、心配しているような視線を向けてくるニーナ教授に見送られて、ゾフィアさんに引っ張られる僕は実験室を出た。

* 2 *

「ふふふふつ」

唇の片端をつり上げているミレーユは、抑えきれず笑い声を漏らしていた。

そんな彼女が右手に持つてるのは、卵。

ニワトリの卵にしてはふた回りほど大きいそれを、ミレーユは手の中で弄びながら、教室区域と実験室区域の間にあるエントランスに近い廊下を歩く。

早くも講義が終わつたらしい学生が、反重力ホウキなどを片手にいち早く食事処に向

かおうとする中を歩くミレーユは、人並みの中に見知った顔を見つけた。

「あれは……、湯川君？ この前はあんなこと言ってたのに、やるわね」

彼が愛用しているダブルサイクロンホウキを持つて歩いている湯川を遠目に発見し、よく見てみる。

彼の隣に立つのは、ずいぶん小柄で、和服を纏う女の子。

先日あつた、ニーナの恋愛未遂事件のときには、恋人はおろか、好きな人もいないと語っていた湯川だつたのに、いま彼の腕は着物の女の子の腕ががつちりと絡みついている。近づきながら見る限り、ふたりの様子はラブ・ラブなカツプルだ。

「てつ、あれは！ あわわわっ」

距離が近づき、行き交う学生の間から見えてきた女の子の顔。

見覚えのあるその子の顔を思い出した瞬間、ミレーユは思わず手の中の卵を取り落としそうになつていた。

慌てて両手に包んで落とすのを回避したミレーユが見ると、湯川と女の子はちょうどエンタランスからそれぞれのホウキで飛び立つところだつた。

「まさか……、あれが戻つてきてるなんて……」

声をかけることもできず、飛び立つたふたりのことを青ざめた顔で見送つたミレー ュ。

眉根にシワを寄せ、小首を傾げた彼女は思い直す。

「どうせ目的はあれだろうし、問題はないかしら？　こつちに被害がなければだけど
そして手にした卵を見、にやりと笑う。

「ちようどいいかもしないわね。あれが戻ってきて慌てる二ーナにこれをカマして
やれば、ぎやふんと言わせてやれるわ」

ミレーュが手にしている卵は、生命工学の成果。

その名も、爆植卵。

衝撃を与えることで発芽する種を栄養で包んだそれは、名前の通り爆発的な速度で成長する。

砂漠であろうが酸素のない惑星であろうが空から撒くだけで森を生み出せるそれは、ミレーュにとつて会心の出来とも言える研究成果だった。

ただ、力を入れて研究しすぎたためか、少しばかり成長速度が速すぎ、成長を開始して一秒後にはその先端は音速を超えてしまう。栄養が切れた時点で枯れ始めてしまうため、森をつくり出すどころか枯れ野を生み出すことしかできない。

それはそれで用途はなくはなかつたが、衝撃波をまき散らして成長する爆植卵はいくらなんでも扱いづらく、成長速度を百分の一程度に落としたものを研究中だつた。

「まあでも、いたずらに使うには最高の一品よね」

そうつぶやきながら、実験室の集まる区画までやつてきたミレーユは、忍び足で二一
ナがいるはずの部屋へと近づいていく。

室内に人の気配があることを耳を近づけて確認し、爆植卵を投げ込むために閉められた扉をゆっくりと開ける。

「何してるの？ ミレーユ」

「ひつ」

ぎりぎり突っ込める程度に開けた扉の隙間に腕を入れたとき、横合いから声とともに手が伸ばされてきた。

取り落とした卵はニーナの左手がキヤツチし、手首を右手でつかまれたミレーユは逃げることができない。

「な、なんでもないのよ。ええっと……、研究頑張ってるみたいだから、差し入れでも、と思つて……」

「ふうん」

足で扉を開け、ミレーユに冷たい視線を投げかけてくるニーナ。

冷や汗をかきながらの説明は、通用している様子がない。

「まあいいわ。ちようどいいから手伝つてちようだい」

「え？ ワタシが？ 貴女の手伝いを?!」

実験室の中に引っ張り込まれたミレーユは文句を述べるが、次のニーナの言葉で黙るしかなくなつた。

「まずはこの卵について説明してもらうわよ」

*

ゾフィアさんと一緒に反重力ホウキで乗りつけたのは、大学からほど近い化学系の資材や消耗品が充実している店。

反重力ホウキなどの空を飛ぶ道具が普及しているために、地表から数百メートルの積層する建造物の中層にあるにもかかわらず、外に対しても開かれている。

箱の面ひとつを斬り落としたような構造もその店は、魔法町ではごく一般的な形で、左右には同じ形で同じサイズの店が並び、見下ろすと霞むほど下まで似たような店がずっと続いている。

ホウキを使わない人が歩くのにも使われる広いキャットウォークに降り立ち、僕は早速ボンベや実験機材などが陳列された店の中に入つた。

「よお、湯川君じゃないか。ニーナ教授は元気かい？」

「ええ、元気ですよ。今日はちょっと液体窒素を少し分けてもらいたくて」

「いいぜ、売るほどあるからな。ちょっと待つてな」

「ああ、小さい方のボンベで、ええっと、四本お願ひします」

了解の返事を手を振つて返してきた店主の親父さんを見送る。

大学が契約している大口取引先というわけではないが、何かと小回りのきく品揃えで、僕はもちろんニーナ教授も黙黙にしているこの店の店主とは、すっかり顔見知りだ。ニーナ教授はポイントカードをつくつてゐるくらい、けつこう頻繁に利用している。

「今日はなんだか魔法町で液体窒素が高騰しててな、ちょっと割高だが、これでいいか？」

膝下くらいまでの高さがある金属製のボンベは、液体窒素が漏れないようしつかりしたものであるため、僕じや二本持つのがせいぜいなくらいだ。

それを四本、両方の脇に抱えて持つてきた親父さんは、奥にあるレジでいつもよりちょっと高めの金額を提示してきた。

「ええ、いいですよ。こつちも急ぎで必要になつたものですし。請求はいつも通り大学に送つておいてください。それと、これを」

提示された金額はいつもよりけつこう高かつたけど、ここに来るまでに見た、今日貼り替えたらしい別の店の店頭価格に比べれば良心的だ。借用になる小型ボンベの保証金込みの金額が書かれた受領書にサインをして、納品書を受け取った。

代わりにさつきニーナ教授から受け取ったポイントカードを差し出す。

「ありや？　こいつは使えねえぞ。なんかカードの情報が読み出せねえ」

「ええつ。……ニーナ教授のことだから、雑な扱いでもしたのかなあ」

カードリーダーを通した親父さんにそう言われて、僕はため息交じりにそう答えていた。

いろんな機材が置かれている実験室だから、リーダーで読み出すタイプのカードなんかは使えないこともある。

ニーナ教授がまた雑な扱いでもしてたんだろうと、僕は仕方なく差し出されたカードを受け取った。

「会員情報はこっちにあるから、ポイントはこっちで加算しておくよ。新しいカードは準備しておくからよ」

「はい。お願ひします」

「それで、この時間からだと届けるのは明日になっちゃうけど、いいか？」

「ああいや、今日は持つて帰ります」

「持つて帰るつて……、小さい方だからって、ホウキで持ち帰れる重さじやないぜ？」

「そこはちよつと、これを使うのとは別の実験をしてるところでして」

心配と不審を含んだ親父さんの視線に、僕はにやりと笑つて見せる。

「ああ、それはそのままつけて使つてください。着用者の体温からエネルギーを供給しているものなので」

「なるほど」

僕のお腹のところに貼りつけられた空間ポケットをはずそうとしたとき、店の入り口に立つたまま中に入つてこようとしなかつたゾフィアさんが言いながら近づいてきた。

「ここはかなり伸びますから、こうやつて——」

「おお、すごい」

ゾフィアさんが空間ポケットに手をかけて引っ張ると、伸びて小型のポンベなら楽に入るくらいになつた。

ポケットの中は、まるで宇宙か何かのように真っ黒だ。

脇に並んだポンベに手を伸ばして、恐る恐る入れてみる。

完全にポケットの中に入り、手を離すと、ポンベは黒い空間に吸い込まれるように消えた。

ひと抱えもあるポンベが入つたはずなのに、空間ポケットが膨らんだりはしないし、重さも感じない。

僕は思わず感嘆の声を上げてしまう。

「おお、凄い！……でも、取り出すときはどうするんです？」

「入れたものを思い浮かべながら手を入れてみてください。それで思つたものを取り出すことができます」

ゾフィアさんの説明に、ほんの微かに恐怖を感じながらもいま入れたボンベのことを考えながら、黒い空間に両手を差し入れる。

何かをつかむ感触があつて、引っ張り出してみると、ボンベの頭が黒い中から現れた。「でもこれ、収納したものを憶えてないと取り出せなくなりそうですね」

「そうかも知れませんね。そこのところは改良の余地があるかも知れません」

驚きとわくわくで顔が緩んでしまつている僕に、ゾフィアさんは優しげな笑みを見せてくれる。

——なんか、凄くいい人だな、ゾフィアさんって。

教授として、研究者としては凄くて、大学の学長もやつてるニーナ教授。

でも掃除が苦手だつたり、機嫌が悪いと八つ当たりもしてきたりといった面もあつたりする。

それに比べてゾフィアさんは、まだ今日知り合つたばかりだけど、優しげで当たりも柔らかく、見た目も口調も可愛らしい。ニーナ教授と仲良しとは思えないくらい良い人のようだつた。

——あれ？ でも、仲が良いの、かな？

実験室での二一ナ教授の顰めつ面を思い出して、僕は小首を傾げてしまっていた。

「さあ、どんどん入れてしまいましょう」

「はいっ」

促されて、僕は残り三本のボンベを空間ポケットに収める。かなりの重量とサイズが入つたのに、ゾフィアさんの手が離れて口が閉まつた空間ポケットは、中に何かが入つている様子は微塵もない。

——本当に凄い発明品だ。

人間の体温で稼働するほど省電力で、思い浮かべるだけで取り出したいものを選択できるのは精神物理学の応用だろう、空間ポケット。

僕はその出来の良さにすっかり感心してしまつていた。

「じゃあ、今日はこれで」

「あつ、ああ……」

顔を上げて親父さんに挨拶すると、何故か彼は顔を硬直させ、大量の汗をかいていた。

それに気づいたゾフィアさんが、彼につっこりと笑いかける。

その瞬間、親父さんは埃を巻き上げながら店の隅まで後退つていった。

「どうかしま——」

「さあ、早く行きましょう、湯川さん」

「え？　あ、はいっ」

「また僕の腕に腕を絡めてきたゾフイアさんに、親父さんの様子は気になるけど店の外へと向かう。

「少し、寄り道をしていきませんか？」

店の入り口に立てかけてあつたホウキにまたがつて飛び立つと、ゾフイアさんはそんな提案をしてきた。

「いや……、早く帰つて実験に入らないといけませんし……」

まだ昼前とは言え、液体窒素の入手のために朝から始めるはずだつた実験はずいぶん遅れてしまつていて。ニーナ教授も実験室で待つてゐるだらうし。

「わたしはしばらく離れていたので、魔法町は久しぶりなのですよ。少し見て回りたいですし、ついでにニーナの好きな和菓子も買つて帰ろうと思うのです。ここからそんなに遠くないお店ですよ」

「なるほど」

アパートの部屋から大学までの往復ばかりにしても、僕がここに来てから魔法町がそんなに変わつた印象はない。

けれども久しぶりというゾフイアさんとつては違うんだろう。

それにケーキなんかの洋菓子を食べることが多いニーナ教授は、実はけつこう和菓

子にもうるさい。おやつ選びのバリエーションはあるに越したことはない。

「わかりました。行きましょう」

「ありがとうございます。こちらです」

横に並んで飛んでいたゾフィアさんが、行き先を指さしながら先行する。

「え？」

彼女が前に出ようとした一瞬、その口元に浮かべられた、唇が裂けそうなほどの笑みに、僕は驚きの声を上げてしまっていた。

「どうかされましたか？」

「あ、いえ。なんでもないです」

振り返ったゾフィアさんが浮かべていたのは、今日知り合つてから一度も崩れしたことのない穏やかな笑顔。

——気のせいかな。

日差しの加減で幻でも見たのかも知れないと思い、僕は先行するゾフィアさんの後を追つてハウキを飛ばした。

「これ読んで」

言つてニーナがミレーユに押しつけたのは、紙束の半分。鈍器にでもなりそうなほどの量がある、ゾフィアが持つてきたその紙束は論文、のようなもの。

理論に関する実験や証明だけでなく、それを利用した完成品にも触れているそれは、文章表現が決して得意ではないゾフィアが書いたもので、読めば理解できるが、読み進めるのは困難を極める出来だった。

内容は、空間ポケットに関するもの。

「あの子が書いたものには興味はあるけれど……。精神物理学の論文でしょ？ これ。ワタシじや畠が違ひすぎて、理解できるとは思えないんだけれど」

「何でもいいから違和感があつたら教えてくれればいいの！ あれが何を考えてるのかわからないから、これを読んで理解するしかないのつ。あ、こつちは今回持つてきた完成品の設計図とかね」

分厚い紙束とは別の、折り畳まれた紙を湯川がいつも綺麗にしていて、広々とした実験用テーブルにニーナは広げた。

「相変わらずなのね？ あの狂才乙は」

「たぶんそうよ。ただ、今回は私が言いつけたことをやつてきてるから、追い返すことも

できなくてね……」

手にした論文をめぐり始めたミレーユと顔を見合わせ、ニーナはふたりでため息を吐き出していた。

ゾフィア・フランケンシュタインは、国立魔法科学大学の中で、また大学周辺で彼女を知る者からは『狂才乙』と呼ばれ、恐れられている。

彼女の性質は研究者と言うより、発明家と言う方が近い。

つくりたいものをつくるために、理論の発見と証明から始めて、ひとりで実現してしまう彼女は一種の天才。

しかしながらその性質と、起こした数々の事件から、彼女は恐怖の対象となっている。「何を言いつけて遠ざけたの？」あの子、聞き分けは良かつたでしょ、貴女に対しては」「まあね」

ゾフィアはニーナが学長になる前の頃に、少しの間だけ教授として担当していた生徒だった。多くの問題を起こし、しかし様々な事情があつて退学処分にはできなかつたため、困難な研究を押しつけることで遠ざけていた。

自主退学までして研究に没頭した彼女に、ニーナは安心して過ごすことができるようになつたはずだが、今日になつて突然舞い戻ってきた。

彼女がもし望めば、いまは学長であるニーナの意思すら撥ねつけて、周囲が復学させ

てしまうだろう。起こす問題は大きく深刻ではあるが、ゾフィアにはそれだけの魅力がある発明家でもあった。

「あれに言いつけたのは物質転送機、ワープ装置の完成品、もしくは応用した物体の作成か、そのための理論の構築よ」

「ワープ装置つて……。あれはずいぶん昔に販売禁止になつたはずじやないの？」

「販売は禁止されてないわ。製造が禁止されただけ」

「ああ、だからたまに骨董品屋とかで本物かどうかわからないけど、売つてたりするのね」

ワープ装置は、ニーナが生まれるより前に製造され、販売されていたことがある、夢のような道具だつた。

機能は文字通り物質を違う場所に転送するというもので、冷蔵庫のような見た目の転送機が二個セットで販売され、双方向に物質を転送し合うことができるものが主だつた。

とても便利な道具であつたが、ほんのひととき世の中を騒がせた後、アツという間に姿を消した。

納得したように頷いたミレーユは、重ねて問うてくる。

「なんでもまた、製造禁止になつたの？ 信頼性に問題があつたって話は聞いたことがあ

るけれど

「信頼性、というのとは少し違うかな？ でもまあ、そんな感じね」

立つたまま論文の前半をめくるミレーユは、目にかかるてきな髪をかき上げながらニーナのことを見つめる。

自分でも論文を読み進めるニーナは話を続けた。

「当時のワープ装置は転送達成率が九九・九九パーセント、コンマゼロ一パーセント程度不足していたの」

「それくらいあれば充分なものじやないの？」

「成功率だとしたらもうあと何桁か高くないと商品にはならないわよ。でもね、ワープ装置に不足していたのは、転送割合。一回ごとにコンマゼロ一パーセント程度、転送した物体の構成物質が失われていくの」

「それくらいなら問題にならないんじやない？」

「ええ。一回二回の転送なら、ね。ワープ装置は形状保証が優先されていたから、見た目ではすぐには気づかない。毎日のように使っていると、問題になつてくるのよ」

精神物理学より純粹物理学の方が近い領域ではあつたが、興味があつたので、ニーナもワープ装置については少しの間研究したことがあつた。

しかし、その研究は断念することになった。

自分が断念することになつた研究を押しつけたはずのゾフィアが、完成品を持つて戻ってきたことには嫉妬を覚えなくもなかつたが、それよりも彼女のこれまでの所行を考えれば、戻ってきた理由の方が気になつた。

戻ってきた理由のヒントは、渡された論文にあるはずだと、ニーナは考えていた。

「毎日使つていると、どうなるの？」

「どんどん代替の物質に置き換わっていくの。貴金属なら純度が下がつていくし、宝石なんかだつたら不純物が増えるから段々と色味が変わつていくわね。機械の類いはしばらくは問題ないけど、そのうち不調を来すようになる。代替される物質を選ぶ方法は見つからなかつたし、傾向はあつたけれどどんな物質に置き換わるのかは解明できなかつた。新陳代謝をする生物だと問題が少ないんだけど、一度情報化、データライズして余剰空間を通して別の地点に持つて行く感じなんだけど、倫理的なオリジナル問題が発生してたわね。そんなこんなで、もうずいぶん前の話だけど、製造が禁止されたの」ミレーユは論文のページをめぐりながら、眉根にシワを寄せた。

「割合の問題なら、それを上げていけばいいことじやないの？」

「その通りよ。製造が禁止されても、研究は続けられていたわ。転送割合が一〇〇パーセントにならないのは、データライズした物質が余剰空間を通るときに摩擦が発生していることが原因、というのは究明されて、スムーズに通す方法が研究された。そしても

うずいぶん昔に、小数点以下十三桁までの転送割合を実現したワープ装置は完成した

「完成してゐるんじゃない。どうして販売されないので？」

「別の問題が発生したからよ」

不思議そう表情で論文から顔を上げたミレーユに、ニーナは苦々しい顔を見せた。

「別の問題つて？」

「コストの問題よ。当時試算されたのでは、一家に一台程度にワープ装置が普及した場合で、平均的な家庭一世代が生涯に得られる収入の——」

ミレーユから視線を外し、ニーナは大きなため息を吐いてから言う。

「約十世代分」

「……計算間違いじやなく？」

「ええ。計算間違いじやなく」

ニーナの言葉に、ミレーユはあんぐりと口を開けていた。

販売されていた当時、様々な事件を引き起こしたワープ装置は、再度製造するに当たつて様々な制限が設けられた。

それが性能保証のための認定と、認定を受けるための検査で、小数点以下十三桁の転送割合のワープ装置を製造するためには、職人芸どころではない超精密な調整が必要とした。

それによつて算出された一台単価が、十世代分。子々孫々、十代に渡つて払い続けてやつと終わるような、膨大すぎる金額。

それでも便利で日常的に使い続けられるものならば、世代を跨ぐローンなどで購入もあり得なくはなかつたが、認定を維持し続けるためには十年から二十年に一度、再検査が必要であつた。

検査だけでも相当な金額がかかり、認定されなかつた場合、再調整が必要となる。再調整には一世代分の収入程度の金額がかかることがわかり、コストを改善する技術的なブレイクスルーがあるまで事実上、ワープ装置の量産は見送られることになつた。

「金持ちとかどうしても必要なところだつたら、購入するんじやないの？」

「それだと製造コストが何桁か上がることになつてね。重要な物品を厳重に運ぶのに比べると見合うものではなかつたのよ」

「……あの子を遠ざけるためとは言え、ずいぶん無茶なものを押しつけたものね」

「無茶だから遠ざけ続けられると思つたんだけどね。それなのに一応、そのままのものとは言えないけれど、応用した完成品をつくつてきちゃつてるのよね」

空間ポケットは、物質をデータライズしてA地点からB地点に転送するワープ装置とは異なるが、それに使われている技術や理論を応用した発明品だつた。

純粹物理学の結晶であるワープ装置を応用し、精神物理学を組み入れた空間ポケット

は機能の維持に魔法、人間が発する念力を使つており、それにより体温からの発電で稼働できるほど省電力となつてゐる。

まだ実物は触つていなかつたが、論文から察するに、複数の物体を格納したときの取り出しには人間の精神力を応用したモントーク技術が使われ、取り出す物体の選択は考えるだけで可能だ。

使い方を知つていれば誰にでも使えるワープ装置とは違い、魔法を応用し、反重力ホウキのように使用を個人に限定している空間ポケット。入口と出口が同じであり、余剰空間は利用しているものの、データライズした物質を格納してゐるだけなので、遠距離転送時にある存在摩擦もほぼ発生しない。

ゾフィアが書いた論文と設計図は彼女らしく理解が難しい部分があり、量産にはいくつかのハードルがあるような気はしていた。

しかしながら、価格はワープ装置のような異様な価格になることはないはずで、個人で買える程度に收まりそうな具合だつた。

「完璧じやない」

そんなニーナの説明を聞き、ミレーユは感心したように言つた。

けれどもニーナは、眉を顰めたまま論文をめくる手を止めない。

「あれがつくつたものよ？　一見完璧に思えても、落とし穴がありそうな気がしてなら

「ないのっ」

「そりやあまあ、狂才乙のつくるものだからねえ……」

「それにイヤな予感がしてならないの。私が指示したことだとは言え、あれがその指示通りに完璧なものにつくるとは思えないのよね」

「……信用してないのね」

「信用できると思う?」

顔を見合せたふたりは、返事の代わりにため息を吐き出して いた。

ふたりで論文に視線を戻したとき、ミレーユが声を上げた。

「ねえ、ここのこところつてちょっとおかしくない? 気のせいかも知れないけど」

そう言つて彼女が指さしたのは、論文に書かれた空間ポケットの構造概念図。

それから実験机に広げられた、今回持つてきた实物の設計図を指さす。

概念図と設計図では描き方が違うため、同一にはなつていない。けれども概念図を元に実際に作成の際の設計図がつくられたわけで、内容としてはほぼ同じになつて いるはずだつた。

専門外だからかいまひとつどこが違つて いるのかわからぬいらし いミレーユは、概念図と設計図を見比べて困つたような表情を浮かべて いるだけだつた。

ニーナもそのふたつを見比べ、ミレーユが感じただろう違和感の正体を見つけようと

する。

「これって……。ちょっと待つて」

「どうしたの？」

ミレーユの指摘した違和感の正体に気づき、ニーナはその問題から派生する別の問題を確認するために、自分の手元の論文後半をめくる。

「あれの目的がわかつたわ！」

「いつたい何だつたの？」

「説明は後！ たぶん、湯川君が危ない!!」

「湯川君が？ 彼はいま、狂才乙とお出かけ中でしよう？ いまどこにいるのかわかつてるの？」

実験室の壁に立てかけておいた自分の反重力ホウキを手にしたニーナは、ミレーユの腕を引っ張つて廊下へと出る。

「こんなこともあるうかと、湯川君にはポイントカードに偽装した発信器を持たせてあるのよ」

「いざというときのためなんでしようけれど、貴女もよくそんなものつくるわね」

「ご託は後回し！ 詳しいことは行きながら話すから、貴女も急いでつ」

「仕方ないわね」

悪態を吐きつつも一緒に廊下を走るミレーユとともに、ニーナは湯川の元に向かうためエントランスへと急いだ。

*

「この辺はずいぶん変わりましたね」

店からホウキをゆるりと流して上野方面へ。

大学周辺の雑多な街並みは少しずつ整備された街並みとなり、積層する建物は変わらないものの、神田や秋葉原周辺に比べると綺麗な景観になつてきていた。

行き交う人も学生とかの若い子よりも、ビジネスマンなどの大人の割合が多くなつてきている。

「そうなんですか？」

「ええ。わたしはしばらく魔法町を離れていましたから、いろいろ変わつているところがあつて、少し驚きますね」

上野近辺は近くにある合羽橋の道具屋街に、実験で使う刃物を研ぎに出すときに入るくらいで、あまり馴染みはない。

それでも僕が大学に通うようになつてからはあんまり変わった印象はなかつた。

——ゾフィアさんって、いつからニーナ教授の知り合いなんだろう？
僕がニーナ教授の助手になる前、大学に入つたときには見かけた憶えのないゾフィアさん。

その頃にはもう魔法町を離れていたのだとしたら、けつこう時間が経っているはずだ。

隣に並んでホウキで飛んでいるゾフィアさんの薄く笑みを浮かべた横顔は、彼女の年齢はニーナ教授よりひとつかふたつか下、十四、五歳に思えた。

そこから考えると、魔法町を離れたのは十歳前後かも知れない。

魔法町では身体を弄るような改造は一般的で、僕は花粉症を治すのすら抵抗があるくらいでやつていなければ、見た目と年齢は連動していないことも多い。それどころか、人間のように見えるけれど人間じやない人だつていくらでもいる。

ゾフィアさんは実は僕やニーナ教授よりも年上かも知れないし、それどころか逆に、見た目よりも若いかも知れない。

ただ、僕の知らないニーナ教授のことを知つていることは確かだつた。

「あの、ちょっと聞いていいですか？」

「なんでしょう？」

「どうして、空間ポケットをおひとりでつくられたんですか？」

僕の問いかけににつっこりと笑んだ顔を向けてくれるゾフィアさん。

見下ろしたお腹に貼りついている空間ポケットは、もの凄い発明品だ。もし普及したとしたら、魔法町の有り様は大きく変わりかねない。それほどに凄いものだ。

ちょっと聞いた限りでは、機能を起動させて余剰空間を生み出すには魔法を使つてゐるそうだし、取り出す物体の選択にはモントーク技術が使われている。

精神物理学の成果とも言える空間ポケットは、ニーナ教授にとつても興味深い発明品のはずだ。

それを何故、知り合いで、ニーナ教授はなんか不機嫌そうだつたけど、ゾフィアさんは仲がいい様子があつたんだ、一緒に研究しなかつた理由がわからない。

踏み込んでいいことかどうかわからないけれど、僕は興味が湧いてきて、それを訊いてみることにした。

「目的があつたからです」

「目的?」

そう答えて楽しそうに笑うゾフィアさんの言葉の意味を、僕は計りかねた。

もう少し深く訊いてみようと口を開いたとき、それを制するようゴブンとゾフィアさんが先に言つた。

「この辺りはあまり変わつていませんね。よかつた」

その言葉に辺りを見回してみると、いつの間にか積層上野公園の近くまで来ていた。反重力の妙技とも言われる空中不忍池は、空中に浮かぶ巨大な水の球で、それを囲むよう¹に板状の庭園が何層にも重なっている。地上から噴出する湧き水を循環させ、透明度の高い空中不忍池は、ただそこにあるだけ見惚れるほどに美しい景観だ。

でも、この時期の積層上野公園は、僕にとつては鬼門と言えた。そろそろ昼が近いらしく、多くの人が集まりつつある庭園には、様々な植物が生えている。

その中にはもちろん、白い穂を垂れる、イネ科の植物も多くある。

まだ距離があつて、見て²いるだけなのに、僕は鼻がむずむずし始めた。——そう思えば、まだミレーユ助教授にもらつた薬、飲んでなかつたな。

研究室に着いたら飲もうと思つていた薬は、ゾフィアさんに連れ出されてしまつたから、まだ飲んでいない。飲んでいれば多少の症状なら抑えられると思うけれど、これ以上庭園に近づくとクシヤミが止まらなくなりそうだつた。

「実験もありますし、お菓子はまたにしてそろそろ大学に帰りま——」「わたしは、ニーナのことが好きなのです」

帰ろうと促す言葉を遮るように、突然ゾフィアさんがそんなことを言つた。

彼女の浮かべる涼やかな笑みは、今日これまで見てきたものと変わらないように思える。

でも、その細めた目の奥、瞳の底にあるものに、僕は底知れない寒気を感じていた。「本当は離れたぐなんてなかつたのです。けれど、わたしはあるのとき、彼女の命令を聞くしかありませんでした。できればわたしは、ニーナをわたしだけのものにしたいと望んでいます」

もう見なくとも、その言動だけで異常だとわかるゾフィアさんの様子。

危険を感じて逃げ出そうとした瞬間、上野公園の庭園プレートの縁にホウキを寄せたゾフィアさんは、そこに生えた白い穂を垂らす背の高い草に手を伸ばし、引き抜いた。
——まずい！

と思つたときには、僕の顔の目の前、鼻先で白い穂が振られていた。

なんでこんなことを、と思つてゾフィアさんの方に目を向けると、僕から遠ざかっていくのが見えた。

その彼女が呟くように言つた言葉。

「美しい花にたかるものは、例えミツバチではなく無害な羽虫だつたとしても、排除すべき邪魔な存在なのですよ」

正常とは思えない笑みと言葉を残して、ゾフィアさんは遠くへと消えていった。

「ぐふつ」

それを追つていいくことができない僕は、こみ上げてくるクシャミを抑えるために、両手で鼻を押さえる。

ホウキの操縦が乱れることなんて気にしていられない。

——ダメだつ。いまクシヤミしちやダメだ！

理由はわからない。でもいまクシヤミをしたら終わりだ。

そんな思いが僕の頭を駆け巡つて、顔を覆つて必死でクシヤミを抑え込もうとする。でも無情に、花粉で刺激された僕の粘膜は、クシヤミを繰り出そうと横隔膜を震わせる。

——もうダメだ！！

我慢が限界を超え、肺に溜まつた空気を全部吐き出す勢いでクシヤミをしようとした、そのとき。

背中に柔らかい感触。

それが衝突してきたのと同時に、ひねり潰す強さで僕の鼻を細い指がつまみ上げた。

「んぐっ」

「我慢しなさい！ ミレーユ！！」

「わかってる！」

後ろから聞こえたニーナ教授の声に応えたミレーユ助教授は、すれ違ひ様に僕のお腹から空間ポケットを剥がし取った。

それを、ニワトリのものにしてはずいぶん大きい卵に被せ、すぐ側の積層上野公園の庭園の縁に叩きつけた。

途端にそこから伸び上がつたのは、蔓。

まるで童話のジャックと豆の木のように、叩きつけられた地面から真っ直ぐに伸びていく太い蔓は、一瞬にして視界に収まらなくなり、見上げた空の一点に向けて微かな衝撃波を発しながら伸びていった。

突然のことにつシヤミの気配もなくなり、先端は青い空の霞んで消えてしまっている蔓を見ていた。

背中に感じてる柔らかい感触は、ニーナ教授の胸。

まだ僕の鼻を捻り上げてる彼女も、僕と一緒に空を見上げていた。

鼻をつままれてからほんの一秒ほどのこと。

どうしたのかと問おうと思つた次の瞬間、見ていた空に変化があつた。

黒い球体。

さつき感じていたのとは別の危険を感じた僕は、無意識のうちに振り返つてニーナ教授の身体を抱き締める。

黒い球体から溢れるように発せられた光。

爆発的なそれは、光が身体に届いたと思つたときには、衝撃波が襲つてきていた。片腕でニーナ教授の身体を、片腕で彼女の頭を守る僕は、衝撃波によつて吹き飛ばされた。

近くにいた人々も、公園の木々や不忍池も、激しい衝撃波によつてもみくちやにされる。

地面に背中から叩きつけられるものの、痛みはあつても意識を失うまでには至らない。運良くすぐそこの上野公園の上に落ちたらしい。

「大丈夫、ですか？」ニーナ教授

「……ええ。助かつたわ、湯川君」

一瞬だつた衝撃波は過ぎ去り、僕の胸元から顔を上げたニーナ教授は、土を被つたりしていたものの、怪我をした様子はなく微笑んでいる。

まだ事情はわかつていないけれど、ニーナ教授が無事であることに安心する。「きやあ———っ！」

安心したのもつかの間、そんな悲鳴とともに濃い紫色の物体が空から降つてきて、お腹に直撃した。

「ぐほつ」

荒々しく流れ落ちる滝のような髪に、それがミレーユ助教授であることを認識したときには、お腹をお尻でプレスされた僕は、うめき声とともに意識を口から吐き出していた。

* 4 *

「つまり、魔法安定装置を搭載してなかつたつてことですか？」

「そうよ」

空間ポケットが上空で爆発した後、僕は大学の医務室に担ぎ込まれた。他にもたくさん怪我した人がいたために、最速で治療してもらえるようニーナ教授が気を回してくれたおかげだ。

背中とお腹にけつこう酷い打撲と、肋骨の何本かにヒビが入り、頭にも包帯を巻いているという僕は、満身創痍の状態になっていた。

入院するまではなく、痛み止めと治癒を促す薬で数日程度で治りそうなくらい軽いものだつたのが不幸中の幸いか。怪我の原因は爆発というより、ミレーユ助教授のヒッププレスだつたような気がするけれど、わざとではないし、気にしないことにする。

いま僕は実験室に戻ってきて、椅子に高く足を組んで不機嫌そうに眉を顰めている

ニーナ教授に説明を受けたところだつた。

他には何故か無傷のミレーユ助教授と、簡易的な拘束服に着させられたゾフィアさんがいた。

「むつ、無茶苦茶危険じゃないですか！」

「そういうこと。入荷するはずだつた液体窒素が大量に漏れた事件もこいつの仕業だし、こいつは危険なのをわかつて、それをここに持ち込んだの。——貴方を、抹殺するためには」

ニーナ教授の言葉に、僕は思わず身体が震えていた。

説明によると、空間ポケットには魔法安定装置が搭載されていなかつたという。

魔法安定装置は、反重力ホウキなど、魔法で動く道具には必ず搭載されている回路のことだ。

人間が身体から発している魔力、念力は決して一定ではなく、平常時でもリズムを刻むように強くなつたり弱くなつたりする。感情が高ぶると強くなつたり、逆に沈むと弱くなつたりもして、常に一定の力が放出されているわけじやない。

体調が悪いとほとんどゼロになることもあります、身体の変調によつて瞬間的にはゼロになることも少なくない。

もし魔法安定装置が搭載されていなかつたら、魔力の放出がゼロになつた瞬間、例え

ば反重力ホウキなら落下することになる。

ゼロになるのはたいてい一瞬のことだから地面まで落ちることはないけれど、事故の原因にもなり得るから、それへの対策は魔法安定装置を搭載するという方法で必ず行われている。

魔力の放出がゼロになるのは、激しく驚いたときや、強い痛みを感じたときなど。

それから、クシャミでも起こり得る。

もしあのとき僕がクシャミをしていたら、その瞬間空間ポケットは機能を停止していたことになる。

「機能が停止するだけだつたら問題はなかつたはずだつたんだけどね、あの空間ポケットは、機能停止と同時に中身をその場で再構築するよう仕込まれてたの。あの、ポケットの中の狭い空間で」

「それで、あの爆発だつたんですね」

「ええ」

詳しい理屈は推測するしかないが、本来よりも大幅に圧縮された形で再構築された四本の小型ボンベは、たぶん小規模な核融合爆発か、それに近い現象を起こしたんだと思う。

あのときはクシャミの代わりに、ミレーユ助教授がいたずらのために持ち込んだ爆植

卵で身体から離され、体温のエネルギーと魔力の供給を断たれたために上空で爆発した。

もしあのとき僕がクシヤミをしていたとしたら、一度機能を停止し、内容物を再構築した空間ポケットは、魔力が復活しても再格納するよりも前に爆発していたという。

そんなことをゾフィアさんは、失敗したからではなく、爆発させることを目的として、空間ポケットから安定装置を取り除いていたという。

僕を、抹殺するために。

口こそ塞がれていないが、拘束服によつて見ることも歩くこともままならないゾフィアさんから、僕は震えながら距離を取つた。

「な、なんでこんな人が野放しになつてるんですか！」

今回の爆発で、積層上野公園はかなり荒れてしまつた。しばらくは閉鎖して、再整備が必要なくらいに。

怪我をした人も一〇人じや下らなかつたはずだ。

そんなことをし出かしてしまつ、それどころか二ーナ教授の話では今回が初めてではないというゾフィアさんが、捕まりもせず外を出歩いてることが信じられない。

「そこの辺は複雑な事情があつてね。今回もこの後、しかるべき場所に連れて行かれると思うけど、たぶんいつも通りすぐ出てくると思うわ」

机に頬杖を着きながら言う二一ナ教授の言葉が飲み込めない。

いくら不思議なことや驚くことが多い魔法町と言えど、騒動を起こし、人に怪我をさせたり公園を荒らしたりしたら、捕まるのが当然のことだ。

そんな人がすぐ出てきてしまうなんて、あり得ることじゃない。

「なんでなんですか……」

「まあ、湯川君も感じたと思うけれど、こいつは天才的な発明家なのよ」

「それは、わかりますが」

「だから、こいつに恩を売るためにお金を出す人はいくらでもいるわ」

法が整備された魔法町であっても、お金の力によつてある程度どうにかなつてしまふのは、今も昔も同じだ。お金を積めば保釈されることもあるし、腕のいい弁護士を雇えばよほどのことをしてない限り、無罪や軽微な罰則で済んだりもする。

実体は恐ろしいものだつたわけだけど、空間ポケットは確かに凄い発明品だつた。僕も感心してしまつたくらいだし。

「ただいろいろと問題があつてねえ……。こいつが一番最初に世の中で注目されたときにつくつたものつて、なんだと思う？」

「いえ、わかりませんが」

「確か停蔵棺桶、だつたわよね？」

「ええ」

わからない僕の代わりに答えたのは、ミレーユ助教授。

ニーナ教授と同じように眉根にシワを寄せ、複雑な表情を浮かべている彼女の言つた停蔵棺桶というものを、僕は知らなかつた。

「どんなものなんですか？」

「限定された空間の時間を、ほぼ停止させる技術が確立されているのは知つてゐるわね？」
「ええ。でもあまり実用的じやなかつたですよね」

「その通りよ」

限定された空間、例えば冷蔵庫程度のサイズの中身の時間をほぼ停止させることができ
きる技術は、理論としては実現できていた。

ただし時間を停止させるためには、限定された空間の中だけとは言え、恐ろしいほど
の電力を必要とし、その上安定性がいまいちで、ちよくちよく部分的に通常時間に戻つ
てしまふ現象の発生を抑えきれないことが知られていた。

時間が停止した空間は光はもちろん、あらゆる観測手段が使えないため、ムラのある
通常時間復帰を観測することも難しく、実用性の低い停蔵庫しかつくることができてい
ない。

「こいつはね、以前大学にいたときに、電力供給も不要で、ムラなく完璧に時間を停止さ
ない。

せられる上、外からの観測も可能なものをつくり上げたのよ」

「……凄いっ」

空間ポケットでも驚いた僕だけど、その停蔵棺桶にはさらに大きな驚きを覚えていた。

「でも、なんで棺桶なんですか？」

「……はあ」

僕の問いに、ニーナ教授は大きくため息を漏らす。

そんな彼女の代わりに、ミレーユ助教授が答えてくれる。

「ガラス張りの棺桶でね、中に入れたものの時間は完璧に停止してるので、外から光学観測が可能だつたのよ。理論自体は以前からある時間停止と変わらないのに、どうして外から観測できて、ムラなく時間を停止できるのか、結局解明できなかつたそうよ。この子の発明品は、他の人には再現できないものが多いのよ」

見せつけるように胸の下で腕を組むミレーユ助教授も、そう言つて大きなため息を漏らした。

「まあそんなものだつたわけ。棺桶である理由のひとつは、空間ポケットと同じで、魔力で稼働するものだから。中に入れられるのは人間に限定されてるの」

「なるほど。それで棺桶」

「それだけじゃないわ。こいつがそれをつくつた理由はね——」

「永遠に、ニーナをいまのまま保存するためですよ」

ニーナ教授の言葉を遮り、場違いな元気のいい声で言つたのは、ゾフィアさん。

「ニーナ教授を、永遠に保存?」

「ええ。湯川さんはニーナのことが美しいと思いませんか?」

「それは……、まあ」

ちらりと見たニーナ教授は、少し金糸のような髪が乱れていたりはするが、確かに綺麗だと、美しい人だと思う。

「老いによつて衰えることなく、改造などの手も加えず、永遠にその姿を保つためには、停蔵棺桶に入れるしかなかつたのです。ニーナはそうして保存するに足る人です。でも、拒否されてしまつたんですよー。不思議ですね」

本当に理由がわからないように、ゾフィアさんは小首を傾げて見せる。
目隠しもされてるからわからないが、たぶん本氣で不思議そうな表情を浮かべていることだろう。

「そりやあ私だつて永遠に老いないというのには興味がないわけじやないけど、そのために時間を停止させて保存されるなんてまつぴらよつ
「本当に残念です。ニーナは人類にとつての宝だと思いますのに。保存が叶わないな

ら、いつそのこと食べてしまいたいですね。そうすれば、わたしとひとつになつて、二一
ナは永遠にわたしの中で生き続けることになりますし」

そんなゾフィアさんの言葉に、クシヤミが出そうになつていたときよりもさらに強い
恐怖と寒氣に、僕は襲われていた。

——狂つてる!

ここに戻るまでに聞いた、ゾフィアさんの通称。

狂才乙。

見た目もちよつとした言動も普通なのに、まさにその通称がぴつたりの思考を、彼女
がしていることを僕は理解した。

「もういいわ。連れて行つてちょうどだい」

ニーナ教授の言葉に、実験室の外で待つっていた警備員がふたり入つてきて、ゾフィア
さんの腕を抱えて持ち上げた。

「また近いうちに会いましょう、ニーナ」

「イヤよ!」

「本当にいけずですね、ニーナは」

拒絶の言葉も気にした様子もなく、クスクスと笑い声を漏らすゾフィアさんは、実験
室から連れ出されていった。

どつと疲れた僕は、近くの椅子を引き寄せて座り込んだ。

「なんか、凄まじい人ですね……」

「ええ。本当に。ああいう人もいるのよ。いえ、本当に人なのかな? 地球人なのかな? どうかも、不明なのよね、あれは。何にせよ、今回の件はこれで終わりよ。いろいろ、不安はあるけれどね」

そんなニーナ教授の宣言に、僕たち三人は同時に大きなため息を吐いていた。
「でもまさか、クシヤミで死にかけるとは思いませんでしたよ。ミレーユ助教授の言うように、手術とか薬で治した方がいいものなんですかね」

「そういう方法があるってだけのことよ。別に強く勧める気ではないわ。手術や薬に頼りたくないという価値観も、別に否定されるものではないもの」

朝もそんなに強く勧めてきていたわけじやないミレーユ助教授は、僕の視線に肩を竦めて見せていた。

「別にいいんじゃない? 湯川君の好きにすれば」

目を細めながらそんなことを言い出したのは、ニーナ教授。

「そうですか?」

「ええ。この魔法町では、いろんな価値観の存在が許されてるんだからね」

「それは……、そうですね」

魔法町に住む人の価値観は、本当に多様性がある。

地球人の価値観なんてほんのひと欠片のものでしかなく、宇宙からやつて来た人だつて多いし、歴史の授業で習おうような昔の倫理観なんてもうすっかり形骸化してしまつている。

多様にして雑多、そしてそんな様々な価値観の折り重なりから発生するエネルギーこそが、いまの魔法町を活気づけていることは、誰も否定することではないだろう。

「その許される価値観の中に、狂才乙のものもあると言うのかしら？」

ぱつりと言つたミレーユ助教授の言葉に、僕とニーナ教授は顔を見合わせ、何度もなのかわからない大きなため息を漏らしていた。

「色即乙喰」了

第四話 「百花靈乱」

百花靈乱

* 1 *

大型のブラウン管モニタに向かい、手元のキーボードで実験結果の数値を打ち込んでいたニーナは、ぽつりとつぶやいた。

「面倒臭い」

細く白い左手の指でかき上げた腰までの髪は、一本一本が黄金でできた糸であるかの光沢を持ち、さらさらと背中に流れた。

色は濃紺と控えめであるが、ふんわりと広がるスカートの裾や、チューリップの花のようにな開いた袖口にレースがあしらわれた服を身につける。

ダークグリーンのネクタイが緩やかに、けれどはつきりと曲線を描く胸元の上、小さな顔にくつきりとした意思の見せる輪郭をした顔は、いまはその眉根に深いシワが刻ま

れていた。

ゾフィアが持ち込んだ空間ポケットの爆発により、積層上野公園周辺が破壊されてから一週間。

死者こそひとりも出さなかつたものの多数の怪我人と、完全修復に半年はかかるという公園の被害を出したが、事件としては一応落ち着きを見せていく。犯人であるゾフィアはいまは警察に留置されているはずで、大学も、ニーナの周辺も日常が戻りつつある。しかしながらあのとき骨折や打撲などの大怪我を負った湯川は、まだ大学に復帰していない。

完治まで三ヶ月と診断された怪我は、ゾフィアから分捕つた医療費を注ぎ込み、手配できる最高の病院と最新の医療技術、回復促進剤などを投入し、おそらく今日辺りには復帰できる予定であつた。

「早く帰つてきてくれないかしら？」湯川君

ひとつため息を吐き、ニーナは入力を中断してため息を吐く。

湯川の復帰が待ち遠しくて仕方がなかつた。

ニーナには彼の存在が必要であると、いままでも思つていたことであつたが、いまこそ彼の存在がほしくて仕方ないと思つたことはなかつた。

振り返つて見てみた実験室内。

実験用の机の上はもちろんのこと、床にも実験機材やボンベ、紙類のゴミなどで溢れ、すっかり腐海を形成している。パソコンを置いてある机の方にも、いくつもの紅茶のカップであるとか、お菓子の袋の群であるとか、片付けが必要なもので溢れてしまっている。

助手の湯川が、いまこそ必要だつた。

先週から事件のことで警察に何度も行つていて実験室の利用率は高くない。片付けようとも思つていた。

けれどやるべきこと、やりたいことがあると、どうしても片付けは後回しになつてしまう。

教授である二ーナに対し文句も言えば、小言も言うし、親かと思うくらい口うるさいこともあるが、それでも湯川は助手として優秀だつた。

「早く帰つてきてくれないと、貴方の今週の残りの仕事、片付けだけになるわよ」
自分のことは棚に上げ、キーボードをどかして机に突つ伏した二ーナは、そう愚痴をこぼしていた。

そのときだつた。

ところどころペンキの剥げた、実験室の扉を叩くノックの音がした。

「湯川君かしら？」

——よしつ、これで部屋も片付くし、美味しい紅茶も飲める！

希望の部分は口から漏らさないよう気をつけ、できるだけ平静を装いつつ、しかし唇の端が笑みにつり上がるのを押さえきれないニーナは、オフィスチエアから立ち上がりつて扉に近づいて行つた。

*

愛用のダブルサイクロンホウキから降り立つた、大学の本校舎中層にあるエントランスには、ホウキや反重力シユーズなどで飛び立つ人、僕と同じように降り立つ人で賑わつてゐる。

ちようどお昼時。

大学内にいくつもあるそれぞれ個性のある学食や売店は人でごつた返す時間で、食事処の多い大学の周辺で昼食を取る人も多い。

この辺りでもひときわ高い国立魔法科学大学の校舎の周囲には、上にも下にも様々な人が飛び交つていた。

——なんか懐かしいな。

今日の午前中に行つた病院で、僕は医者から完治を言い渡された。

ゾフィアさんからの医療費とか言うので時間優先で治療してもらえたため、貧乏学生である僕が出せる金額じや診断通り三ヶ月はかかつただろう怪我は、たつた一週間で治つてしまつていた。

二ーナ教授やミレーユ助教授には怪我がなかつたし、僕もこうして大学に復帰できたし、ゾフィアさんもいない。事件の爪痕はまだ残つているだろうけど、今日からはこれまでと同じ日常生活が始まる。

早めに昼食を済ましてきた僕は、ホウキをエントランスのどこにある鍵付きロッカーに収め、早速二ーナ教授がいるだらう実験室に向かう。

——ゾフィアさんとは、もうしばらくは会うことはないだらうな。

空間ポケットなんでものを造れちやう凄い人なのはわかるけど、積層上野公園はもちらん、僕を含めてたくさんの怪我人を出したんだ、実刑を免れることはないだらう。

二ーナ教授への執着の凄まじさもあるし、可愛らしい笑みの裏で僕に対する敵愾心むき出しのこともあるし、見習いたいくらい凄い人なのはわかつてゐるけど、二度と会いたくなかった。

——二ーナ教授の助手を続けてたら、また会うこともあるのかなあ。

そんなことを思つてため息を吐きつつ、比較的人の少ない実験室ばかりが集まつてゐる区画までやつてきた。

三日の入院の後は自宅療養で、一週間ぶりの実験室。

もうすっかり見慣れてしまつてゐるその古い扉に、やつと戻つてこられたのだと実感した僕は、笑みを零しつつ軽くノックをした。

「失礼します」

部屋の照明が磨りガラス越しに点いているのを確認した僕は、中にいるだろうニーナ教授に声をかけながら扉を開けた。

実験室の中では定位置となつてゐるパソコンを置いてあるデスクの前のオフィスチャアに座る、ニーナ教授。

一週間ぶりの彼女は相変わらず見惚れてしまいそうなほど綺麗で、可愛らしい。

が、部屋に一步踏み込んだ僕のことを見るその眉根には、深いシワが刻まれていた。たつた一週間で腐海となりつつある実験室の中よりも気になつたのは、ニーナ教授の側に立つてゐるふたりの人物。

ひとりはたぶんどこかの営業らしい、満面の愛想笑いが板についている男性。

パリツとした彼が着てゐる黒のビジネススーツはでも、おしゃれなデザインのものだ。よく大学に出入りしてゐる業者の人とは違い、ハイソな業界の営業であることを窺わせるものだつた。

それからもうひとりいる、小柄な人物。

赤い柄物の和服と、しつとりとした長い黒髪。それから、どこか人形染みた整った顔立ち。

ゾフィア・フランケンシュタイン。

「え？ あれ？ あ？」

彼女のことを認識した瞬間、意味不明な声を漏らした僕は、その場にへたり込んでしまっていた。

* 2 *

「なんでゾフィアさんがいるんですか?!」

そんな僕のできるだけ抑えた声に、二ーナ教授は疲れた顔で乱れた金色の髪をかき上げた。

腐海に飲まれつつある実験室では椅子も場所も足りないので話をするることはできず、ゾフィアさんはともかく営業の男性は外来客なので、応接室に案内することになった。一番近い食堂でお茶と茶菓子を用意してもらい、それをお盆に乗せた僕は二ーナ教授と並んでゾフィアさんが待つ応接室に向かっている。

ゾフィアさんには正直会いたくないが、さすがに二ーナ教授だけで会わせるわけには

いかない。

「まあ、あの子がすぐ出てくるのは予想通りではあつたんだけどね……」

「予想通りい？」

そう言って深いため息を吐くニーナ教授に、僕は驚きの声を上げてしまっていた。

あれだけの事件を起こし、警察に捕まつて、しばらくは陽の下を歩けなくなっているはずのゾフィアさん。

それなのに彼女は、今日アポイントもなく相談があるとニーナ教授を訪ねてきたのだ

といふ。

彼女が外を出歩いていられる理由を、僕は思いつけなかつた。

「湯川君も知つてゐる通り、あの子は研究者というより発明家なのよね。大学にいたときも、その前も、私も知らないけどたぶん大学を離れていたときも、いろんなものを造つていたのよ」

肩を並べて廊下を歩くニーナ教授の美しい髪は、いまはいつもに比べてツヤがないよううに思えた。

「私たちのような研究を旨とする者でもそれなりに企業とはつながりがあるんだけど、あの子の場合はそのパイプの太さと数が比較にならない。気が向くままにほしいものを造つて、それを登録していろんなパテントを持つてる。造るもののが造るものだから直

接製品化できるものは多くないみたいだけど、空間ポケットもそうだったように、応用すればどんでもない製品に化ける」

ニーナ教授の言うように、僕だつて自分の研究関係とか、助手をする中で企業や他の大学とのつながりはある。自分の研究を公表して、個人や法人からの支援を受けるのも普通のことだし。

逆に大学に許可を取つて、外から依頼された実験や検証で小遣い稼ぎ程度の仕事を受けることもある。

でも僕たちがやつている基礎研究というのはたいていの場合、即座にお金になるものじゃない。

研究の大半は、人から評価されていたとしても、直接お金になることは少ない。ずいぶん時間が経つてから注目されることも珍しくないし、場合によつては論文を発表した本人が亡くなつてから意味を持つなんてこともあつたりする。

それに対して発明家寄りのゾフィアさんの造るものは、彼女が造つたものが直接製品にならないとしても、基礎研究に比べれば圧倒的に製品に近いと言える。

この前の空間ポケットだつて、あの使い方はどうかと思う。でもそれに使われている理論や技術の組み合わせは、空間ポケット以外にも応用が利く、画期的なものであることは僕にもわかつっていた。

そうしたものを作ったのだとしたら、彼女は多くの企業に注目され、引っ張りだこになつていても不思議ではない。

「そのことと、いまゾフィアさんが外を出歩いていることと、どう関係しているんですか？」

「わかると思うけど、あの子の持つてるパテントを利用したいって企業は多いのよ。だからあの子がひと声かければ、保険金を出してくれたり有力な弁護士をつけてくれたり、裁判を有利に進めるための証拠を揃えてくれるつてところはいくつも出てくるわ。過去に何度も捕まってるんだけど、毎回そんな感じですぐに出てきちゃうのよ」

真っ暗な顔をしたニーナ教授は、細く綺麗な親指と人差し指で輪をつくり、僕に見せつけてくる。

「世の中はつまり、お金でどうにでもなっちゃうってこと。悲しいことだけどね」

「まあ、そうかも知れませんが、ね……」

お金で望んだことが何でもできるというのは幻想に過ぎないけど、社会の中に限定すればそれは真実だ。

僕だつてゾフィアさんのことは怖いけど、ニーナ教授がこれほど嫌がつてる理由を、いまこそ理解した。

「でも……、今日は何しに来たんでしょうかね」

「さあ？ 付き添いと言つてけどね。何でも一緒にいた男の人が、私に紹介したい商品があるんだって」

ゾフィアさんのインパクトに隠れてしまつていた、営業の男性のことを思い出してみる。

スーツはけつこう高級そうで、髪や肌の手入れも怠つていなさそうだった。何より愛想笑いが板についていて、それなりの経験があり、それなりの業界にいる人物だと想像ができる。

理系の、それも魔法科学系大学に出入りしているには、生徒はもちろん職員も、さらには業者なんかも野暮つたいか、怪しい感じの人が多い。

もちろん割合の問題で、二ーナ教授やミレーユ助教授のような美少女、美女だつているし、まともな人もおしゃれな人も少なくない。中身がまともかどうかは、言及しないが。

あの営業さんについては、どうにも僕や二ーナ教授が触れることが多い業界の人物ではないように思えていた。

「悪い予感しかしないんだけどね……」

「それは確かに……」

応接間の前に着いた僕と二ーナ教授は、扉に手をかけながら、一緒に大きくため息を

吐いていた。

*

営業の男性の話を理解することを、僕は放棄した。

比較的簡素な応接室で、僕は眉を顰めながら壁を背にして立つ。僕の斜め前でソファに座るニーナ教授も、微妙な表情を浮かべることから察するに、同じように聞き流しているらしい。

ファッショントレーディングをクリエイトするガジェット、の売り込みに来たという営業さん。

その見事にカタカナ言葉ばかりを並べた営業文句は、細かいことを考えていない人はその勢いと笑顔で押し切れるかも知れないが、僕やニーナ教授には通用するのじやない。

僕たちも学術用語を多用することは多いけれど、それとはまた違う翻訳が必要な言葉を並べられても、呆れるばかりで魅力を感じることはない。

ニコニコとした笑顔を浮かべながら話を続ける営業さんのことは無視して、僕は手渡された資料を眺めていた。

——ゾフィアさんは、いつたい何を考えているんだろう？

付き添いできただけだと言い、挨拶の後はいまのところ口を挟んでこないゾフィアさん。

こうして見ている分には、その整った顔立ちの可愛らしさに見惚れてしまいそうだ。でも営業に来るだけだったら、正規にニーナ教授にアポイントを取つてくれればいい。それが大学や研究に関係することだつたり、個人的にであつてもニーナ教授が興味を持つようなことであれば、邪険にすることはない。営業さん単独なら、だけど。

それでも今日、わざわざここに一緒に来たと言うことは、ゾフィアさんなりに理由があるんだと思う。

けれど僕は、彼女の思惑を推し量ることができないでいた。

「——ええつと、つまり、新しいコスプレグッズってことで良いのかしら？」

「そうですね。そうしたワードでエクスプレスするのがわかりやすいかも知れませんね」

さすがに辟易してきたのか、ニーナ教授が営業さんのトークを遮るようにそう言った。

資料の他にローテーブルの真ん中に置かれているのは、幅も厚みもそこそこの銀色のブレスレット。

小型の真空管が埋め込まれるように取りつけられたそのブレスレットの商品名は「ゴスト」。

資料と営業さんの話を総合すると、魔法を応用した拡張現実（A R）の進化形、魔法現実（M R）技術を組み込んだ商品らしい。

単体で機能するものじやなく、複数人が端末であるゴストブレスレットを填め、別途ホストとなるゴストシステムを設置する必要がある。

ブレスレットには装着者の精神波を送受信する機能があり、ゴストシステムを介することにより装着者全員に望む姿を見せることができる。

言うなればA Rコスプレだ。

A Rと言えば遙か昔から利用されている、モニターや眼鏡型ディスプレイを利用し、カメラを併用することで現実には存在しない物体をあたかも存在するかのように見せるものが一般的。そこから発展して精神波を利用したダイブデバイスがあつたり、看板なんかのネオン装飾の代わりに使われている、ホロンというホログラムもA Rの一種と言える。

遊びや装飾だけでなく、広告なんかにはよく利用されてるし、高空の空路では渋滞などの変動する情報を表示するのにホロンが使われている。

ブレスレットとホストが必要なゴストは、ブレスレット装着者同士しか衣装が見えな

いため、ホロンほど汎用性は高くない。現実に投影するものであるため、モニターに表示される旧来型A.R.ほどの自由度があるわけでもない。

でもその両方にとつて中間的な位置にあり、比較的閉鎖的な場所での使用、例えばコスプレパーティであるとか、結婚式であるとか、準備に時間と手間がかかるような場所で、それらの圧縮と手軽さを武器に売り込もうという商品だということはわかつた。

コスプレと言えば、昔ながらの衣装のみのものがいまでも一般的だけど、他にもD.N.A.コスプレといった価格的にはちよつと高く、同時に入手ルート次第では危険が伴うものなどがある。

ゴストは安全で、まずはパーティ会場での貸し出しが想定されているため、荷物なしでコスプレが楽しめるという、興味がある人にとっては魅力的な商品のように思えた。「行く行くはゴストを」「一般的なファッショニアイテムにしていきたいと考えています。服を着る代わりにゴストで着飾る。気分やシチュエーションが変わればその場で着替える。という社会イノベーションが我々の目標です」

「……これ、見た目だけなら環境変化に弱いんじゃないの？　暑かつたり寒かつたりする」と、大変じゃない？　厚着はコスプレ衣装からはみ出そうだし」

「それについては問題ありません。精神波を使いますので、はみ出しは認識しないようにできます。ゴストブレスレットにはボディコンディショナーが内蔵されていますの

で、多少の暑さ寒さは気になりません。それでも厳しい環境では、専用のアンダーウェア、ゴストウェアを用意しております。ブレスレットとウエアを組み合わせれば、砂漠のど真ん中でも、真冬の南極大陸でもコスプレパーティを開催できます」

「なるほどねえ」

営業さんはきはきした声に、ニーナ教授は資料をめくりながら気のない返事をしていた。

——でも、ゴストにはゾフィアさんが関わっていそうなところ、ないよな。

資料を見てみた限り、確かに商品としては画期的なんだけど、空間ポケットのような常識から隔絶した発想や技術が組み込まれているようには思えない。

見えない部分で関わっているとしたら、そこをネックに恐ろしいことが起こりそうで、面白そうではあっても使う気にはなれなかつた。

「これ、貴女の手が入つてそうな気配はあるんだけど、それはどこなの？」

僕が覚えた疑問を二ーナ教授も持つていたのか、黙つてニコニコと笑つていたゾフィアさんに質問した。

「それはこここの部分ですね」

自分の資料をめくつてテーブルに置いたゾフィアさんは、ページの一カ所を指し示した。

「イマジュネーションコンバータ？」

「そうなのですよ！ フランケンシュタイン様にはそのイマジュネーションコンバータの部分で協力してもらっています。ゴストはブレスレット装着者が予め用意したファッションドータと、ホストに入力したデータの他に、装着者がイメージした姿に変身する機能があるのですつ。また、データがある場合でも細部のディテイールなどの補完や調整にイマジュネーションコンバータを利用しています。自由に、そして不都合なく思いのままファッショントを楽しむことができるのは、その技術を組み込んだためです！」

熱を籠めて語る営業さん。

彼の言う通り、データなしでも変身でき、あまり細かいところまでつくり込まれていないデータでも利用できるという、けつこうコアな部分の機能のようだつた。

ただ、この機能には空間ポケットのような危険性は感じられない。

「元々は別のことにも使おうと思つて開発したものだつたのですけれど、上手くいかなかつたのでパテントだけ取つて放つておいたのですよ。それをここの方が使いたいと連絡を頂いたので、提供することにしたのです」

笑みを浮かべながら言うゾフィアさんは、嬉しそうにパチンとひとつ手を叩いていた。

その姿だけ見ると、純粹に嬉しがつている可愛らしい女の子だけど、彼女にはその裏があることは充分以上にわかっている。警戒は解けない。

それにたぶん、このタイミングで一緒に現れたつてことは、ゾフィアさんの保釈金を支払うなり、弁護士をつけて留置所から外に連れ出したのは、営業さん本人ということはないだろうけど、ゴストの会社なのだろうし。

「元はどんなものに使う予定だったの？」

「それはですね！」

ニーナ教授に質問されたのが嬉しかったのか、輝かんばかりの笑顔で応じるゾフィアさん。

「女の子の永遠の夢、違う自分になりたいという変身願望を叶える道具、変身ブレスレットをつくるための技術だつたのですっ」

変身願望は女の子だけのものじゃないと思うけど、そこについては置いておく。

何となく背筋に冷たいものを感じ始めた僕は、口をへの字に曲げてそれ以上ゾフィアさんの言葉を聞きたくない気持ちになっていた。

「変身ブレスレット？」

「はいっ。DNAレベルで人間を変身させるブレスレットを造ろうと思って、望む姿になれるようイメージネーションエンジンを組み込んでみたのですが、うまくいかなかつ

たのですよお」

「DNAレベルで、つて……。いつたいどんなところが上手くいかなかつたの？」
 「アニメやゲームのように瞬時に変身が完了するようにしたかったのですが、全身のDNAをすべて書き換えるとなると最低でも数時間、平均で数日はかかるとなつたのです。それに、当然なのですが脳などの中枢神経も造り替えられてしまうので、記憶や経験の保持が難しかつたのです」

さらつと凄いことを言つているゾフィアさん。

思つた通りのものはできなかつたようだけど、機能するものは造れたわけだ。ただし、もし人間が使つたら、変身どころか別人になつてしまふものだけれど。

驚きに口を小さく開けてしまつた僕に対し、二ーナ教授は眉根のシワを深くして、さらにゾフィアさんに質問をする。

「それ、実験動物でテストしたわけ？」

「まさか。変身願望を口に出してしまうほど強く持つてしまふのは知的生命体だけですよ？ 実験動物では充分な検証ができませんよ」

「——実験、したの？」

「ええ、もちろん。あ！ でも心配ありませんよ？ 世の中のゴミがほんの数人ほど、無垢でまつさらな美少女という、新しい人生を歩むことになつただけですから、世の中に

何も損失は出していません」

「……」

驚きのあまり声も出ない。

倫理観や常識を求めるても仕方ない人だろうとは思うけれど、にこやかな笑みで語るゾフィアさんの方が同じ人間と思えないほどだつた。

彼女の隣に座っている営業さんも、同じように笑みを浮かべている。

意味はわかつてゐるはずなのに、いまの発言に対する思うところがあるのかどうか不明だ。ある意味、そんな人だからこそゾフィアさんと一緒に営業に来たのだろうけど。

ゴストはDNAを操作するような商品ではないから、イマジュネーションコンバータが変身ブレスレットのように危険のある効果を持つことがなさそうなことだけが、救いかも知れなかつた。

諦めいきつたため息を吐いたニーナ教授は、今日の来訪の理由をふたりに問う。

「それで、画期的な商品だというのはわかつたけど、どうしてそれを私に紹介しに來たわけ？」

「ええ、それが今日の本題なのです。ゴストのプロモーションを兼ねて、来週ハロウインパーティを開催することになつたのです。良いパーティになりそうなので、ニーナを誘いに來たのですよ」

一気にきな臭くなつた話に、ニーナ教授はもちろん、僕も眉根にシワを寄せていた。

「このハロウインパーティーは我が社が主催する一大イベントで、魔法町だけでなく、地球中から有名コスプレイヤーを集め、さらに地球外の著名人を招待しております」

ゾフィアさんの言葉を受けて営業スマイルで話す男性は、書類鞄からパーティーのポスターを取り出して広げた。

覗き込んでみると、コスプレパーティという割りにかなり大きな規模らしい。

大学で開催するパーティーでも何百人という規模になるものは、それほど多くない。費用の問題もあるし、主賓のスケジュール調整や、使える会場が限られてくるとかの様々な理由がある。

このハロウインパーティーは、開催する会場から想像するに、三〇〇から五〇〇人規模のようだ。ゴストのプロモーションイベントだから招待客がかなり多いようだけど、大半は一般客らしい。

「一般参加の方のチケットは希望者多数だつたため、抽選の上で完売しております。最終的には五〇〇人を少し超えるくらいの参加者数で調整中です」

ポスターは一般客向けらしく、参加方法や開催内容の記載もある。

豪華な食事つきのパーティーが有料なのは珍しくないけれど、料金は僕が参加したことのあるパーティに比べ、ひと桁近く高い。

それで抽選が必要になつた上、完売しているというのだから、ゴストの注目度は一般にもかなり高いとわかる。

笑みを浮かべるゾフィアさんと営業さんに見つめられているニーナ教授の横顔には、かなり渋い表情があつた。

先日のことがあつたのだ、いくらお祭り好きのニーナ教授とは言え、ゾフィアさんが関わるとわかっていて参加する気にはならないだろう。

「パーティの出店リストはこちらです。わたしも協力して、多少無理を通してお願ひをしたところもありますが、良いお店に出て頂けたと思います」

そう言つてゾフィアさんが取り出した紙には、パーティにブースを出すお店のリストが並んでいた。

——あ、これはヤバいな。

見た瞬間、僕はそう思つてしまつた。

視線を飛ばして見ると、先ほどまで厳しく細められていたニーナ教授の目は、大きく開かれ瞳が輝き始めている。

リストに並んでいるお店は、僕でも知つてゐる名前がいくつもあつた。知つてるだけじゃなく、利用したことがあるところも少なくない。

魔法町の有名店はもちろんのこと、全国どころか世界中の名店が名を連ねている。と

くにスイーツには力を入れているらしく、たまにニーナ教授が奮発して取り寄せをしている、遠方のスイーツショップの名もあつた。

「参加者は全員、こちらのお店の料理が食べ放題なのですよ」

「……参加費用が必要とか言うの？」

「いいえ。ニーナのことはわたしの枠を使って招待いたしますから、費用なんていりません。先日迷惑を掛けてしまつたので、そのお詫びの代わりです」

「んー」

右手の人差す指でピンク色の唇をゆっくり撫でているニーナ教授。

考え込むような仕草をしているけれど、もう負けは決まつていて。彼女の頬は、いまにも緩みそうなほどぴくぴく震えているのだから。

「参加の条件ですので、ニーナにもゴストを着けて頂きます。ハロウインパーティで仮装しないというわけにはいきませんからね」

「——はあ、わかつたわ。でも条件があるの」「何でしようか？」

笑みを絶やすことのないゾフィアさんを細めた目で見つめ、ニーナ教授は言う。

「先週のことは私だけじゃなく、ここにいる湯川君や、ミレーユも迷惑を被つてるわ。お詫びというなら参加者は三人、そのゴストのブレスレットも三つ、いま用意してもらひ

たいんだけど?」

「ミレーユ? お友達ですか?」

僕のことはともかく、ミレーユ助教授の名前を聞いた瞬間、ゾフィアさんの顔から笑みが消えた。

——どうしたんだろう? ニーナ教授。

こここのところ打ち解けてきていた僕や本人の前でならともかく、国立魔法科学大学の教授で、学長でもある立場から、ニーナ教授は外の人に対してもミレーユ助教授のことを呼ぶときには、「ミレーユ助教授」ないし「シュレデインガー助教授」と言うのが普通だ。でもいまは、呼び捨てにしていた。

睨むような視線で見つめ合うニーナ教授とゾフィアさんに、営業さんもそれまでの愛想笑いを保てずにおろおろとしている。

「貴女も知っているでしょう? ミレーユ・シュレデインガー」

「ああ、あの人ですか。ニーナはあの人からずいぶん迷惑をかけられていたと思いま
たが」

「いまでもそれはあまり変わらないけどね。さすがに時間が経つてから、少しほは打ち解けてるのよ」

「——ですか。なるほど」

相づちを打つてわずかに目を伏せたゾフィアさんは、しばらく考え込むように黙り込む。

それからニッコリとした笑みを戻し、営業さんに言いつける。

「ブレスレットあとふたつなら、いまお持ちですよね？」

「え？ あ、はい。ありますが……」

「では無理を言つてしまつて悪いのですが、全部で招待者は三人ということでお願いします」

「いや、あの、ですが……」

「お願ひします」

「——はい」

ニーナ教授しか呼ぶ気がなかつたらしい営業さんだけど、ゾフィアさんの笑顔の圧力には敵わなかつたらしい。

鞄の中からあとふたつ、ゴストのブレスレットを取り出してテーブルに置いた。

「当日、わたしはスタッフとして裏にいると思うので挨拶もできないと思いますが、楽しんでください」

「こつちもスケジュールがあるから絶対参加するとはこの場で回答できないけど、時間が許す限り参加させてもらうわ」

立ち上がつたゾフィアさんと営業さんに合わせて、ニーナ教授もソファから立ち上がった。

みんな笑顔なのに、いまにも最終戦争が始まりそうな気配に、僕は息を飲んでいた。

*

「戻、ですかね？ これ」

ゾフィアさんと営業さんが帰り、僕はニーナ教授とともに実験室に戻つてきていた。腐海への対応は、明日になりそうだ。

彼らの残していったゴーストの資料と、パーティのポスターを横目で見ながら、僕はニーナ教授の返事を待つ。

「さあ？ どうでしようね。さすがに先週のこともあつたし、今回は何もしてこないんじゃないかしら？ 壊れてるけど、表面的な部分は常識的よ、あれは」

新しく入れた紅茶のカップを口元に寄せながら、ニーナ教授はそんなのんきなことを言う。

本心で言つてるかどうかはわからない。

先ほどまでと違つて、苛立つたり訝しんでる様子のないニーナ教授は、長い睫毛をわ

ずかに伏せて、資料に目を落としている。

——でもなあ。

そんな彼女の横顔を見ながら、僕は不安を拭えずにいた。
ゾフィアさんのニーナ教授へのこだわりは、常軌を逸している。

先週事件を起こしたばかりだから、なんて常識的な判断は、彼女が持っているように
は思えなかつた。

「湯川君の言いたいこともわかるんだけど、パーテイはある子が主催するものでも、コン
トロールしてるわけでもないからね。問題を起こしたらそれこそ、いまのタイミング
じゃ留置所に戻ることになるでしようし。それにね——」

僕に振り返り、満面の笑みを浮かべたニーナ教授は言う。

「これだけのお店の料理を好きなだけ食べられる機会は、そうそうないわよ?」
「それもそうなんですが……」

出店リストに載つているお店には、貧乏学生の僕じや奮発しても行けないお店がいく
つも並んでる。

ゾフィアさんが関わつていなければ、前日から食事を抜いて万全の体制で参加したい
くらいだつた。

ニーナ教授は、出店リストを見てニコニコしている。

果たして僕が怖がりすぎなのか、ニーナ教授が脳天氣すぎるのかは、わからなかつた。

——でも、ゾフィアさんとのつき合いは、ニーナ教授の方が長いからなあ。

僕が知つてゐるわずかなことよりも、ニーナ教授はゾフィアさんのことを知つてゐるはずだ。それでも大丈夫だと言うなら、大丈夫なのかもしれない。

——それにどうせ、僕は行くしかないしな。

命の危険があるかも知れない場所に飛び込むのは莫迦だし、もし命令されても、それが教授権限だろうが、学長権限で発せられていようが、従う義務はない。

でもニーナ教授が参加するというなら、僕は一緒に行くしかない。

いろいろ複雑な想いはあるけれど、その中の一番大きなものは、「放つておけない」という気持ちだ。

僕が苦労性だというのは自覚してる。それについてはもう諦めてる。やらぬいで後悔するより、やつて後悔した方がいいというのは、まだ十八年程度の人生だけど、何度も経験してきてる。

頬に笑みを浮かべてるニーナ教授のことを眺めながら、僕は苦笑いを漏らしていた。

「まあ何にせよ、大丈夫よ、湯川君」

「何が大丈夫だというんですか？」

頬には笑みが零れてゐるのに、碧い瞳は笑つていないニーナ教授。

射貫くような攻撃的なものじゃない。でも揺らぐことのないその強い視線に、彼女の決意を僕は感じていた。

「何かあつても大丈夫なように、対策も考えていくから」「……対策が必要にならないことを願いたいんですけどね」

「ふふつ。まあ、そうね！」

ため息を漏らした僕に天使のような笑みをかけてくるニーナ教授に、僕も不安な気持ちが落ち着いて、笑みを返すことができていた。

*

金糸のような髪を床にばらまくようにして倒れているのは、ニーナ。
大きく口を開け、だらしなく舌を垂らしている彼女の側には、大きな金盥が転がっている。

オフィスチェアに座り、ティーカップを口元に寄せながらその様子をじつと見つめているのは、ニーナ。

足首近くまでスカート丈のあるワンピースを着て倒れているニーナと、濃紺のシャツとスカートを身につけて椅子に座るニーナのふたりが、いまの実験室にはいた。

床に倒れているニーナを放つておいて、椅子に座るニーナは金色の髪を搔き上げながらパソコンのモニタに向かい合う。

キーボードの脇にケーブルが接続されて置かれているのは、ゴストブレスレット。

データ入力用に営業が置いていった専用ケーブルではなく、ワニ口のクリップが接続されたブレスレットの真空管は、青白い光を弱く放っていた。

「やつぱり、ゴストの中身を弄るのは難しいか……。上手いことつくつてあるわね。ヘタに弄ると正常に使えないようになつてる。別の対策が必要ね」

「うくつ、くくく……」

唇を人差し指で撫でつつぶやいているとき、頭の天辺を手で押さえながら、床に倒れていたニーナが立ち上がる。

「おはよう。そろそろ来ると思つてたから、仕掛けておいてよかつたわ」

「おはようじやないわよつ！　まつたく、こんなものを仕掛けてるなんて、どういうつもり？」

「それはこっちの台詞でしょ。そんな顔で何するつもりだつたの？　ミレーユ」

「うつ」

ニーナの言葉に、ニーナの顔をしたミレーユは半歩下がつて怯む。

それから大きくため息を吐き、首の付け根に爪を立て、肌を剥ぎ取る。

マスクのような肌をめぐり上げた下から現れたのは、くつきりとした目鼻立ちをしている女性、ミレーユ・シユレデインガー。

金色の髪とともに完全に剥ぎ取ると、クセの強い濃い茶色の髪が荒々しい滝のように流れ落ちた。

「ちょっと驚かせようとしただけだつたのに、痛いじゃないの?! というか少しぐらい驚きなさいよ!」

「ノックもせずに入つてこようとするからでしょ。自業自得よ。いまさら貴女のやることで驚くとでも思つてるの?」

できてしまつたコブに触れ痛みに片目を閉じながら、ミレーユはニーナが差し出した手にマスクを渡した。

「よくできてるのね、これ」

「少し前に企業から依頼があつて共同開発した最新型のDNAマスクよ。母体浸食型ではなくて、予めインプットしたデータに基づいて、装着と同時に形状が変化するタイプ」「それで私の顔のデータを使つたわけね」

「ふふん。不自然にならないほどの薄さで顔の輪郭から骨格まで変えていくように見えるし、肌や髪の質感まで完璧でしょう? ちょうどいまの時期はハロウイン需要でいい小遣い稼ぎになつてくれてるわ」

D N Aマスクを撫でたり引つ張つたりしているニーナの前で、ミレーユは胸をこれでもかと反つて得意げな笑みを浮かべる。

「まあそんな話はともかく、よ。来週ハロウインパーティが開催されるのよ。ミレーユ、貴女にはそれに参加してもらうから」

「……参加してもらうから、つて。パーティなんかに参加してる暇はないのだけど？ スターを広げて見せる。」

「……参加してもらうから、つて。パーティなんかに参加してる暇はないのだけど？ 研究が溜まってるから」

「これは学長命令よ、ミレーユ」

手近な椅子を引き寄せて座つたミレーユに、睨みつけるような強い視線を向けたニーナはそう言つた。

大きく顔を歪め、ミレーユは不快さを露わにする。

「学外のパーティでしよう？ 学長命令を言いつけられる謂われはないと思うのだけれど？」

「貴女分の参加資格は確保済みよ。これを見ても参加しないと言える？」

ニーナは見せていたポスターの代わりに、出店リストをミレーユに手渡した。

「こ、これは……」

「参加すれば会場では食べ放題よ」

リストの上から下までをゆっくりと、食い入るように見ているミレーユに、ニーナは唇の端をつり上げて笑いながら言つた。

「——でも、学長命令というくらいだから、このお店もワタシを釣るためのエサなんでしょう？ 何が目的？」

顔を上げ厳しく目を細めて問うてきたミレーユに、ニーナは小さくため息を吐く。

「このゴストつてものの開発にね、あの子が関わってるの」

「あの子つて……、ゾフィア・フランケンシュタイン?! 今回はまた、ずいぶん早く出てきたのものね」

「ゴスト自体はたぶん問題はないと思うのだけど、これだけのイベントに関わっていて、あの子が何も仕掛けてこないなんてことは考えられない」

「なるほど、ね……」

出店リストの紙をニーナに返したミレーユは、顎に手を当てて考え込む。

「私にちよつかいかけてくるなら、今回ばかりはキツチリ処分しておきたいから、協力してほしいのよ」

「あれにはあまり関わりたくないのだけれどね……」
ニーナの求めるような視線に、ミレーユは憂いを浮かべた瞳で見つめ返す。

「でもまあ、これだけのお店を食べ放題というのは魅力的だし、この前のことはワタシも腹が立っているからね。できる限りの協力はするわ」

「ありがとう、ミレーユ」

安堵の息を吐き、笑みを浮かべたニーナに、ミレーユも柔らかい笑みを返していた。

「それで、貴女にはいくつか用意してもらいたいものがあるのだけど――」

椅子から立ち上がったニーナは、早速ミレーユにお願いを始めた。

* 3 *

ホテル・ニアムーン。

「これは……、すごいな」

僕は思わず、そんなつぶやきを漏らしていた。

夕暮れに沈みつつある、魔法町の上空に停泊しているホテルの全景を眺めるために、僕はダブルサイクロンホウキを探り空を高く上がっていた。

その偉容は、まさに天空に浮かぶ城。

隕石などの物理はもちろん、宇宙から降つてくる有害な精神波を防護する装置や、レーダーを収めた尖塔がいくつもあるホテルは、本当におとぎ話に出てくる白亜の城の

ようだつた。

規模は小規模な街ほどあるホテル・ニアムーンは、空を回遊している反重力町のようないくつものブロツクが集まつた街とは違ひ、ホテルの建物が浮かんでいる単体浮遊建築物だ。

必要な時間、必要な場所に停泊することは、そのとき以外は上空二〇〇〇〇メートルくらいまで上昇する半閉鎖型建造物となり、名前の通り地球で月に一番近いホテルとなる。

「さあ、そろそろ行きましょう」

僕と並んでホテルの全景を眺めていたニーナ教授に声をかけられ、一緒に来たミレーユ助教授と三人でエントランスへと降下していく。

正面入り口の前で待ち構えていたボーアさんにニーナ教授が名乗り、ホウキを預ける。左右ひとりずつのボーアさんが開けてくれたガラスの扉の向こうは、白亜の城らしい豪華な空間だ。

三階まで吹き抜けのエントランスフロアの天井には、豪奢なシャンデリアが吊り下がり、国立の中でも日本最高位と言つても過言じやないうちの大学の学長室よりも明らかに高級な絨毯を踏み、地球だけでなく宇宙中から集められた品の良い調度品の数々を眺めつつ、僕は先を歩くニーナ教授の後をミレーユ助教授と並んで着いていく。

キツチリとしたドレスコードがあるほどには高級ではないが、気安く泊まれるほどではないここに、僕は入学式以来仕舞い込んでいたスーツを着込んでいた。

これから参加するのはハロウインパーティなんだから、服はどうでもいいんだけど、人気が高く、老舗としても有名なニアムーンに、大学に通つてるときのような服で来るわけにはいかない。

ミレーユ助教授もいつものワンピースよりも少しドレス調のものを着ているし、ニーナ教授は着崩していなければたいていそこそこの格好なんだけど、今日はいつもよりパリツとしたシャツを着、折目正しいプリーツのミニスカートを履いている。

ただ、ニーナ教授は早速ハロウイン気分なのか、頭から真空管が生えているし、なんとか実験のときに羽織つてる白衣姿だつたりするんだけど。

「…………」も、すごいな

ロボットのメイドさんに案内してもらつてたどり着いた、パーティ会場前の廊下。

開け放たれた扉の向こうに見えるのは、様々なコスプレ姿の人々。

ホテルに到着する前に身につけるよう指定されていたゴストのブレスレットによつて、僕はその様子を見ることができる。

妖精、妖怪、怪物といったハロウインにふさわしい姿はもちろん、偉人と思しき格好の人や、古いものから最新のものまでのアニメやコミックスのキャラクターたち。

怖いものから可愛らしいもの、果ては凄まじいのまで、世の中の不思議を一同に会しているような、すごい空間があつて、匂いだけでもヨダレが出て来そうな美味しいものを手に、楽しそうに過ごしている。

今回は宣伝イベントということもあり、仮装コンテストも行われるというから、みんなの気合いをひしひしと感じる。

決して安くない費用を払つてでも参加したい気持ちが、入り口から中をひと目見ただけでもわかるほどだつた。

「浮かれてないで、さつきと準備するわよ」

「あ、はい。……準備？」

「二ーナから聞いてるでしょう？　あれが仕掛けてくる可能性がゼロではないんだから、対策くらいするわよ」

「なるほど。そうですね」

すっかり他のことに気を取られていた僕は、二ーナ教授とミレーユ助教授の言葉にやっと警戒心を取り戻す。

会場のすぐ近くにある控え室に、メイドさんの案内で入つた。

「貴方はこれ、せつかくだから着てね」

他に参加者のいない控え室で、二ーナ教授が差し出してきたのは、ゴスト用のアン

ダーウエア。

ダイビング用のウェットスーツか、簡易遊泳用の宇宙服に似たそれは、希望者が着られるよう控え室に置いてあつたらしい。

意外と広い控え室には、鏡の前に設置されたカウンターと椅子、休憩室を兼ねているらしく簡易な応接セットがあり、他に着替え用のカーテンで仕切ることができるブースがあつた。

「えー。僕だけですか？」

「そうよ。不満？」

「——いえ」

少し前屈みになつて僕を見つめてくるニーナ教授。

子供っぽい感じがするのに、頬を膨らませて上目遣いのニーナ教授の攻撃力は、僕には必殺だつた。

そんな彼女の攻撃に僕が抗えるはずもなく、ひとつため息を漏らしてから着替えブースに入つて服を脱ぎ、アンダーウエアに着替えた。

中にあつたクローケに預ける用のボックスに服を入れ、そこには入らないコートを肩に引っかけてブースを出た。

「あ、湯川君。コート貸して。会場内、ちょっと室温低いみたいなのよね」

ミレーユ助教授と何か相談をしていたらしいニーナ教授は、出てきた僕を見つけて、ニコニコとした笑みで近づいてきた。

「寒そなんだつたら、ニーナ教授もアンダーウェア着ればいいじゃないですか」「イヤよ。着替えるの面倒臭いから」

しようもない理由で僕の提案を拒否したニーナ教授は、さつさと僕の肩からコートを奪い取っていく。

「汚したりしないでくださいよ。それ以外に冬用のコート持つてないんですから」

「男のクセに細かいわね。代わりにこれ貸して上げるから、我慢しなさい。防刃防弾仕様だから、ちょっとは安心でしょ？」

僕のコートを着込んだニーナ教授は、代わりに今まで着ていた白衣を差し出してくる。

「うつ……」

「どうかした？」

「いえ……」

仕方なくアンダーウェアの上から白衣を羽織った僕は、いつも感じてるのよりも強いニーナ教授の匂いに、小さく声を上げてしまっていた。

決して広くない実験室の中で触れるほど近づくこともあるし、白衣の洗濯なんかは僕

がやつてゐるんだけど、手で触れる距離と着込むのとでは匂いの強さが大きく違う。

甘く、爽やかさもあり、汗なんかほんの少し鼻につくニーナ教授の匂いに、僕はこつそり白衣の襟元を鼻に寄せて、深呼吸をしてしまつていた。

「何してゐるの？」湯川君

「え？ あ、いや、何でもないですっ！」

「まあいいんだけど、念のためこれも被つておきなさい」

言つてミレーュ助教授が無理矢理頭に被せてきたのは、マスク。

ゴム臭かつたりはしないけど、窮屈で肌にぴつたり貼りついてくるようなマスクを首のところまで被せられてしまつた。

「……何ですか？ これ。のっぺらぼう？」

「これでもし仮装が消えても、貴方を湯川君だとわかる人もいないでしょ」

「まあ、そうかも知れませんが」

何かの技術を使つてゐるのか、鏡で見たのっぺらぼうにしか見えないマスク越しでも外は見えるようになつてゐる。よく見ると小さい目があるのがわかつた。

白衣ののっぺらぼうつてのは、いまひとつどういうコンセプトなのかはわからぬけれど、確かにミレーュ助教授の言う通り、こんな格好であれば、僕のことを見識できる人はいないだろう。

「さて、じやあ準備も終わつたし、そろそろ会場に行きましょ。思いつきり食べるわよつ」

「そうね。負けないわ、ニーナ」

「湯川君もせつかくだから、しつかり食べるのよ?」

「わかつてます。準備は万端です!」

徐々に肌に馴染んで、開けやすくなつた口でニーナ教授に僕は応える。

左腕に着けたゴストブレスレットのスイッチに指をかけながら、僕たちは控え室の扉を潜つた。

*

——昨日から食事制限しててよかつた……。

本当にそう思えるくらい、中央のテーブルに次々と追加される料理も、出店ブースでつくられる料理も美味しかつた。

ピラフを盛つていたお皿を平らげ、僕は満足感に息を漏らしていた。

舞台に立つてゴストの説明をしている営業さんの表情がわからないくらい広い会場内には、それだけの広さがあるのに、趣向を凝らした格好の人たちで人口密度が高い。

コスプレ百鬼夜行。

会場内の様子をひと言で表すなら、それが一番ふさわしいかも知れない。

ハロウインというより、ゴストのプロモーションをメインとしたコスプレパーティの意味合いが強い。そのためハロウインらしい怖い系の仮装は半分くらいで、あとは可愛いのとか格好いいのとか、まさにコスプレって感じの人が多かつた。

ゴストの特徴でもあり、ブレスレットを操作するだけで入力したデータの姿か、ホストに登録している姿に変身できるため、次々と姿を変更して見る人も見られる。

商品説明が優先され、このあと仮装コンテストもあるのでまだ強いお酒は出されておらず、中身がどんな人なのかわからない人が大半なのに、みんな楽しげに談笑し、和やかな雰囲気が流れていた。

そんな中で、会場の隅に置かれた丸テーブルを占有する、僕たち国立魔法科学大学の三人。

「ゴスト、すごいですね」

「そうね。こういうパーティ会場で使うなら、いろいろと楽しい使い方ができそうだね」

がつり系の食事はそこここに、僕の声に応えた二一ナ教授は、餡子と生クリームが添えられた抹茶ババロアに舌鼓を打っている。

ミレーユ助教授もプリンアラモードの器を左手に、右手のティーカップを口元に寄せ

て満足そうな笑みを浮かべている。

テーブルの上にはお寿司やミニ鰻丼といった食事系は少なく、徐々にスイーツ系の器が増えてきている。

いつもだつたら僕が取りに行かせられるんだろうけど、今日はニーナ教授もミレーユ助教授も積極的に動いて、好きなものを取つてきている。

わざわざ僕の分まで取つてきてくれる親切さは、滅多に食べられない料理のおいしさにはしゃいでいるからかも知れなかつた。

「でも、なんでこんな仮装なんですか？」

ミニ鰻丼を片手に、僕は右側に立つて二ーナ教授にそう訊いてみる。

僕の右隣に立つて二ーナ教授の仮装は、日本妖怪だ。

お寺の童子風の服は、仮装なんだから仕方がないけど、いつもの可愛らしい二ーナ教授のイメージは欠片もない。

「ひとつ目小僧、というより、Ωドールですよね、それ」

「別にいいじゃない。たまにはこんなのも」

顔に目がひとつではなく、頭部が目玉になつて二ーナ教授の仮装は、真空管がないだけで、小僧衣装のΩドールにしか見えなかつた。

ミレーユ助教授の方は、経帷子の純和風幽霊。

ただ、クセは強くてもきつちり手入れされてる長い髪で目元を隠してゐるいまの彼女は、ともすると呪いでもかけられそうな怖さがあつた。

「それはまあ、いいんですけど、僕の方はどうしてこんななんですか？」

見下ろした自分の身体。

黒い服の腰とか胸元とかが、リボンが巻きつけられたようになつてゐる露出度の高くなつてゐるそれは、たぶんサキュバスの仮装。

男でそんな格好をしてたら非難囂々だらうけど、いまの僕は金髪をなびかせる美少女だ。

サキュバスに扮したニーナ教授が、僕のコスプレだつた。

会場は低めの室温になつてゐるけど、ブレスレットとアンダーウエアのボディコンディショナーで、見た目にはけつこうな露出度なのに寒いことはない。

さらに精神波を送受信して変身するゴーストは、僕とニーナ教授の身長差をピンヒールで偽装するだけでなく、布地の感触や肌の質感、さらにはさらさらの金糸の髪の感触も、実際のものを再現してゐる。

現実で羽織つてゐる白衣から漂ううつとりしてしまう香りもあつて、僕は本当にニーナ教授になつたような、新しい扉を開いてしまいそうな感覚に浸りつつあつた。

中身が僕のようなうだつの上がらない男子であつても、精神波によつて好みの姿に変

身できるのが、ゴストの最大の特徴だ。これが普及した世界は、果たしてどんな風になつてしまふだろうか。

——服は脱げないそうだけど、後でトイレに行つたときに、胸の感触も確かめてみよう……。

ゾフィアさんへの偽装のためなのか、ニーナ教授が用意した仮装のデータを存分に味わうことを決意しつつ、僕はそろそろ溢れそうになつてているテーブルの上の料理を食べ進めていた。

「裸の王様ね」

「え？」

緑茶の湯飲みを手にしながら、ニーナ教授がぽつりとつぶやいた。

会場内を見回してゐる教授は、——たぶん目を細めているんだろう、ひとつしかない巨大な瞳を歪ませながら、会場内の人々を見つめていた。

「教授？」

「なんでもないわ」

そうは言われたけど、ニーナ教授のつぶやきの意味を聞いてみようと口を開いたとき、司会者の声が響いた。

『（）』でゴストのもうひとつの機能、ホストサイドチェンジャーをみなさんに体験して

いただきます!』

——ホストサイドエンジヤーって、あれか。

先週、営業さんが来たときに置いていった資料の内容を思い出しながら、僕は食べ終わつた饅頭の茶碗をテーブルに置いた。

いま会場に集まっているみんなは、自分で用意したデータをプレスレットに入力して変身する、クライアントサイドエンジヤーを使って仮装しているはずだ。

ホストサイドエンジヤーは、ホストシステムに予め入力しておいたデータで変身する機能だ。

前者は今回のようなコスプレパーティに向いた機能で、後者は結婚式の花嫁さんのためにとか、ひとつユニフォームを着たりとか、閉鎖的な集まりに向いた機能だ。

今回はプロモーションを兼ねているから、そうした機能も紹介したいのだろう。

『皆様にはこの後、男性はタキシードに、女性はウエディングドレス姿になつてもらいます。ダンスマミュージックも用意しておりますので、好みの相手と踊つていただければと思ひます!』

——確かにゴストは便利そうだなあ。

他のみんなと同じく、遠い演台でマイクを握っている司会の方を見ながら、僕はそ

んなことを思う。

これだけの広さと人数をカバーできるなら、例えばスポーツの試合で、選手のユニフォームはもちろん、観客の服も応援するサイドで統一させることもできるだろう。

もし営業さんの言っていた通り世界に普及するようになつたら、普段着をゴストにしてしまうのも良いかも知れない。

僕はあんまりファッショニには詳しくないし、持つてる服の数も少ないから、大学に着ていく服に悩むこともよくある。ゴストが普及すれば、そんな悩みから解放されそうだと思えた。

——でも、ウエディングドレスか。

ちらりと僕は、ひとつ目小僧に視線を飛ばす。
ニーナ教授がウエディングドレスを着たら、その美しさはいかほどのものだろうか。

実際教授が結婚式を迎える日、つてのはあんまり想像できないけれど、ウエディングドレス姿は是非見てみたかった。

目が髪で隠れてしまつてわかりづらいけど、ミレーユ助教授の口元には嬉しそうな笑みが浮かんでいる。

ひとつ目小僧のニーナ教授の表情は、その目玉からは読み取れないが、教授も女の子なのだ、ウエディングドレスは嬉しいんじゃないだろうか。

今回の企画を発案した誰かに心の中で賞賛を送りつつ、僕は司会者が指示した通り、ブレスレットのボタンに指を添えた。

『それでは一斉に、どうぞ！』

そのかけ声とともに、みんなは同時にブレスレットのボタンを押した。

「あれ？」

ひとつ目小僧から姿を変えたニーナ教授。

いつもと変わらぬ、いや、いつも以上に美しく輝く金色の髪。

でも、その服はウエディングドレスじやない。

濃紺のシャツとプリーツスカート、それから濃い緑のネクタイ。

大学でよくニーナ教授が着ている、いつもの服だつた。

何かの不具合か、変身が解けてしまつたようだつた。

——いや、そんなはずはない。

いまのニーナ教授は、僕のコートを羽織つてるはず。

変身が解けたなら焦げ茶色のコート姿になるはずなのに、違つていた。

会場内に広がつていくざわめき。

顔を上げた僕て見たものに、僕は言葉を失つた。

無数の、ニーナ・イン・シユタイン。

美しい金色の髪を持ち、可愛らしい顔立ちの女の子が、僕の視界いっぱいに広がつていた。

それはさながら花畠。

ガラス張りの天井から降り注ぐ月明かりに照らされ、金色の花を咲かせる、ニーナ・アインシュタインという花のフラワーガーデン。

見える範囲だけでも一〇〇を遙かに超える金色の花が、僕の視界に咲き乱れていた。何となく、僕はゾフィアさんの望むものを理解できるような気がしていた。

もしこの花の一輪でも、自分だけのものにできるならば、どれほど幸福感を得られるだろうか。

そんなことを思つてしまふほどに幻想的な風景が、僕の視界に広がつていた。

しかしそれはあくまで幻想。

僕自身も含めて、ゴストによつて変身した人々による、幽霊のような、残像のような、偽物の花。

本物はニーナ・アインシュタインはたつたひとり。

「これはいつたい？」

いろんなところで歎声や悲鳴が上がり始める。ざわめきが広がると同時に、混乱した人たちが入り口の方に向かつて移動し始める。

つまり、こちらの方向。

——ゾフィアさんの仕業か！

それに思い至つた僕は、とつさに本物のニーナ教授、——だと思う人を背中にかばつて立つ。混乱によつて波のように押し寄せてくる人々に巻き込まれないよう、しつかりと足を踏ん張つた。

「見つけましたよ、ニーナ」

そんなささやきを耳元で聞いて、僕は身体が動かなくなつてしまふ。

ニーナ教授を逃がさないとけないと思つてゐるのに、間近で聞こえたゾフィアさんの声に、身体が固まつてしまつていた。

——いや、違う。

恐怖や緊張で身体が動かなくなつたのではなく、何かが身体に巻きついていることを認識したとき、僕の視界は真つ暗となり、口元を強く押さえられて気が遠くなつていついた。

* 4 *

扉を閉めると、大きくなつていた人々の声は隔てられ、遠退いた。

舞台の裏にある、機材室。

今回のハロウインパーティのものだけでなく、舞台イベントでよく使われる大道具や機械類が納められたそこは、高い位置から弱い照明が照らしているだけで、薄暗い。「ふふふ。やつと手に入りましたね。——しかし、意外と重いですね。もう少し軽いと思つていましたのに」

そんなつぶやきを漏らし、扉の鍵をかけたのは、ニーナ。

彼女は小柄な身体で、意識がないらしいもうひとりのニーナを、肩に担いでいた。

パチンと指を鳴らすと、ゴストが停止し、変身が解けた。

自分と同じ体格の人物を担ぎながら機材室の奥に歩を進めているのは、ゾフィア・ランケンシュタインだつた。

彼女がたどり着いた場所は、外に続く搬入口の近く、機材が取り除かれて小さな広場になつてゐる場所。

そこの真ん中に置かれていたのは、横にして置かれた、ガラス張りの箱。停蔵棺桶。

内部の時間を停止させる装置が組み込まれた、底面の基部以外の五面はガラスで囲われ、その中には布団のように色とりどりの花が敷かれていた。上面を片手で開け、ゾフィアは肩で担いでいた人物を停蔵棺桶の中に横たえさせる。

腰近くまで伸びた金糸のような髪と、どんなものよりも可愛らしい顔。

閉じられた瞼のために海よりも深く、空よりも遠い碧い瞳が見られないのは残念だつたが、いまはそんなことは気にしていられなかつた。

湯川やミレーユがニーナの不在に気づく前に、停蔵棺桶を運び出さなければならぬ。

「けれど、やはり美しい」

乱れているニーナの髪を整えながら、ゾフィアはその顔をうつとりとした表情で見つめてしまふ。

やはりニーナは美しいまま保存されるべき人物だつた。

本人には拒絶されたが、湯川のような特定の男が、自分を差し置いて側にいることが、ゾフィアには許せなかつた。

男女の関係になるようなことはおそらくないが、何事にも間違いや偶然は起こり得る。そんなことが起ころる前に、ニーナが汚れる可能性を排除したかつたが、前回は失敗した。

それならば直接本人を、と思い、今回は成功した。

「ああ、ニーナ。貴女はもう、永遠に、このままの姿で、わたしのものですよ」
目覚めることのないニーナに、ゾフィアは嬉しそうに呼びかける。

「本当にこのタイミングでよかつた。やはりあの男からは、早く引き離すべきでしたね」ニーナの身体からは、微かに湯川の匂いが漂ついている。彼が常に側にいれば、身体や関係性だけでなく、ニーナの放つ香りをも汚されてしまうだろう。

横たえさせたニーナの、白衣の襟元をたぐり寄せ、ゾフィアは花よりも香しいその匂いを存分に吸い込む。

「ひと段落したら、身体を綺麗にして、あの男の匂いを消してあげますからね、ニーナ」「貴女に身体を弄られるのなんて、ゴメン被るけどね」

ゾフィアのつぶやきに答え、搬入口のスライドドアを開いて現れたのは、ニーナ・アインシュタイン。

「……どうして？」

驚きの表情を浮かべるゾフィアに、茶色のコートを羽織ったニーナは、蔑みの視線を向けていた。

*

「わたしは確かに、貴女を捕まえて……」

停蔵棺桶の中に横たわったニーナと、搬入口に立つニーナを交互に見るゾフィアは、

驚きに目を見開いていた。

その様子を呆れを浮かべた瞳で見つめるニーナは、小さくため息を吐いた。
「どうせ貴女のことだから、何か仕掛けてくるとは思っていたからね。いろいろと対策を立てさせてもらつたわ」

怒りなのか、顔を赤く染めるゾフィア。

「いつたい、どんな対策を立てていたというのです！」

「ブレスレット自体を弄ると貴女にバレるみたいだつたから、精神干渉自体をキヤンセルしてたの。ゴーストのシステムからは正常に精神波の送受信が行われているよう偽装してね」

言つてニーナは、頭に着けていた真空管つきのヘアバンドを外した。

「それからね——」

停蔵棺桶に近づきいたニーナは、横たわっているニーナの首のつけ根に手を伸ばす。
爪を立ててはがしたDNAコスプレマスクの下から現れたのは、意識なく目をつむる湯川の顔。

「姿の方も偽装してたの。身長も靴で調節してたし。ちゃんと驚いてくれたみたいで良かったわ」

「それだけでは、ありませんよね？」

「ええ、もちろん」

ゾフィアの問い合わせに答えながら、ニーナは湯川の身体に手を伸ばし、苦労しながら停蔵棺桶の中から引っ張り出す。

「貴女のことだから、ゴーストは使つてゐるだらうと思つたのよね。外見以外で私と他の人を、あの人でごつた返してゐる会場で判別する方法、それはたぶん——匂い」

支えきれずに湯川の身体を床に転がしたニーナは、顔を真っ赤にして身体を細かに震わせて、ゾフィアを睨みつける。

「他にもまあ、ミレーユに頼んで私と湯川君に発信器仕込んでおいたり、もう少し大きな騒ぎになるような仕掛けもあつたんだけどね。上手いこと湯川君と私を間違えてくれて良かつたわ」

先日空間ポケットと湯川を引き離すのに使つた、音速を超えて蔓が生長する爆植卵に、遠隔スイッチで割れるよう装置を取りつけたものをコートのポケットから取り出して見せながら、ニーナは言つた。

「わたしは……、わたしは……」

下ろした両手を強く握りしめ、深くうつむいたゾフィアは声と身体を震わせる。

「わたしはただ、貴女を愛していただけ！　ただ貴女を愛し、愛されたいがために——」

「嘘よ。貴女のそれは愛なんかじゃない」

ゾフィアの叫びを静かな声で止め、顎を反らして彼女を見下す。

「貴女が愛していたのは、私の顔や身体、外見だけ。ゴストに使つてゐるイマジュネーションコンバータも、おおかた貴女が私に成り代わるために造つたものでしょ。それに、その姿は何人目？　本当の貴女は、一体何者？　ねえ、フランケンシュタインの怪物！」

歯を見せて奥歯を噛みしめ、ゾフィアは沈黙した。

「私に近づいて取り入るために努力もしていたし、貴女には才能があつたのはわかつてゐる。そこの部分は純粹に、私は貴方を評価してゐる。でもね——」

目を細め、ゾフィアを見下すニーナは、言つた。

「私、貴女こと、嫌いなの」

瞬間、ゾフィアの表情は凍りついた。

大きく目を見開いて、色を失つた瞳でニーナのことを見つめている。

徐々に色を取り戻したゾフィアの瞳に真っ先に浮かんだのは、怒り。

「ニイイイイナアアアアアーネツ！」

全身を、近くにあるすべてを震わせるような低い声でニーナのことを呼び、彼女を捕まえようと両手を上げたゾフィア。

いままさに飛びかかるとしたとき——。

「そこまでね」

つんのめるようにして、後ろから引っ張られたゾフィアはニーナに近づくことができなかつた。

声とともに彼女の背後に現れたのは、ミレーユ。
ゾフィアの両手首に手錠をかけたミレーユは、驚く彼女が我に返る前に腰をつかんで身体を持ち上げる。

「待つて！ 待つて、ニーナ!!」

ミレーユによつて停蔵棺桶の中に投げ込まれ、ガラスの蓋を閉じられたゾフィアは叫ぶ。

「わたしを、どうするつもりなのですか?!」

「このまま眠ついてもらうことにするわ。大丈夫よ、永遠に閉じ込めておくつもりはないから」

「そんなの！ そんなのイヤです!! ニーナ！ こんなことをして、タダで済むと思つているのですか?!」

「それは問題ないわ。貴女は自ら進んで、停蔵棺桶の長期間被検体になつた、ということを処理しておくから。嘘を吐くことになるけれど、わたしが生きている間は、この中にいてもらいう

ゾフィアは上手く身動きのできない停蔵棺桶の中から脱出しようとするが、ニーナと

ミレーユが蓋を押さえて、出てくることができない。

「さようなら、ゾフィア・フランケンシュタイン。永遠に」

碧い静かな瞳で見つめるニーナ。

表情を絶望に染め、嘆きの色を瞳に浮かべるゾフィア。

そうして、ニーナは停蔵棺桶の下部の、運転開始ボタンに手を伸ばす。

「ニイ——」

ガラスの蓋に顔を押しつけていたゾフィアが、羽毛よりも遅い速度で、ゆっくりと敷き詰められた花に落ちて行く。

スローモーションのように、ゆっくりと、ゆっくりと花の上でバウンドし、そして完全に停止した。

「才能だけなら、私は貴方のことを認めていたのだけれどね」

花の布団にに身体を沈み込まることなく、絶望の表情とともに停止したゾフィアを

見つめながら、ニーナはそうつぶやいていた。

* 5 *

「ええつとつまり、ニーナ教授は僕を身代わりにしたつてことですか？」

ハロウインパーティの翌日、実験室を訪れた僕は、先に来ていたニーナ教授に詳しい事情を聞いていた。

パーティに出かける前にも掃除していくたというのに、早速荒れ果てる兆候が見え始めている実験室。

定位置であるオフィスチエアに座っているニーナ教授は、不機嫌そうな顔を僕に見せ、彼女の回りにはいつも以上に高級そうなチョコだとか、クッキーだとかの箱が散乱させていた。

——何があつたんだろう。

何故かはわからぬけど、ニーナ教授は朝からやけ食いをしていたらしいことはわかつた。

「別にそうなるとわかつてたわけじゃないのよ」

「でも、可能性のひとつだつたんですよね」

「それは……、そななんだけね」

ばつが悪そうに目を逸らすニーナ教授に、僕はため息を吐いていた。

ニーナ教授がハロウインパーティに参加したのは、ゾフィアさんが仕掛けてくると確信しているからだつた。

どんな風に仕掛けてくるかはわからなかつたから、いろんな準備をしていたという。

そのひとつであつた僕を身代わりにするという方法にゾフィアさんがはまり、彼女を捕らえることができたということだつた。

でもそれは、結果に過ぎない。

前回に続き今回も、僕は危険な目に遭うことになつたのだから。

——そりやあ、ゾフィアさんはいつか対決しないといけなかつたんだろうけどさ。どれくらい前からかはわからぬんだけど、ゾフィアさんはずつとニーナ教授のことを狙つていた。

彼女をどうにかしなければ、平穩な時間は訪れない。

平穩にならなければ、僕もまた今回や前回のように、ゾフィアさんに狙われるこつなつていただろう。

——そういう意味では良かったのかも知れないけど。

昨日帰る前、目を覚ました僕が受けた説明では、ゾフィアさんは停蔵棺桶に入れ、大学内で保管することになつたそうだ。期間はニーナ教授が大学を離れ完全に縁が切れるまでか、亡くなるまで。

事実上、ゾフィアさんはもう二度とニーナ教授に会うことができなくなつた。

これでもう、ゾフィアさんによつて平穏が乱されることはなくなつた。

だから僕は、今回のことは水に流すことにする。

小さく息を吐いて、気分を入れ換えた。

「話は変わりますが、ニーナ教授に色々と手紙が届いています」

下で受け取つて、実験室に来るまでにある程度仕分けておいた手紙を机の上に置いた。

一〇通を軽く超える封書は、どれも企業関係からのものだ。

ただし、これまでつき合いのあつたところではなく、新規のところからのもの。

「そつちも多いわね……」

「やつぱり、電話も来てますか……」

顔を見合わせて、僕はニーナ教授と一緒に深いため息を吐いた。

昨日の事件、というよりハロウインパーティは、ニュース番組で中継が行われていた。その中継の途中に起こつたのが、あの一斉ニーナ教授化事故。

元からニーナ教授は天才として、若くして国立魔法科学大学の教授に、学長になつたことで有名だつたけれど、テレビで流れたことで、さらに名を馳せることになつてしまつた。

畑に咲くたくさんの花のように、画面に溢れるニーナ教授の姿は、その招待がハロウインの幽霊であつても、かなりのインパクトを視聴者に与えたようだ。

届いた手紙のいくつは、テレビ局からのものだつたり、芸能事務所からのCM出演依

頬などだつた。

加えて、昨日あんな事件があつたというのに、いや逆にあれだけの事件があつたために、ゴストは一躍有名となり、あの会社からはイメージキャラクターとしての出演依頼が届いていた。

「騒ぎがひと段落するまで、平穏な時間は訪れなさそうですね……」

「そうね……」

大学の学長というだけでも仕事はいくらでもあるというのに、研究が大好きで、他にも好きなこととかを精力的にこなしているニーナ教授。

それらに加えて芸能活動なんて、している時間はたぶんない。

でも一度有名になつてしまつたら、世間の熱がある程度冷めるまでは、騒がしい日々が続くことになるだろう。

「でもほら、ゾフィアさんのことは片づいたんですし、そつちの方は平穏になるじゃないですか」

慰めにもならないかも知れないけど、僕はできるだけ明るい声で言う。

——あれ？

僕の言葉に、ニーナ教授はむしろ暗い顔になり、箱に残っていたクッキーを一度に三つも頬張つた。

嫌な予感がして、僕は問う。

「どうか、したんですか？」

「ええ、どうかしたのよ」

もう冷めてるだろう紅茶を一気に飲み干し、口の中のクッキーを流し込んだニーナ教授。

やさぐれたように猫背になつて腕を机に預ける彼女は、言つた。

「あの子、やり込められることを想定していたのよ」

「え？ どういうことですか？」

何を言つてゐのかわからなくて、僕は首を傾げてしまう。

ゾフィアさんは停蔵棺桶の中だ。

ニーナ教授の言う「あの子」を示す人物のことが、思いつけない。

いや、考えたくない。

「自分が停蔵棺桶に押し込められることを想定していたのよ！ 夜のうちにあれは大学内に運び込んだけど、タイマーが仕込んであつて、一定時間で機能が一時的に停止するようになつてたのっ」

「えつと、それはどういう？」

目に涙を溜めながら、僕のことを睨むように見つめてくるニーナ教授。

「だから、朝になつたらあの子、停蔵棺桶から逃げ出して、行方不明!!」

「……冗談はよしてください」

「冗談じやないのよ！　あの子の方が私より一枚上手だつたの!!」

目尻の涙を光らせ、悔しそうに歯を噛みしめている二一ナ教授。はつきりと言われたその言葉に、僕は目の前が暗くなつてくるような錯覚を覚えていた。

「じゃあまた、ゾフィアさんが僕たちの前に現れる可能性がある、つてことですか？」

思わず僕は、その場にへたり込んでしまつっていた。

顔を上げると、疲れ切つた二一ナ教授の顔が見えた。

僕もまた、一気に疲れを感じて、その顔を見つめ返す。

ふたり同時に漏らしたため息からは、まるで魂が抜けていくような気がしていた。

「百花靈乱」　了

第五話「清廉欠白」

清廉欠白

* 1 *

「決して、良い結果にはならないと思うんだけど……」

「そんなことないわ、ニーナ」

実験室の椅子に座り、身体ごと振り向くようにして、鬱屈した曇天に似た表情を見せているのは、ニーナ・AINISHUTAIN。

密かなレースがあしらわれた濃紺のワンピースに、薄手のジャケットをあわせ、金糸のような細く艶やかな髪を背に流すニーナは、誰もが美しいと評価するだろう外見にして、その眉根には深いシワが刻まれ、不機嫌さを露わにしていた。

そんなニーナと向かい合っているのは、ひとりの女性。
まるで咲き誇る大輪の花。

落ち着いた深い赤色のジャンパースカートと純白のブラウスに身を包む二十代半ばと思われるその女性は、本当に幸せそうな、晴れやかな笑顔を浮かべている。

若干一六歳にして国立魔法科学大学の教授にして学長を務め、研究者としての成果でも注目されているニーナは、女性的な魅力でも人気を集めている。

しかしながら、いま彼女の前に立つ女性は、花の化身、妖精だと言われても納得してしまいそうなほどの、別の世界の存在であるかのような魅力を放っていた。

「今度の人は大丈夫ですよ、ニーナ。誠実で、真面目で、ワタシだけを見てくれる人なの」しつとりとした長い黒髪を揺らし、女性はうつとりとした表情で両手を大きな胸の前で合わせ、最愛の人のことを語る。

「それに、この実験に適した人は、ワタシ以外にはすぐには見つけられないでしよう？」言つて女性は、腕に下げたポーチからそれを取り出した。

五つの球根。

女性の両手に乗せられたそれに手を伸ばすことなく、ニーナは球根をじつと見つめる。

「それは……、そうでしようけどね」

「大丈夫よ。ワタシとあの人との約束が破られることなんて、絶対にないわ。あの人こそ、ワタシの運命の人なのだから」

少しゆつくりした口調で、女性は輝かんばかりの容姿よりも眩しい笑顔を浮かべ、話す。

可憐で、どこか世間離れしている雰囲気を放っている女性に、ニーナの表情が晴れることはなかつた。

*

「持つてきましたよ、ニーナ教授……」

言いながら実験室の扉を開け、押してきた台車に注意を向けながら室内に入った僕は、顔を上げた。

二輪の花。

いや、花を思わせるふたりの女性がいた。

ひとりは言わずと知れたこの実験室の主、ニーナ・AINシュタイン。

金糸のような細く長い髪のニーナ教授は、まるで黄色く咲く百合。

それに対して、教授の前に立つて僕に微笑みを投げかけてくれている女性は、大輪のバラのよう。

見慣れたと言つても、やつぱりニーナ教授に見惚れてしまうことは多い。魔法町には

美しいもの、可愛らしいものが様々にあるけれど、ニーナ教授はどこか別格の可愛らしさと美しさを持ち合わせる女性だ。

けれどもうひとりの女性は、それとは別次元の、純粹な美しさを凝縮した存在のように思えた。

正直なところ、女の子とか恋愛とかよりも、研究してゐる方が好きな僕だけど、それでも目の前に現れた美しさに身動きができなくなつていた。

「見とれるのもいいけど、持つてきた機材を机に上げてくれる？ これから使うものだから」

「あつ、はい！」

ニーナ教授の冷氣を含んだ声に我に返り、僕は女性に軽く頭を下げて場所を空けてもらつて、台車を実験テーブルに近づけた。

魔法によつて反重力を生み出して空を飛ぶホウキと同じ、魔法を使つた小型クレーンのような昇降機でゆつくりと持ち上げてゐるのは、分厚いガラスで造られた直方体型の実験器具。

僕の身長の半分くらいの横幅と、その半分強の高さのあるその中は、三割くらい土で満たされている。

さしづめガラス製の密閉プランターといった様相のそれは、底面と背面の部分は金属

製で、たぶん温度や空気を調整する機械が仕込まれている。

今日の朝、この国立魔法科学大学に登校する前にニーナ教授から連絡を受けて、生物科のミレーユ助教授のところに取りに行つたこの密閉プランターは、今度の実験で使うらしい。

かなりの重量があつて、ひとりで運ぶにはかなり苦労したから文句のひとつでも言おうと思つたけど、バラのような女性の笑みに、僕は何も言えなくなる。
いや、来客中に小言なんて言つてられないわけだけど。

「この子が、ニーナの彼氏？」

「え?!」

「そんなわけないでしょ。助手よ、助手。大学老院生の湯川君」

女性に彼氏なんて言われて驚いてしまうが、ニーナ教授は取り合う様子もなく僕のことをそう紹介する。

けれどめげる様子のない女性は、含み笑いを漏らし、いたずらな色を瞳に浮かべていた。

「そうなの？ もし結婚式を挙げることがあるなら、サービスするわよ？」

「その予定もその相手もないから。で、この人はタレイア。魔法町で花屋を営んでる人」

「初めまして、湯川さん。本当にニーナの彼氏じゃないの？」

「違います。……初めてまして」

即答で答えた僕は、紹介してもらつたタレイアさんの伸ばす右手に、緊張しながら自分の右手を伸ばして、その温かい手と握手を交わした。

まだ疑つてゐるらしいタレイアさんの視線に、僕がニーナ教授に助けを求める視線を向けると、呆れたようにため息を吐かれるだけだつた。

「今日はタレイアに珍しい実験資材を持つてきてもらつたの。差し込みになるけど、早速今日から実験を開始するから」

そう言つたニーナ教授が視線を向けたパソコンデスクには、五つの球根が一直線に並べて置かれていた。

——手紙？

間隔を離されて置かれた球根には、ひとつにつき一通、封書が添えられている。

ただの封筒ではなく、封蝋により厳重に封印されたそれに、僕は眉を顰めていた。
デジタル封蝋。

封をする際に絶対時間による封印時間と、念波から個人判別情報を記録し、開封するときにも同じ情報を記録できるようになつてゐるデジタル封蝋は、滅多に使われることのないデバイスだ。

差出人本人と、受取人本人の間で取り交わされるかなり重要な親書であるとか、時間

記録を取つて情報封鎖が必要なほど、厳密な実験くらいにしか使うことがないものだつた。

そんなものが必要なくらい、きつちりとした記録が必要な実験をこれから行うということだろう。

——でも、球根とどう関係するんだろう？

球根と密閉プランターの関係はそのままだからわかるけど、一から五番までの番号が大きく書かれたそれぞれの封筒の意味はよくわからない。

内容を詳しく聞いてみようと思つたけど、鋭い視線を向けてくる二ーナ教授の様子に、僕はとりあえずこの場では問わないことにする。

「二ーナにもやつと彼氏ができたと思つたのに、残念ね……」

「余計なお世話よ」

「……僕なんて、釣り合わないですし」

頬を膨らませてゐるのに少しも美しさが損なわれないタレイアさんの言葉に、二ーナ教授は肩を竦め、たまに知り合いからそんなことを言われることがあるので慣れてる僕は、明後日の方向に顔を向ける。

「ああ、そうだ。ワタシの方はね、春には結婚するのよ」

ニコニコとした笑みになつたタレイアさん。

本当に幸せそうな空気を身体の内から漂わせる彼女に、いまさつき会つたばかりなのに、僕はちょっと嫉妬しそうになる。

「ほら、この人なの。ワタシの婚約者の、園部幸夫さん」

そう言つたタレイアさんは、腕にかけた鞄から二つ折りの大柄なパスケースを開いて、写真を見せてくれる。

——あれ？

写真目線ではない、少し斜めに立つてているスースイ姿の男性を見て、僕は心の中で首を傾げていた。

誠実そうで、真面目そうな感じのする、たぶんタレイアさんより少し年上の、二十代後半だと思われる男性、園部幸夫さん。自覚のある実験莫迦である僕なんかより何割もいい男なのは写真だけでもわかるし、雰囲気からして裕福そうなのも見て取れる。

でも魔法町在住の女性たちの中でも、おそらく上位に位置している美しさだろううタレイアさんに釣り合うか、と言うと、凡庸とも思える普通の男性だった。

——まあ、相手を選ぶ基準は顔だけじゃないからな。

本当に幸せそうで、嬉しそうな笑みを浮かべてるタレイアさんは、心から園部さんを愛してるのが彼女の様子を見るだけでもわかる。

絶世の美女が惚れるほどの理由が、写真からではわからない何かあるんだろう。

「でも、年が明けるまでは会うことができないの……」

途端に花が萎れたように、悲しげな顔になるタレイアさん。

そんな顔を見ていると、僕まで悲しくなってしまう。

「それは……、寂しいですね」

「ええ。とても寂しいわ。けれど大丈夫。あの人はとても誠実で、ワタシだけを愛してくれる人なの。だから誰かに言い寄られたりしても、ワタシ以外によそ見することなんてないから」

とても信頼してゐるんだろう、笑みを取り戻したタレイアさんに、僕も笑みが零れてしまう。

誰かに言い寄られるなら、その婚約者さんよりもタレイアさんの方なんじやないかとか思つたりはするけど、彼女は彼女で浮気するような人じやないのは、その言葉と信頼しきつた表情を見ていればわかる。

「それにね、あの人とは約束をしているから——

「タレイア。それ以上は実験に支障を来すから」

「ああ、そうね。そうなのね」

うつとりと、夢見る少女のような表情で語り始めたタレイアさんを止めたのは、二一

ナ教授。

力強く頷いたタレイアさんは、意に介した風もなく微笑みを浮かべている。

「大丈夫よ、ニーナ。実験は必ず成功するわ」

「……そう祈つてるわ。それと、これを外さずにつけておいてね」

そう言つてニーナ教授が差し出したのは、真空管がはめ込まれた腕環。つい先日騒動に巻き込まれた、ARコスプレグッズの「ゴスト」に似ているシンプルな腕環を、ニーナ教授はサイズを調整し、差し出されたタレイアさんの腕にはめ込む。取り外しボタンとか見えないから脱着できず、けつこうぴつたりサイズの腕環をしげしげと眺めているタレイアさん。

彼女は資材を持つてきてくれただけでなく、たぶん実験の被験者なんだろう。ちらりと見てみたニーナ教授と目が合う。

何も言つてくれない教授は、言葉以上に目で言いたいことを語つていた。

「簡単に外せるようにはなつていなければ、その腕環は絶対に外さないでね」

「ええ、わかりました。では実験結果を楽しみにしていてね、ニーナ。それじゃあ湯川さんも、頑張つて」

ニコニコと笑うタレイアさんは、何を頑張ればいいのかわからないけど、僕に応援の言葉を残して実験室から出ていった。

* 2 *

「……本当に生えてる」

実験室の扉を開けた僕は、真っ先にその言葉をつぶやいていた。

昨日、あの後タレイアさんが持つてきてくれたという五個の球根を、密閉プランターに植えた。

手袋越しでも直接触れちゃいけないと言われて、どうやら特別製らしい小型シャベルを使い、拳よりもふた回りほど小さな球根を半分くらい見えるよう植える作業は、ニーナ教授が手伝つてくれなかつたから意外と面倒臭かつた。

朝には根を張つて茎を伸ばし、蕾をつけると言われてたけど、実際そくなつた。

いま、実験室の密閉プランターの中では、等間隔に植えられた、右から一番から五番までの球根から真っ直ぐに茎が伸び、その先端は小さな蕾ができている。

「言つた通りでしょ」

「ええ。でもさすがに、こんなに早いとは……」

「これくらいの勢いで伸びる草は、けつこうあるものよ」

僕よりも早くに来ていたニーナ教授が、たぶん実験機材だと思われるものを準備しながらそう言つた。

「とりあえずこれをそれぞれの茎と、蕾のつけ根につけて、こここの外部端子に接続して頂戴。それとそれぞれのレコーダをセットして」

「あ、はい。わかりました」

言われて僕は、プランターの上部蓋を開け、クリップ状のセンサーを茎が傷つかないように慎重に取りつけた。ついでに中に設置されてる受け口にセンサーの端子を接続する。

さらに音波や振動のレベルを記録するのに使う、ロール紙に受信した信号の強度を描くレベルレコーダを球根一個につき一台設置し、プランターの外部端子からケーブルを伸ばして接続した。

蓋を閉めてロックすると、ガラスだから中は見えるけど、空調も温度も、土の湿度管理もできる密閉式プランターの内部は、完全な密室となる。

たぶんだけど、可視光線は通しても、それ以外の電波や、魔法なんかも通さない素材でできてるんだと思う。

「これって、何なんですか？」

平常の植物の生体活性、どう小さな振れ幅を記録しているレベルレコーダが、紙と同時にデジタルデータでも記録できるかを確認しつつ、プランターを睨んでいるような表情の二ーナ教授に訊いてみる。

ここまで見る限り、どう考へても二ーナ教授が専攻し、僕が助手を務める精神物理学分野の実験じやない。植物の研究ならこのプランターを貸してくれたミレーユ助教授が専攻する生物学の分野だ。

それでも二ーナ教授が行い、そしてタレイアさんが被験者になつてゐることは、たぶん精神物理学の実験なんだ。

「あの人気が持つてきたのはね、宇宙シャガの球根よ」

「宇宙シャガ?」

生物分野にはあまり造詣が深くない僕には、初めて聞く植物の名前だつた。

遠隔で精神波を介してリンクしている、僕のアパートの部屋に設置した脳N A S内のライブラリを検索してみても、該当する項目が見つからない。

ネットワーク経由で大学図書館のデジタルライブラリを検索してみると見つかったが、たいした情報は得られなかつた。

地球外の発見された植物で、和名は宇宙シャガ、絶滅が危惧される植物であることと、花の写真程度。植生などの詳しい情報はなく、本当に名前くらいしか情報がなかつた。土に触つたので手を洗い、お湯を沸かして紅茶の準備をする間、流しに置かれたカツプを濯ぎながら、僕は続けて訊いてみる。

「その宇宙シャガが、精神物理学の実験に関係あるんですか?」

「それはもちろん。だからこそ実験するんじゃない」

ニーナ教授の目が、キランツと音を立てた気がした。

沸かしたお湯を茶葉を入れたティポットに注ぎ、葉が開くのを待つ間にニーナ教授が話してくれる。

「宇宙シヤガはね、精神物理学の最大命題解明の鍵になるかもしない実験対象なのよ」椅子に座つて僕の方に振り返り、短いスカートじやちよつと危険なほど高く脚を組んだニーナ教授は、嬉しそうな、でもちよつと自分の世界に入り込んでいる笑みを浮かべる。

まだまだわからないことの多い精神物理学は、命題と呼ばれている課題が数多くある。

でも最大命題と言われると、その中のどれなのかパツとは思いつかない。

スカートから覗く眩しすぎる太股よりもさらに輝かしい笑みを浮かべ、ニーナ教授は僕の瞳を見つめてきていた。

「最大命題、ですか」

「ええ。湯川君は念波が主にふたつに分類されるのは知ってるわよね？」

「それはもちろん。念力と精神波ですよね？」

精神物理学で主に研究対象となるのは、念力と精神波だ。

念力は正確には念動波と呼ばれ、主に生物の脳から放射される波動だ。

魔法と言う形で科学的に扱い、ホウキに内蔵された增幅回路を使って強化し、反重力を発生させて空を飛んだり、機械的な装置で発生させて反重力町のように空飛ぶ町を建造したりと、いま現在の世の中では必須のものとなっている。

利用している割にわかっていないことも多く、何故生物からは念動波が積極的に発せられるかとかは、いまでも研究が続けられ、解明しようと多くの人が取り組んでいる。もうひとつ的精神波は主に通信などに使われている。念動波と同じく人間の脳から発せられていて、でも念動波と違った物理的な現象への干渉力は弱い。

けれど音波に近い性質を持ち、音波に準じた扱い方で利用できたり、デジタルデータに変換できたりする。脳から発せられるだけでなく脳への入力にも使えるため、通信に利用したり、バーチャルなゲームで使われたりと、応用範囲がかなり広い。

個人個人でユニークな波紋のある精神波はセキュリティに使われたりもするけど、同時に人間の精神そのものに影響があるため、それを応用した技術は毒にも薬にもなる。悪質なウイルスに感染して、最悪の場合別人にされてしまう、なんてこともありまする。

二一ナ教授は精神物理学を中心に、かなり広い範囲の研究を行つてゐるため、念動波とか精神波とか特定分野に特化した研究だけをしてゐるわけではない。そんな広い範囲

で多くの成果を残していることが、教授の凄いところだつたりした。

精神物理学の基礎とも言える研究対象を述べた僕は、にんまりとした笑みを浮かべてニーナ教授の青く澄んだ瞳を見つめた。

けれど、返ってきたのは呆れを含んだため息だつた。

「その答えじや落第よ、湯川君。確かにこここの大学生までだつたらそれでもいいけれど、大学老院生で、私の助手の貴方がそんな答えじや困るんだけど？」

「え……」

そんな風に言われて、僕は顎に指を添えて眉を顰める。

僕がこれまで魔法科学大学で勉強と、研究をしてきた内容から考えれば、念動波と精神波で間違いがないはずだ。でも、ニーナ教授は落第だと言う。

それ以外のもので、そして精神物理学の最大命題だとされるもの。
深く、深く考えて、やつと僕は思い着く。

——あつ！

「念動波と……、それから念信波、ですか？」

念信波は、精神物理学でも研究対象にしている人が少ない分野。

それは何より、観測が困難であるから。

現実に干渉する念動波や、音波に近い性質を持つ精神波と異なり、念信波はほとんど

現実に干渉しない波動であることがわかつてゐる。

精神波は念信波が脳から放射される際の副次的な波動であるらしいということがわかつてきたりするが、宇宙的にはかなり昔から存在が予言され、間接的には観測もされているのに、ほとんど研究が進んでいない。

宇宙物理学になぞらえるならニユートリノのような、物質に対してほとんど干渉しないことがわかつてゐる素粒子に近い意味合いを持つ。しかしそれよりもさらに現実への干渉をしない念信波は、研究すること自体が困難であるため、この魔法科学大学でも研究しているゼミはふたつしかないし、成果が上がつたという話も聞いたことがない。

念動波をテレキネシス、念信波をテレパシーと呼ぶこともあり、遠隔地との情報交換や思考のやりとりが可能とされてる念信波だけど、自発的に扱えるという人は確認されていなかつた。魔法使いと呼ばれる人々は強い念信波を発するという話もあるけど、それも噂程度だつた。

「その通りよ。この実験はね、念信波に関する研究なの」

険しい表情だつた二ーナ教授はニッコリと笑み、そう言つてくれる。

「……でも、この宇宙シャガはどうして念信波の実験になるんです？」

「念信波は脳を持つ知的生命体同士でやりとりができることは知られてる。でも念動波と違つて、念信波は植物からも放射されている可能性が示唆されてるの。この宇宙シャ

ガは、念信波を受信して特別な振る舞いを見せるとき」とされているのよ」

「そんな植物があるんですか?」

観測が困難であるため研究者の中では軽視されがちだけど、確かに念信波は精神物理学の最大命題と言える波動だ。

何しろ性質が不明のため、念信波はいろいろな可能性が示唆され、様々な説が唱えられている。精神波も通信技術の向上により光の速度を超える方法が発見されて超遠方へのリアルタイム通信が可能になつていて、念信波は空間だけでなく時間すらも飛び越えるなんて説まであるほどだ。

本当に宇宙シャガが念信波を受信して何らかの振る舞いを見せるのだとしたら、それはこの実験室で宇宙的な発見があるかも知れなかつた。

「それは本当に凄いですね……」

僕もひとりの研究者。

しがない学生で、教授でもなくただの助手でしかないけど、さすがにそんな実験に立ち会えるなんて興奮してしまつていた。

拳を握り締めて、さつきからほとんど変化のないレベルレコーダに見入つてしまう。「それでこの実験の被験者が、タレイアさんなんですよね? どういう内容の実験なんですか?」

「それは……」

言葉を濁らせたニーナ教授の方を見てみると、表情を曇らせていた。

それは昨日タレイアさんがいたときには見せていた、複雑な表情だつた。

「実験の内容についてはいまはまだ明かせないわ。昨日も言つた通り、余計な情報は実験の失敗を招きかねないのよ」

「僕にも、教えられないんですか？」

「ええ、そうよ。貴方は宇宙シャガと記録に大きな変化があつたら、それを報告してくれればそれでいいから」

「……わかりました」

何となく厭然としないものの、実験に支障が出ると言われたら仕方がない。

いつになく眉根のシワを深く刻んでいるニーナ教授の、悲しそうな青い瞳に、僕はそれ以上訊くことを諦めるしかなかつた。

「実験期間はどれくらいになるんですか？」

「そうね。長くても来年の一月には最終結果が出ているはずよ」

「最短だと？」

とくに意味があつたわけではなく、そう訊いてみると、ニーナ教授はこれまでで一番

大きく顔を歪め、少し震える声で言つた。

「早ければ、一週間で結果が出るかも知れないわね」

*

請求先の指定を済ませた僕は、受付担当の看護師さんに挨拶を済ませてその場を離れた。

国立魔法科学大学付属の病院は、そろそろ夕方になろうという時間だというのに、ロビーに並んだソファには隙間がないほど人がいた。

午前と午後の診療の他に、主に夜行性の人向けに夜間診療もやっているここは、深夜の時間帯に入るまで人が引けることはない。

地球人類はもちろん、宇宙人と言わず、真空管ドールと言わず、ロボットの診療まで請け負う大学付属病院の、朝の大学正門前より様々な人が集まつて広いロビーを抜け、僕は巨人でも通れそうな正面入り口の自動ドアを潜つた。

「でも、それも今日で終わりか」

僕が病院に通つていたのは、経過観察のため。

つい先月には時間凍結保存されかけ、さらにその前の月には空間ポケットの爆発に巻き込まれて大怪我を負つた。

原因は主にゾフィアさんなわけだけど、そのとき負った怪我は完治はしている。ただ、念のため経過観察を入念に行うつてことで、ニーナ教授が一部は自費まで使って病院に通わせてくれていた。

それももう大丈夫つてことで、病院に通うのは今日で最後。

明日にはそのことの報告と、お礼をニーナ教授に述べるつもりだつた。

——それとも、まだ実験室にいるなら今日の内に報告しておくべきかな？
そろそろ遅い時間なので、どうするか迷つてしまつたときだつた。

「ん？ あれ？」

ホウキの後ろに客席をくくりつけた反重力人力車が待つタクシー乗り場を横目に、ひつきりなしにホウキなどで人が降りてきたり飛んでいつたりしている病院前の発着スペースで、前のダブルサイクロンホウキにまたがろうとしたとき、気がついた。

まるで恋人同士であるかのように、一本のホウキに身体を密着させて降りてきた男女。

どこか緊張しているような硬さも感じるが、仲よさそうに微笑みを浮かべながら僕とすれ違つていつたふたりのうち、男性の方に見覚えがある気がした。

発着場の縁に立つたまま、僕は記憶を掘り返す。

——あ！

思い出した僕は、病院の自動ドアを抜けていくふたりに振り返つた。
僕のことなんて気にもしていない男性には、確かに見覚えがあつた。

でも、面識があるわけじゃない。

知り合いでもなければ話したことがあるわけでもその男性は、園部幸夫。

タレイアさんが昨日、婚約者だと言つて写真を見せてくれたその人だ。

——隣の女性はいつたい誰だ？

来た道を戻つて、病院の中には入らず園部さんの隣に立つてる女性のことをじっくりと見る。

スズランのような人だつた。

タレイアさんが大輪のバラだとするなら、園部さんの隣に立ち、微笑みながら歩いている女性は、肌が白く、儂げで、ともすると夜露とともに消えてしまいそうな雰囲気をした、まるでスズランの花のような女性。

誰からも注目されるだろうタレイアさんの華やかな美しさと違つて、どこか園部さんと似た、ひつそりとした魅力を漂わせ、美少女の雰囲気を持つ、たぶん二十代そこそこだろうその女性は、予約でもしてあるのか迷うことなく受付のひとつに向かつていく。
——あそこは……。

総合病院である大学付属病院は、受付ごとに科が違う。

園部さんとスズランの女性が向かつた受付は、確か婦人科だ。

——どういう関係なんだ？　あのふたりは。

病院に行くから緊張してる様子はあるけど、微笑み合つていて、打ち解けた感じがあつた園部さんと女性。その距離の近さは、ただの友人とは思えないほどに見えた。

——僕に、何ができる？

二ーナ教授は、昨日タレイアさんとあんまり話さないように言つていた。実験に支障が出る可能性があると言うなら、それに従うしかない。

でもあんなに幸せそうにしていたタレイアさんが、婚約者ことでトラブルを抱えることになるのも問題なように思えた。

選択肢はふたつ。

見なかつたことにして、この場を後のこと。

タレイアさんに報告をして、警告すること。

一度少し話しただけとは言え、知り合いになつたのだから、婚約者が浮気しているかも知れないことを知らせるべきなように思える。

でも二ーナ教授に止められていることを考へると、軽々しくそんなことはできない。

——とりあえず様子を見よう。

園部さんの隣にいるのが浮気相手だと限らない。

そう無理矢理自分を納得させた僕は、自動ドア前を離れて家に帰ろうとする。

「済みませんっ」

「あつ、いえ！ こちらこそっ」

振り返った途端、ちょうどやつてきた人とぶつかってしまった。

そろそろ夕方になると寒いからだろう、厚手のコートについたフードを目深に被つて

いる、その涼やかな声からすると女性と思われる人物と謝り合う。
急いでいるのか、女性はそれ以上何も言わずに、自動ドアの向こうに小走りに入つて
いった。

「とりあえず、帰ろう」

園部さんのことは気になるけど、浮気だという確証もなければ、タレイアさんとあんまり話しかやいけない僕にはできることなんてない。

発着場の端までのろのろと歩いていった僕は、ダブルサイクロンハウキにまたがつて、ふわりと空に飛び上がった。

*

鍵を解除して実験室の扉を開ける。

いつもよりけつこう早い時間だから、実験室にはまだ二ーナ教授は来ていなかつた。昨日家に帰つて、食事をして近くの銭湯に行つた後、悶々とした頭を抱えながら眠つた。

眠りにつくまでずいぶんかかつたのに、朝も早く目覚めてしまつて、二度寝もできそうになかつたのでいつもより早く実験室に来ていた。

部屋の灯りを点け、密閉プランターを見てみる。

「あ！」

昨日実験室を出るときまではなかつた変化に、ひと目で気づいた。

宇宙シャガ一号の蕾が、落ちていた。

——どういうことなんだろうか？

念信波に関する実験だとは聞いてるけど、蕾が落ちた理由については僕にはわからぬ。
ない。

——でももしかしたら……。

タレイアさんは園部さんと約束をしていふと言つていた。

もし昨日園部さんと歩いていた女性が彼の浮氣相手だとしたら、タレイアさんとの約束が破られたということなんじやないだろうか。

蕾が落ちた理由は、約束破りかも知れない。

ただの推測に過ぎないけれど、僕はそんなことを考える。

「おはよう、湯川君。今日は早かつたのね」

言いながら入ってきたのは、ニーナ教授。

「教授。これ……」

いつも通り美しい金色の髪をなびかせて近づいてきたニーナ教授に、僕は一号の薔薇を指し示す。

険しい表情になつた教授は、すぐさまプランターに近寄つて、僕を押しのけるようにしてその後ろに置かれたレベルレコードに手を伸ばした。

巻き取られていた記録紙を引っ張り出し、たぐつていく。

僕も後ろから覗き込むと、宇宙シャガがそれまでにない激しい反応を見せたのは、一分にも満たない時間なのがわかつた。

記録紙の横に刻印された時間を確認してみて、僕は気がつく。

——ちょうど僕が病院から出たくらいの時間だ。

時計を見たりしてたわけじゃないから正確ではないけど、診察室を出て少し経つたらいの時間だから、たぶんそれくらいだ。

その時間にあつたと僕が確信できるのは、園部さんのことだけ。

——でも、それが理由なのか？

理屈については僕にはわからない。

僕が女性と歩いてる園部さんを発見したことと、宇宙シャガ一号の蓄が落ちていることに関係があるのかもわからない。

「どいて」

僕を腕で払った二ーナ教授は、密閉プランターに向かい合うように置いてあるパソコン用デスクに向かい、パソコンの電源を入れた。
少しして立ち上がったパソコンをキーボードを打つて操作し、レベルレコーダのデータを呼び出した。

反応した記録も、時間も、記録紙に残されたものと同じだつた。

唇を噛み、苦々しげな表情を浮かべる二ーナ教授。

僕にはその表情がどんな意味を持つのか、理解することも推測することもできなかつた。

「あの……、二ーナ教授——」

「湯川君、実験を継続するわよ」

僕が何か言う前に、二ーナ教授はそう宣言した。

宇宙シャガ一号用のレベルレコーダの電源を切り、教授は大きなため息を吐く。

「ええっと、タレイアさんには、連絡するんですか？」

「それは湯川君が気にすることじやないわ。貴方の仕事はこの実験を観察し、記録を取ること。わかつた？」

「……わかりました」

「じゃあ紅茶を淹れて頂戴。こつちは観察と記録だけだから、次の変化があるまではそのまま継続。今日は半端になつてる実験を再開するわよ」

「はい、二ーナ教授」

いつもなら実験を始めるならウキウキとし出したり、にやけた顔になる二ーナ教授なのに、今日は沈みきつた表情をしていた。

でも二ーナ教授は、僕に話してくれる様子はない。

言われた通り紅茶の準備を進めながら、僕はもやもやとした気持ちを抱え続けるしかなかつた。

* 3 *

やつと運ばれてきた食後のコーヒーに、僕は背中に冷や汗が伝い落ちていくのを感じていた。

——助かつた……。

こつそり安堵の息を漏らしてゐる僕の正面に座り、満足そうな笑顔を浮かべてコーヒーを力アップを口元に寄せてゐるのは、ミレーユ・シュレディンガー助教授。

荒々しく流れ落ちる滝のような癖のある長い髪を背に流し、清楚な感じの深緑のワンピースを身につけ、たぶん実験の際の汚れ防止のためだろう真っ白なエプロンを掛けている、美人という言葉が似合う女性。

僕とほんの一歳しか違わない一九歳であるが、国立魔法科学大学ではニーナ教授にも次ぐ天才と噂され、しかし性格的に問題があることが理由で教授になれないままことしやかに語られているミレーユ助教授が、今日の僕の昼食の相手だつた。

研究室に詰めていてひもじそうにしていた彼女を、奢ると言つて誘つたら喜んで着いてくれた。

昼食の場所として選んだのは学食。

それも広い大学の敷地の中にいくつもある学食のうち、学生よりも職員や外からの方が利用する方が多い、美味しくてちょっと高めのところを選んだ。

よく食べる人なのは知つてたけど、予想よりふた皿ばかり多かつた注文に冷や汗をかきつつ、財布の中身で足りることに僕は安堵していた。

「それで、今日は何の用事があつてワタシを呼び出したのかしら？」

「えつと……」

とくに用事があると言つてお昼に誘つたわけではなかつたけど、ミレーユ助教授にはバレバレだつたらしい。

「どう切りだそうか迷つて、僕は挙動不審になつてしまふ。

「ああ、もしワタシと付き合いたいってことなら、美味しい食事よりも、何か珍しいものをプレゼントしてくれるか、誰も知らない素敵な穴場スポットにでも連れて行つてくれた方が嬉しいかな?」

ニーナ教授の実家も相当なものだけど、ミレーユ助教授はそれに輪をかけて裕福な家柄だ。

世界でも有数の大学とは言え、何でこの魔法町の国立魔法科学大学で助教授やつてるのかよくわからないくらいだし、大学に通うために世田谷の超高級住宅街の大きな私邸に住んでるのも凄まじい。

美味しい食事なら、ミレーユ助教授であればこんな学食よりも良いものを食べられるだろう。

「ええつと、今日はそういう用事じゃなくつてですね……」

「へえ?」

なんでか突然目を細め、冷たい視線を向けてくる助教授。

「まあ、そうでしょうね。湯川君だしね」

「えっと、まあ、そうですね」

どういう意味なのかいまひとつわからないけれど同意の言葉を返しておいて、僕は今日の用事を伝える。

「それでですね、ミレーユ助教授は、宇宙シャガって植物のことはご存じですか?」「宇宙シャガ、ですって?」

「はい」

それまでは外の空気よりも冷たい視線を向けてきていたミレーユ助教授が、いまにも雷でも鳴りそうな険しい表情になつた。

「——ああ、なるほど。この前二一ナに貸したあの実験用のプランターはそれ用だつたのね。またずいぶん珍しい土壤の指定をしてくると思ったら……」

「ええ、そうなんです。それでいま、宇宙シャガを使つて実験をしてるんです」あまり学生が多くないと言つても、昼時の学食だ。

食事の値段がそこそこするだけあつて快適性も重視されてて、席と席の間はけつこう離れてる。それでも僕は声を潜めて、納得した顔で頷いて見せたミレーユ助教授と話す。

「実験してるつてことは、被験者がいるのよね?」

「ええ、います」

いろいろ調べ回つて結局たいした情報を得られなかつた僕と違つて、さすが生物学課の助教授、名前を聞いただけで実験の内容までわかつたらしい。

「誰なの？」

「宇宙シャガの球根を持つてきてくれた、魔法町で花屋を営んでるという方——」

「もしかして、タレイア？」

「えつ、あ……、はい」

宇宙シャガについて聞きに来たとは言え、被験者となれば個人に関する情報。名前まで言わずに済まそうと思つたのに、ずばり言い当てられてしまつた。

タレイアさんの名前を口にしたミレーユ助教授は、眉根に深いシワを寄せた。
「ご存じなんですか？」

「まあ、ワタシもあの人には世話になつてゐるからね」

「生物学ですもんね」

「ええ。図鑑でしか情報がないような希少な植物を、種の段階で判別するような、一種の超能力の持ち主よ、あの人は。この魔法町にはいろんな人が住んでいるけれど、あの人ほどの植物の知識と、魔法使い染みた直感力を持つてゐる人はいないからね、けつこう有名人なのよ。……いろんな意味でね」

「なるほど」

「宇宙シャガなんて魔法町にだつて過去に何回か持ち込まれたことがあるかどうかの植物、あの人でなければ発見することはできなかつたでしようし」

プライドが高く、自尊心も人一倍で、けつこう嫉妬深いところもあるような気がするミレーユ助教授が素直に褒めてることに、ちょっと驚く。

でもその表情は相変わらず曇りきつたままだ。
話すなと言われてるから会つたりはしてないけど、タレイアさんのお店については
ちょっと調べてみた。

魔法町にはいくつもある、地球産はもちろん、地球外の植物も扱つている街の花屋さん、というのがタレイアさんの店のようだ。

規模的には個人経営のため小さく、人も雇つていないので不定期な休みがあつたりする。

ただ普通のお店と少し違うのは、好事家やミレーユ助教授のような研究者の引き合いが多いということ。法律的な問題があるようなものは扱つてないようだけど、宇宙シャガのように地球に入つてくることが珍しい植物を扱つてることがけつこうあるようだつた。

「しかし、よく宇宙シャガなんて手に入つたわね」
「そんなに珍しいんですか？」

「ワタシも実物を見たことはないわね。売買になんて出されたら、速攻で大学とか研究機関がかつさらつていくくらいにはね。……でも、そうか。あの人人が手に入れて、被験者になつてるのね」

濃い緑の瞳を僕から逸らして、魅力的な二ーナ教授の胸よりさらに大きな胸の前で腕を組み、考え込むように目を細める。

「それで、宇宙シャガというのがどんな植物で、どんな実験に使えるもののかお訊きしたいのですが……」

怒っているかのように顔を顰めているミレーユ助教授に、僕はおずおずとそう問う。実験に支障を来すようなことをしてはならない、というのはわかつて。でももしかしたらタレイアさんが婚約者に、園部さんに裏切られているかも知れない。

精神物理学では発生した現象を主に研究対象とする。精神に関わる学問なのだから、必ずではないけれど多くの場合、実験には被験者がいる。

実験に私情を持ち込んではならないと、いつも二ーナ教授には言われてる。でも裏切りが本当なら、何も知らずに黙つていられそうにはない。

だから僕は、すべてを見透かすように僕の瞳を見つめてくるミレーユ教授の瞳を見つめ返していた。

「（）の支払いは持つから、今度はどこか素敵な場所にでも連れてちょうだいね」

ひとつ大きなため息を吐き出して、ミレーユ助教授は席を立つ。

「えつと……、あの……」

「ニーナにも被験者に接触しないよう言われているでしよう？ 湯川君」「それはまあ、そうなんですが……」

「だつたら実験が終わるまで待つていなさい。実験が終わつた後なら、ニーナもちゃんと全部話してくれるだろうから」

「……ですか」

哀れみなのか、目を細めたままそう言つた彼女は、行つてしまつた。

温くなつたコーヒーで喉を潤し、僕はどうしていいのかわからないまま、ただ椅子に座り込んでいた。

*

「次はこのデータの入力お願ひ

「はい、わかりました」

ニーナ教授の声に応えて、僕は受け取つた書類の束を実験用の机の隅に広げる。

ノートパソコンを操作して新しいファイルを作成し、渡された書類に記載されたデー

タの入力を始めた。

今日はここのことやりっていた実験の成果を入力する作業をやっている。面倒な作業だけれど、データをまとめる作業はやつておかないと論文を書くときにさらに面倒なことになる、必須の作業だった。

本当はその入力作業も論文を書く本人がやつた方がいいと思うんだけど、今年度に入つてからの二ーナ教授の論文は、僕が手伝わないといけない程度にはなつていた。けつこう大量にある入力にげつそりしながら、ちょっとだけ止める。

ちらりと見た、密閉プランター。

二号から五号までの宇宙シャガの蕾が並んでいて、一号の蕾が落ちた一昨日のようないい。

——まだ、大丈夫なんだな。

この実験でどんな成果が得られて、蕾が落ちた意味がどういうものなのかはわからな

けれどたぶん、タレイアさんの言つていた約束が関わることだろうことは予想できた。

変化がないということは、たぶんタレイアさんと園部さんの間で変化がないということだと思う。

「まだかなり残ってるんだから、集中してもらえる?」

知らぬうちにプランターをじつと見つめていたら、二ーナ教授にそんなことを言われてしまった。

「あっ、はい……すみません」

愛用のC R Tモニタから首だけ振り向かせて、厳しい視線を向けてきている二ーナ教授。

そのときだつた。

「あっ! ああ……」

ぽとりと、二号の薔薇が落ちた。

僕の、目の前で。

「二ーナ教授!!」

座つていた椅子から立ち上がつて僕は叫ぶ。

こちらに視線を向けることなく、二ーナ教授はじつと落ちた薔薇を見つめていた。

「これは、どういうこと、なんですか?」

「薔薇が落ちたこと? 変化が出たつてことは、実験が正常に継続されている証拠よ」

「そう……、なんですか?」

「ええ。むしろ何も変化がなかつたら、この実験は失敗なのよ」

「そうなんですね……」

こちらを見ることなく、まだ落ちた薔を見つめているニーナ教授が、正常に実験が継続していることを喜んでいる様子はない。

目を細め、唇を引き結んで、何か思うところがあるよう見えるのに、その口から何かが語られる様子はない。

「薔が落ちるというのは、どういう状況なんでしょうか？」

恐る恐るそう訊いてみる。

ちらりと刺すような視線を一瞬だけ僕に向けてきたニーナ教授は、身体を元に戻して、入力作業を再開した。

「実験の内容については、全部終わつたら話して上げるわ。だからそれまでは余計なことは考えないようだ」

「わかりました」

タイピングの度に微かに揺れる金糸の髪越しに聞こえる声からは、何を考えているのかまではわからない。

一号で取つたのと同じく、二号のデータが正常に記録されてゐるのを確認しながら、僕はそれ以上のことが何もできないでいた。

CRTモニタに微かに映つてゐる湯川の様子を見てみると、宇宙シャガの蕾に目を落としているのが確認できた。

魔法町でも密かに名前の知られているタレイアに心を奪われているという感じは、していらない。

あの日タレイアに接触したために何らかの感情移入をしているのかも知れないとも思つたが、実験の詳細を知らせていないのだ、共感できそうな要素はそれほど多くない。表示された入力画面に注意を戻し、作業を再開する。

——何かあつたのかしらね。

良くも悪くも湯川は研究莫迦だ。

実験対象に疑問を持つことはあつても、感情移入するということは少ない。ましてや心奪われて実験をおろそかにすると言うタイプでないというのは、最初に会つたときにも、これまで見てきた彼の行動から考えても、そうありそうなことではなかつた。

大きなため息を漏らして、湯川が作業を再開した。

それをちらりと確認した二ーナは、眉を顰めていた。

——実験が終わるまで、何事もなければ良いのだけど。

* 4 *

研究とは、人を幸せにするために行うものだ。
僕はそう考えてる。

ニーナ教授を手伝つてやつているような、精神物理学の基礎研究では、成果がすぐさま人を幸せにするなんてことはあり得ない。でも、原則としてこれから先の、誰かの幸せにやるべきだと思うし、実験や研究によつて不幸になる人がいやいけないとと思う。あくまでそれは理想論だから、誰ひとりとして不幸にならない研究なんてのはあり得ない。同じ大学の中でも、世界中の研究者の間でも、予算や研究対象による競合はあるんだから、理想の完璧な実現はたぶん無理だ。

それでも少なくともできる範囲では不幸な人が出てほしくないと思う僕は、いま神保町にいる。

日本有数の規模を誇る国立魔法科学大学のデジタルライブラリでも、大図書館にも、宇宙シャガに関する詳細な情報はなかつた。

でもこの神保町の、魔法世界になる前から存続している古本屋街では、人が文字を編み始めた頃の石版から、宇宙の果てから流れ着いた書籍まであると言われてる。薄暗い廊下から見えるのは、立ち並ぶ小さな古書店の入り口。

一步踏み込むと無限の敷地を持つてゐるような、書棚に整然と差し込まれた古書たち。神保町の中でも最下層に近い位置に建つ、旧神保町古書センターに踏み入れた僕は、途方に暮れていた。

宇宙シャガの情報を探すために、植物関係の本が多いところか、念信波関係の本に七星をつけて探してゐるけど、前者は数が多くすぎて発見が難しく、後者は数が少なすぎて見つけるのが困難だつた。

地球外の本となると言葉ももちろん地球外のもので書かれてるし、宇宙で公用語として使われてる言葉もたくさんあるから僕が読める本は決して多くなかつた。

一冊本を手に取つてぱらぱらとめくるが、ため息を吐いて戻す。

タイトルは僕でも読める宇宙公用語だけど、中身は現地語と思われる言葉で書かれていて読めない。

大学帰りにこうして神保町に寄るようになつて二日目。僕はすでに徒労感を覚え始めていた。

——やつぱり、二ーナ教授か、ミレーユ助教授に聞くしかないかな。
しゃがんで下の方にある、読める宇宙語で書かれた本のタイトルを一冊ずつ確認しながらそんなことを考える。

どんなに聞き出そうとしても、ここまでふたりの態度から想像するに、実験が終わ

るまで宇宙シャガのことを教えてくれることはないだろう。待つことができない僕は、やはり自分で探すしかない。

「徒労に終わりそうな気もするけど」

小さくつぶやいてため息を吐く。

ニーナ教授は早ければ一週間で実験が終わると言っていた。

すでに蕾はふたつ落ちている。

実験は一週間は超えられるかも知れないと、一ヶ月になることはないだろうと思えていた。

「探しものですか？ 湯川さん」

ここでの搜索を終えてもう一軒回つたら帰ろうと思ったとき、声をかけられた。

立ち上がりろうとした動きが硬直する。

背筋に冷たい予感が走り抜けていく。

かけられたのは穏やかで優しい感じの声なのに、僕は死の予感を覚えていた。

「ゾフィア、さん……」

声をかけてきた人物に目を向けると、喪服を思わせる黒い和服に身を包む、ゾフィア。

フランケンシュタインがいた。

人形のように整つた顔立ちと、しつとりとした長い髪。

柄はあるけどほとんど黒一色と言つていい和服のゾフィアさんなのに、ニッコリと笑む彼女が醸し出しているのは、菊の花の雰囲気。

それも、仏前に飾る、造花の菊を思させた。

「先日はご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした」「い、いいえ。えっと、僕はこれで――」

「何か、探しものだつたのでしょうか？　こんな下層の古書店までいらつしやるとは、よほど見つかりにくいもののようですね。先日のお詫びに、わたしの知つていることでしたらお教えしますよ」

後退つて逃げようとした僕の袖口をちょこんとつまんだゾフィアさん。

振り払おうとしたのに、袖をつかんだ彼女の手はぴくりとも動かない。

恐怖に駆られた僕は、思わず口にしていた。

「宇宙シヤガという植物を、ご存じですか？」

瞳が光ったのかと思つた。

口元の優しい笑みは変わらないのに、ゾフィアさんは瞳を輝かせ始め、目尻を垂らす。

「ええ、知っていますよ。知っていますとも。けれど湯川さんが知りたいことは、ここで話せるほど簡単な内容ではないでしようから、近くの喫茶店に行きましょう」

そう言つたゾフィアさんは有無を言わせず袖を引っ張つて店の外に歩いていく。

「いや、でも、僕は……」

「大丈夫ですよ、湯川さん。ニーナからは貴方を含めて会いに来てはならないと言われてしまっていますが、ここで会ったのはただの偶然です。偶然会って、わたしは訊かれたことに答えるだけ。偶然ですから貴方に危害を加えるようなものも持つていませんし、ただお話をしますだけです」

弾んだ声でそんなことを言うゾフィアさん。

可愛らしい女の子にお茶に誘われてるわけだから普通なら喜ぶところだけど、彼女の本性を知つていたら逃げ出したい気持ちの方が強い。

けれど僕は、宇宙シャガのことと、タレイアさんのことが気がかりで、ゾフィアさんの手を振り払うことができないでいた。

*

近くの、と言つていた割に、美味しいお店があるからと言われて、僕は神保町中層の商店エリアまで連れてこられることがなつた。
区画を貫通する中層アーケードには様々な種類の店が集まり、人がごつた返してい
る。

ゾフィアさんが選んだのは、人通りの多いアーケード沿いの落ち着いた喫茶店。

暗い路地に入つていくなら逃げようと思つていたけどそんなことはなく、テーブル席で向かい合つてニコニコとした笑みを浮かべているゾフィアさんの真意はわからない。

「宇宙シャガとは、またずいぶん珍しいものを手に入れましたね、ニーナは」

「……ええ」

「確かに公式の記録では地球に持ち込まれたのは過去に一度、球根が二個だつたはずです。非公式で一回、やはり二個。合計四個しかこれまで持ち込まれてはいないと思います」「そんなに珍しいものなんですか」

「そうですね」

運ばれてきた紅茶セットと、薄手のパンケーキ三枚重ねに嬉しそうに笑み、早速手を着け始めるゾフィアさん。

「本当に珍しい植物ですからね。探しても資料は得られなかつたでしよう？」

「はい」

一度は殺されかけたのだから、警戒を解くわけにはいかず、僕は警戒しつつコーヒーのカップを傾けた。

「運が良かったですね、湯川さん」

「え？」

「こちらをどうぞ」

言つてゾフィアさんは、隣の椅子の上に置いた自分の巾着袋に入れ、何かを取り出した。

古びた感じの本。

かすれて見えにくくなつてゐる表紙に印刷されたタイトルは、明らかに地球の文字ではない。開いて見せてくれたページには、僕が調べたときに見ることができた、宇宙シヤガの特徴がある花のイラストが描かれていた。

ただ、タイトルはもちろん、ページに書かれた内容も、僕の知つてゐる宇宙公用語とは違つて、読むことはできなかつた。

「今日は少々不要な本の処分に来ていましてね、この本はページがいくつかなくなつてしまつてゐるので買い取つてもらえなかつたのですよ」

めくつて見せてくれた次のページにもびつしりと文章が書かれている。

イラストにより特徴的な部分も描かれてるその本は、一般人向けの図鑑や、園芸関係者向けの専門書と言うより、植物学者向けのカタログのように思えた。

「えつと、これは？」

「わたしの蔵書の一冊ですが、もう使うことはないので差し上げます。少し珍しい言葉

で書かれていますが、辞書があれば読めます。湯川さんは内容、読めましたか?」

「いえ……」

「でしたらお教えしますね」

こうして見ているだけなら可愛らしい純日本風の女の子であるのに、胸の奥で警笛が鳴り響いてる。

それでも僕は、ゾフィアさんの説明に聞き入つてしまつていた。

「宇宙シャガが念信波に感応する性質を持つていることはご存じですね?」

「え、ええ、一応」

「それはとくに、約束に感応することが知られています」

「約束に、ですか」

「そうなのです」

ニーナ教授も見せることがある、好きなことを好きなように語る楽しそうな、でもギラギラとした色を瞳に浮かべているゾフィアさん。

「宇宙シャガは、その性質をよく知る人たちからは『プロミージア』と呼ばれています。地球にはほとんど入ってきたことがないので、宇宙シャガという学名が定着していますが、通称は約束草と言います」

「約束に感応する、約束草?」

「はい。例えばこの人と必ず結婚をするという約束をプロミージアに籠めて植えると、結婚式で誓いの言葉を述べた際に花が咲くという、そうした性質があるので。逆に約束が破られると蕾が落ちるそうです。そうした性質ですので、まだ数多くあつた頃は縁起のいい花として使われていたという記録が残されています。でも、すっかり数が減つてしましましたね」

祝いに使われる花だとしたら、どんな方法を使つてでも増やしそうなものなのに、宇宙シヤガは何故か絶滅が危惧されている。

ポットに残った紅茶をカップに注ぎ、ミルクも入れてニコニコとしているゾフィアさんに訊いてみる。

「なぜ絶滅しそうになつてているんですか？ 栽培しにくい植物なんですか？」

「花を咲かせるだけなら、約束を籠めて適切な土壌に植えればいいだけなので、栽培は簡単なのですよ。ですがプロミージアは増やすことが難しい。球根では増えず、種で増えるのですが、一説によると命懸けの約束が成就したときにしか種ができるとか。元々は文明が滅び去り人類がいなくなつたある惑星の実験施設で発見されたそうで、どういう意図で、どういう植生であるのかは発見当時からわからなかつたそうです。人造の植物であることだけは、確かだつたのですが」

楽しそうに笑んでいるゾフィアさんから、僕は目を伏せる。

いま落ちた蕾はふたつ。

被験者に選ばれるような、命懸けの約束を交わしただらうタレイアさんと園部さん。しかしその約束はすでにふたつ、破られたつてことだろう。

破られた約束が具体的になんのかはわからないけど、その原因はたぶん、園部さんと一緒にいたスズランのような女性に関係しているだらうこととはわかつた。
——でも……。

ちらりと見たゾフィアさんは、笑みを浮かべたままカツプを口元に寄せている。 彼女が本当のこと語っているとは限らない。これまでもニーナ教授に、そして僕に仕掛けてきた人なんだ、その言葉を全面的に信じるわけにはいかない。

「ちなみに、わたしの言葉を信じられないのはわかりますが、いま語った内容はその本にすべて書かれているものです。ですから、翻訳してその本を読んで頂ければいまの言葉にウソがないことはわかると思いますよ」

まるで僕の思考を読み取ったかのように、口元に笑みを浮かべたままゾフィアさんが言つた。

そこまで言われても信じることができない僕だけど、それはいま僕の手元にある本を読めばわかることだろう。

こちらに寄せられた本を手に取り眺めながら、それでも僕は警戒を解くことができな

い。

「どうして、僕にそんなことを教えてくれるんですか？ ゾフィアさんは僕のこと、邪魔に思っていますよね？」

「ええ、その通りです。できるなら、すぐに消し去ってしまいたいと思っていますよ」

柔らかな笑顔を浮かべながら、とんでもなく物騒なことを言うゾフィアさんに背筋が凍りつく。

「けれど、ニーナに言われてしましましたからね。こちらからニーナや貴方に近づかないように、そして危害を加えないように、と。今日は偶然会って、問われたから答えたまでです。理由は……、そうですね。わたしもニーナと同じ研究者ですからね、知的好奇心に駆られている人を放つておくことはできません。それから、お詫びです」

「お詫び？」

「ええ。ひと思いに貴方を消し去れなかつたことへの」

全身から汗が噴き出したような気がした。

花のように明るい笑顔を浮かべているのに、ゾフィアさんの言葉はあまりに不穏すぎた。

立ち上がった僕は、思わず身体を反らしてしまっていた。

「大丈夫ですよ、湯川さん。ニーナにあれだけキツく言わっていますから、貴方に手を出

すことはありません。もし次、偶然出会ったとしても、そちらから呼び止めるようなことでもない限り、追いかけていつたりはしませんから。それがニーナとの約束、です」以前も思つたことだけど、やはりゾフィアさんは正常じやない。いや、様々な人がいる魔法町なんだ、彼女のような人がいることも別に不思議でもおかしくもない。

ただ、僕やニーナ教授とは違うチャンネルで思考しているゾフィア・フランケンシュタインという人間とは、わかり合うことも理解もできないと言うだけだ。

「そう、……ですか」

「はい。ああ、ここのお代は持ちますから、構いませんよ」

「ありがとうございます」

澄ました顔で言うゾフィアさんを見ていられず、一応礼だけ言つて、僕は席を離れて出口へと向かう。

「それでは良い実験を」

何か含みがあるような声が追いかけてきたけれど、振り返る気力も返事をする元気もなく、僕は古びた木製のドアを開けて外に出た。

*

「はあ……」

大きな息を吐き出して、壁に背をつける。

喫茶店のすぐ前を離れて、人混みの中に立ちすくむ僕は、どつと疲れを感じていた。
——やつぱりゾフィアさんには近づくべきじやないな。

充分わかつていたはずなのに、何故近づいてしまったのか。

自分に問わなくとも理由はわかってる。宇宙シャガ——プロミージアと、タレイアさんのことが気がかりだからだ。

「でも、恐い思いをした成果はあつたな」

右手に持つた、古びてページも一部抜けてしまっている本を見、僕は肩から提げた鞄にそれを収めた。

今日はもう帰つて早く休もう、と考えていたときだつた。

「！」

顔を上げた瞬間、僕のすぐ側をすれ違つていつたのは、園部さんとスズランのような女性。

病院に入つていつたときの、少し緊張した様子もなく、ふたりは微笑みを向け合いな

がら人混みの中を歩いていく。

園部さんが手に提げているのは、マーケットにでも寄っていたのだろう、食材が入つていると思しき袋。

楽しそうにアーケードの中を歩くふたりの距離感は、友達同士のそれではない。それに買い物袋を見ながら話し合っているらしいその様子から、たぶんこれから食事をつくつて家で食べるんだろうことも想像できた。

——ふたりは一緒に暮らしてゐる?

タレイアさんと婚約しているのに、別の女性と暮らしている様子の園部さん。それが裏切りでなくて、約束破りでなくて、なんと言うのだろうか。

——追いかけよう。

思つて一步踏み出す僕だけど、留まる。

タレイアさんを通して顔くらいは知つてゐるけど、園部さんは別に知り合いじゃない。追いかけても何にもできないし、声をかけても不審に思われるだけだ。

僕には、何もできない。

一瞬頭と身体を駆け巡つていった熱をため息とともに吐き出して、遠退していく園部さんたちを見送り、振り返る。

「あつ！」

「きやつ!!」

人混みの中で立ち止まっていたのが悪かつたんだろう。

振り返った瞬間、人にぶつかってしまった。

「ごめんなさいっ。大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

反射的に腰に手を回して相手が倒れないよう抱き寄せた僕は、フードを目深に被つたその女性の顔を見てしまった。

「タレイア、さん？」

「あ……。確か、湯川さん、でしたね」

彼女の腰に腕を回したままの僕は、顔を上げたタレイアさんと間近で見つめ合う。

——あ！

いま、ここにタレイアさんがいる理由を、それも正体がバレないよう顔を隠してゐる理由を、僕は一瞬で理解した。

「あの……、突然ですが、湯川さんにお願いがありますっ」

潜めた声を、潤んだ瞳とともに向けてくるタレイアさん。

彼女の頼み事は、詳しく聞かなくてもわかつた。

「あのふたりを、追えばいいんですか？」

「え？　ええ……。ふたりのいま住んでいる家がわかれれば……」
「わかりました」

ちらりと視線だけ振り返つて、まだ園部さんとスズランのような女性がアーケードにいるのを確認する。

タレイアさんが懐から取り出した名刺を受け取り、泣きそうで、すがるような瞳に見つめられながら、僕はこつそりと園部さんたちの後を追いかけ始めた。

* 5 *

ぽとりと、薔薇が落ちた。

窓の外ではすっかり夕暮れの日差しも消え、実験室が固まっているこの区画には人の気配もほとんどない。

「やつぱり、ダメじゃない」

そうつぶやいたのは、ニーナ・AINシユタイン。

湯川が帰つてからもうずいぶん時間が経つていた。

静まり返つた実験室内で、手櫛で金色の髪をかき上げ、椅子に座つたニーナは厳しい目を密閉プランターに向ける。

実験は、ある意味で順調だつた。

過去に地球で行われた宇宙シャガ——プロミージアの実験では、一度は蕾すらつけることなく終了し、そのまま球根が長期保管の間に行方不明。もう一度は蕾をつけはしたが、蕾が落ちることも花が咲くこともなく、育った茎が枯れて終了し、球根は地球外に売却された。

蕾をつけ、それが落ちるという反応があるだけでも、実験は成功していると言えた。しかしながら蕾が落ちたということは、約束が破られたということ。

タレイアの顔を思い出し、ニーナは顔を歪めていた。

大きなため息を吐き出したとき、廊下の方から近づいてくる足音が聞こえてきた。

「ニーナ！ 大変よつ」

「ミレーユ、湯川君にプロミージアのこと、話した？」

ノックもせずに扉を開けて入ってきたミレーユの声を遮るように、ニーナは彼女に問い合わせた。

「え？ プロミージアのこと？ 訊かれたけれど、話さなかつたわよ。被験者のこと、聞いたしね。どうかした……、のね」

「まあね」

プランターの傍までやつてきたミレーユは、落ちた蕾に目を向け、厳しく目を細めた。

「まだ一週間も経つてないわよね？　これはいくつめ？」

「今日で六日目ね。これはさつき落ちた三号。早々に落ちる可能性は考えてたんだけど、思つた以上に早いのよ。だから貴女が湯川君に話したのかな、つて」

「まさかっ。ワタシが実験の邪魔をするとでも？」

怒つた顔でそんなことを言うミレーユの顔をじつとりと見つめると、目を逸らされた。

なんだかんだで実験の邪魔をされた回数は、軽くふた桁になる。すべて、事前に察知して実害はなかつたが。

「そつ、そんなことより！　大変よ、ニーナ」

「どうしたのよ。被験者のことならいまは聞く気はないけれど？　今まで実験に支障を来すようなことはできないからね」

「そんなことじやなくて！」

必死そうな、焦りを感じさせる色を浮かべた瞳で言うミレーユに、不穏な空気を感じ取り、ニーナは黙つた。

「ゾフィアが、大学の近くをうろついてたつて報告が入つたのよ」

「あれが？　今度こそあちらからは私にも、湯川君にも接触しないよう言い含めたから大丈夫なはずだけど……」

ゾフィアは妙なところで素直で律儀な性格をしている。

これ以上あちらから接触してきたら、存在しないものとして扱う、と言うと、絶望したように彼女は守ることを約束した。

以前成果を見せるように言い、空間ポケットをひつさげてきたときもそうだつたが、ゾフィアは多少解釈がおかしい場合はあつても、一度した約束を破ることはない。

彼女のことばは放つておいても実害はないようと思えた。

——いえ、そうね。

ゾフィアの解釈の範囲の広さを思い出し、ニーナは椅子から立ち上がる。

「あれのいる場所はわかる？」

「昨日も今日も同じ場所で見かけたそだから、まだそこにいるならわかるけれど……。

会いに行くつもり？ それがあいつのやり口よ」

「わかってる。でもたぶん、いまはあれに会つて、話を聞かないといけないタイミングだと思うから。ミレーユはここに連絡入れて。緊急事態だつてことで」

言つてニーナは、机の引き出しから折り畳んだメモを取り出し、ミレーユに渡す。

「気をつけなさいよ、ニーナ」

「わかつてる。もしかしたら一刻を争う事態になつてゐかも知れないから、早めにお願いね」

愛用のホウキを手に取つた二ーナは、一緒に実験室を出たミレーユと視線を交わし合ひ、互いに逆方向へと走り出した。

*

すっかり日が落ちた街の中を飛び、僕は住宅街のある区画に降り立つた。

ミレーユ助教授が住んでいる世田谷の高級住宅街のように、一区画一軒なんていう贅沢な土地の使い方をした家はないが、僕の極小サイズのアパートとは違い、それなりに高い階層の人が住むような閑静な住宅街。

地上から一〇〇メートル近い高さがある積層建造物の外側に設置された、キャットウォークというにはずいぶん広い通路に立ち、僕は辺りを見回す。

魔法町の中でも閑静な住宅街で、もう夕食時にも遅い時間だからか、近くの部屋はどこも屋内に光が灯っているのは見えるが、歩いている人はまばらだ。

昨日、プロミージアのことをゾフィアさんに聞き、たまたま園部さんを見かけ、タレイアさんに頼まれて後を尾けた。

無事にいま彼が住んでいる家を確認した僕は、タレイアさんにその場所を教えた。

そして翌日の今日、タレイアさんはそこを訪れて話を聞くという。

僕には直接関係のないことだし、実験の被験者に触れるのも問題だと思つたけれど、第三者として話し合いの席にいてほしいと涙ながらにお願いされて、断れなかつた。

——二ーナ教授に怒られるかな……。

偶然とは言えこんな状況になつてることに、教授に何を言われるかはわからない。実験にどんな影響があるのかも不明だ。

でも、タレイアさんが園部さんに裏切られてるのだとしたら、放つておくことはできなかつた。

「でもちよつと、早すぎたな……」

昨日タレイアさんと約束した時間は、約一時間後だ。

今日の大学での作業を終え、一度アパートに帰つて食事も摂つてから来たけれど、どうしても気が急いでしまつて早く来すぎてしまつた。

タレイアさんが来るまでこの辺をぶらぶらしていようか。

話し合いになつたらできるだけ聞くだけにしておこう。

なんてことを考えながら、昨日突き止めた園部さんの部屋の前に立つていた。

「……君は、誰だ？」

誰かがホウキに乗つて凄い速度で近づいてくると思つたら、声をかけられた。

建物にぶつかる勢いで着地し、ゆっくりと立ち上がりつて僕に怒つたような視線を向け

てきたスーツを着た男性は、園部さん。

「え？ いや、僕はその、ちょっと人と待ち合わせてて……」

顔の前で手を振つて何でもないとアピールしようとするけど、自分でもわかるほどの慌てつぶりはたぶん逆効果だ。

「もしかして、君はタレイアとここで待ち合わせでもしているのか？」

「タレイアさんと？ あ、いえ！ ええつと……」

「彼女はいまどこにいる!!」

僕がタレイアさんの知り合いと認識したんだろう園部さんは、襟をつかんで顔を近づけ凄んでくる。

これ以上は誤魔化しきれず、僕は話した。

「た、タレイアさんとは、その、一時間くらい後の待ち合わせをしていて、まだここには……」

「一時間後？ そうか……。いや……。君は、いつたい何のためにここに来たんだ？」

「それは——、タレイアさんが話し合いをするから、第三者として立ち会つてほしいって言われてて」

「立ち会い？」

何かを考えているらしい、僕を睨みつつも別のところに注意を向けている様子の園部

さん。

何かを思いついたらしい彼は、つかむ場所を襟から腕に変え、言つた。

「君も一緒に来てくれ！」

外に面した扉のノブに手をかけ回した園部さんは、僕の腕を引つ張つたまま部屋の中へと入つていった。

*

格子状の木枠にガラスをはめ込んだ古風な扉を開け、それほど多くないカウンター席と、いくつか並んだテーブル席の置かれた店内を見回し、ニーナは目的の人物を発見する。

「どうかしたの？ ニーナの方からわたしに会いに来るなんて」

近づいて行つたニーナに、そう言つて花が咲いたかのように笑みを零れさせているのは、ゾフィア。

ミレーユに場所を聞いてやつてきた、神保町にほど近い喫茶店。目撃証言があつた通り、喫茶店にはゾフィアがテーブル席に座り、優雅にお茶を飲んでいた。

「わたしからは接触してはいけないと言われていたけれど、二一ナから会いに来たの
だつたら問題ないのよね？ せつかくだからお茶でもいかが？ このお店はとつても
紅茶が美味しいのよ。ディナーを、と言いたいところだけれど、まだアフタヌーンティ
セットも頼めると思うから、どうかしら？ 美味しいスイーツとお茶を飲みながらゆつ
くりお話ししましょう」

本当に楽しそうに、ニコニコと笑いながら言うゾフィアに、二一ナはため息すら出な
い。

こうして自分のいる場所に誘導することが、ゾフィアの目的であることは十分理解し
ていた。そうした姑息な手を使う人物であることは、充分過ぎるほど理解していた。

だから二一ナは、テーブル席に着いているゾフィアの前には座らず、テーブルに片手
を置いて彼女を睨みつける。

「どうして湯川君に、プロミージアのことを話したの？」

「せつかくこうして貴女から会いに来てくれたというのに、そんな話なの？」

不快そうに眉を顰めているゾフィアの言葉に取り合うことなく、二一ナは彼女を無言
のままじっと睨みつける。

小さくため息を吐き、ゾフィアは話し始めた。

「二一ナがやつてている実験の手伝いをしたかつただけよ」

「手伝い？」

「ええ。プロミージアが種を実らせるのは、とてもなく強い念信波を受信したときだけ。それほどの念信波をプロミージアが受け取るのは、究極的な願いの成就か、極限的な破局のとき。そうなるよう、湯川さんに話しただけです」

テーブルの向かい、いまは誰も座つていらない席を見つめ、ゾフィアは言う。

「ちょうどこの席で、昨日、彼に」

「昨日、ここで、湯川君に……」

言われた言葉を反芻しながら、ニーナはゾフィアから顔を上げ、大きく取られたアーケードに面した窓の外を見る。

そろそろ昼営業が中心の店がシャツターを閉め始め、夜に営業する店が目当ての人々に客層に入れ替わりつつある通りを見つめて考えていた。

「あ、でも勘違いしないでくださいね。湯川さんと会ったのは本当に偶然で、彼に会おうとしたわけではないのですよ。プロミージアのこと話をしたのもあくまであちらから問うてきただけで——」

言い訳を並べているゾフィア無視して、ニーナは彼女の意図を読み取ろうとする。

—— そうか、そういうことね。

何故ゾフィアがここで湯川と話していたのか、理解できた。彼女が何をしかけようと

し、結論がどうなるかについても、推測できた。

テーブルに着いていた手を離したニーナは、そのまま喫茶店の出口へと向かう。

「待つてニーナ！ どこへ行くの？」

慌てて椅子から立ち上がったゾフィアは、ニーナの行く手を阻んだ。

店員やまばらにいる客が驚いて顔を向けてきているが、両腕を広げて立ち塞がつているゾフィアは気にしている様子もない。

そんなゾフィアも無視して、ニーナは彼女の腕とテーブルの隙間に身体をねじ込み、無理矢理通り抜けようとした。

「どうしたの？ ニーナ！ せっかくまた会えたのに、もう行ってしまうの？ 少しくらい、少しくらいわたしと話を——」

そう言つて服にすがりついてくるゾフィアに一瞬だけ冷たい視線を向け、ニーナは手を振つて障害物をどかそうとする。

「どうしたの？ ニーナ。なぜ何も言つてくれないの？！ わたしは……、わたしはこんなに貴女のことを愛しているのに！！ 貴女のことを、誰よりも大切に想つているのに！」

目に涙を溜めて言うゾフィアは、可愛らしく、美しい。
しかしそれは毒を持つ花。

誘い込み、死に至らしめる食人植物。

目を細め、感情の籠もらない視線で震えているゾフィアを見下ろしたニーナは、ため息を漏らしながら言つた。

「貴女は私にとつて不要な存在なの。確かに貴女の研究やその成果は素晴らしいわ。けれどね、私にとつて貴女は邪魔になる存在。私の行く道を遮る存在。だからいるの。私は貴女を存在しないものとして扱うわ」

冷たく言い放つたニーナに、ゾフィアは表情を凍りつかせた。
それでも彼女はニーナの服を離さない。

「わたしは……、わたしは貴女を誰よりも愛していて、貴女を永遠に愛して——」

「いらないのよ、貴女の愛なんてね。不要なの、ゾフィア・フランケンシュタイン」

感情を籠もらない言葉をへたり込んだゾフィアに降らせ、ニーナは喫茶店の外へと出た。

「急がないと……」

顔を歪め、ミレーユに借りた高速型のジェット推進式ホウキを手に、ニーナはアーケードを走り抜けた。

——間に合つて！

そう心の中で祈りながら。

* 6 *

首を吊つた女性。

園部さんに引つ張られて部屋に入り、狭い廊下を抜け、宇宙を股にかけた貿易商人にふさわしい高級そうな家具が置かれたＬＤＫにある扉を開け、踏み込んだ。

寝室になつてゐるそこには、天井に剥き出しになつてるパイプにロープをかけ、首を吊つてゐる女性がいた。

灯りが点けられていない寝室であつても、その女性が誰なのかはわかる。
スズランのような女性。

園部さんの浮氣相手かも知れない女性が、寝室で首を吊つて死んでいた。

「雪菜……」

つかんでいた僕の袖から手を離し、力を失つてしまがみ込む園部さん。

——なんで、こんなことになつてゐるんだ？

ぜんぜんわからなかつた。

たぶんこの部屋で、園部さんとふたりで暮らしていただろう、雪菜と呼ばれた女性。

昨日見た限りでは園部さんと一緒に幸せそうな笑みを浮かべていた彼女が、どうして

首を吊つてゐるのか、僕には理解できなかつた。

「あら？ 幸夫さん？」

そんな声が聞こえてきたのは、奥の壁に沿つて置かれたベッドの影、よく見ると天井から伸びたロープが伸びてゐる先からだつた。

そこから立ち上がつたのは、嬉しそうな笑みを浮かべた、タレイアさん。

「どうしたの？ 幸夫さん。仕事で今日はあと一時間くらいは帰らないはずではなくつて？」

ニコニコと笑み、本当に嬉しそうな視線をタレイアさんは園部さんに目を向けている。

「そこには湯川さん？ 貴方も何故ここにいるのかしら？ 約束していつ間に早いじゃないですか。まだ準備を始めたばかりですから、いくらなんでも早すぎますよ」

ベッドの影から出てきて、天井からつり下げられゆらゆらと揺れている雪菜さんの隣に立つたタレイアさんは、困つたように眉根にシワを寄せた。

まったく状況が理解できない。

園部さんと話し合うときの立会人として呼ばれたはずの僕が、雪菜さんの死体を発見し、その部屋の中には一時間後に会うはずのタレイアさんがいる。

こんな状況をどう理解していいのか、思考が止まっている僕にはわからなかつた。呆然とする僕は、僥く綺麗だつた雪菜さんのことを見上げる。

「あ！」

と声を上げた瞬間には身体が動いていた。

手にしたままだつたダブルサイクロンホウキにまたがり、勢いがつきすぎて天井に頭をぶつけながらも飛び上がる。

雪菜さんの眉がわずかに動いたのが見えた。

だから僕は、脚でホウキを支えて彼女の身体を抱え上げた。

急いでロープを緩めて外してやると、咳き込みながら息を吹き返す雪菜さん。

「雪菜！」

「あら？ やつぱりまだ早かつたようですね。あと数分遅ければ、確実に仕留められていたのに」

「わ、わたしは……」

「説明は、その……、後で」

涙を流していた園部さんは安堵の表情を浮かべ、微笑みを崩さないタレイアさんは口を尖らせていた。

何が起こつたのかわからないらしい雪菜さんは僕の視線の先に気づき、しがみついて

きた。

——あれば、タレイアさん……。

こちらに笑顔を向けてきているのに、瞳が少しも笑っていないタレイアさん。彼女はただ美しいバラなんかじやない。

トゲを持ち、茨を伴つた、人を傷つける者だ。
それも人を傷つけることを知つていながら、それが当たり前だと認識している、茨姫。
そんなタレイアさんに近づけなくて、僕はホウキにまたがつたまま、できるだけ彼女から離れて部屋の隅で滯空する。

「なぜ……、なぜこんなことをしたんだ、タレイア！」

とりあえずの雪菜さんの安全が確保されたからか、ゆっくりと立ち上がりながら園部さんはタレイアさんに向かつて叫んだ。

「なぜって……。そんなの決まってるじゃない、幸夫さん。貴方を愛しているからよ」
愛情なのだろう。

園部さんに向けた視線から幸せそうな感情をあふれ出しているタレイアさん。
まるで一服の絵のように美しい。

幸せな笑みを浮かべるタレイアさんは、ただそれだけなのに、芸術的とも言える美しさを放つていた。

でも雪菜さんが震えながら僕にしがみつき、部屋の中央に首つりロープがぶら下がつているこの部屋でそんなことを言つても、感じるのは幸福感なんかじゃない。

ただ、恐いだけだ。

「湯川さんのせいですよ。準備が整つてから来てくだされば、それが完全に息絶えてから発見して、自殺つてことにできたのに」

不機嫌そうに口を尖らせるその表情も美しいと思えるのに、いまは美しければ美しいほど、恐怖が湧いてくる。

いまのタレイアさんは、異常だつた。

ゾフィアさんに似た、人間性の壊れた、どこか違う世界で思考している人物だつた。
 「約束……、したじやないか！ 雪菜が……、妹の病気が治るまでの間だけだつて。その間だけ待つてくれれば、実家とは縁を切るし、君とも結婚するつて……。雪菜が来る間は、俺を探さないし、俺を追いかけないし、俺の家を突き止めたり、雪菜に危害を加えない、君は約束してくれたじやないか！」

——妹！

園部さんの叫びに、僕は理解した。

病院に行つていた理由も、一緒に暮らしていた理由も、そして近くで見てみれば似ていると感じられるふたりが、兄妹であることも。

それと同時に間違っていたことに気づく。

——約束を破つていたのは園部さんじやなく、タレイアさんだつたんだ！
 「どうして約束を破つたんだ……。たつた一ヶ月なら大丈夫つて、言つてくれたじやないか……。俺はそれを信じたのに……」

悲痛な声を上げる園部さん。

片手で顔を覆い、震えている彼は、泣いているらしい。

そんな彼を見つめて、やはり幸せそうに笑んでいるタレイアさんは言った。

「だつて、仕方ないじやない。貴方の傍にはわたし以外の女がいてはいけないのだから。たとえ妹でも、我慢なんてできないの。わたしはそれほどに、貴方のことを愛しているのよ」

とても香しい猛毒。

そう表現するしかない笑みを湛え、タレイアさんは園部さんに手を伸ばす。

「やめてくれ！」

「……え？」

伸ばされた手を振り払つた園部さんは、悲しそうに顔を歪めている。

「君の望みはできるだけ叶えてきた。君以外の女性も遠ざけてきた。君が俺の傍にいた女性を傷つけても、我慢してきた！ でも……、でも家族を傷つけることだけはダメ

だつ。雪菜を……、妹を傷つける奴を、家族にすることはできない!!」

「でも、貴方はわたしのことを愛しているつて……。それに、貴方は……」

「ああ、愛していたさ! 打算があつたことも認めるが、君は俺が会つたことのあるどんな女性よりも素晴らしい女性だつたさ! でももうダメだつ。雪菜を傷つけた君とは結婚なんてできない。借りた金も返すから、俺の前から消えてくれ!!」

婚約者だつた女性のことを見ることなく叫ぶように言う園部さんに、タレイアさんは絶望の表情を浮かべる。

「結婚してくれるつて、約束したじやない!」

「約束したさ! 結婚するつもりだつたよつ。けれど君は、自分が口にした約束を破つたじやないか!!」

悲しみではない、怒りを、怨みを宿した目をタレイアさんに向ける園部さん。
それを見たタレイアさんは、驚愕に顔を染めた。

「わたし……、わたしは——」

「消えてくれ! 君とはもう結婚なんてできない!!」

タレイアさんの言葉を最後まで言わせず、園部さんははつきりと宣言した。

涙を目尻に溜め、零れさせたタレイアさん。

でも、彼女は微笑んだ。

「わかった。けれど、最後の約束だけは、守るから」

そう言つて、彼女は驚いた表情を浮かべた園部さんの脇をすり抜け、部屋を出ていった。

「俺は……、俺は……」

言葉にできない言葉を吐き出し、座り込んでしまった園部さんは、タレイアさんを追いかけることなく身体を震わせていた。

——戻つて、来ないよな？

タレイアさんが走り去り、戻つてくる様子がないのを確かめてから、僕はゆっくりとダブルサイクロンホウキを降下させた。

僕の腕から逃げるよう飛び出した雪菜さんは、園部さんに駆け寄つて抱き合う。

「あの……、追わなくていいんですか？」

余計なお世話かも知れないと思いながらも、言つてみる。

妹は、家族は大切だろう。

でも新しい家族になるはずだつたタレイアさんのことも、大切だからこそ結婚しようとしていたはずで、でも――。

まだぶら下がつたままのロープをちらりと見て、僕はそれ以上なにも言えなかつた。

「彼女とは、もう終わつたんだ……」

胸に顔を埋めて身体を震わせている雪菜さんの髪を優しく撫でながら、天井を仰いでいる園部さんは涙を流してそう言う。

ふたりで交わしたはずの約束を破つたのは、タレイアさん。家族を傷つける人とはさすがに結婚できないだろう。

あんなに幸せそうで、園部さんを信頼しきつた目をしていたタレイアさんが、どうしてこんなことをしたのかは、僕には理解できなかつたけども。

「どうか、そもそも君は誰なんだ？ タレイアの友人かなにかか？」

「え？ あ、いや、僕は……」

どう説明していいのかわからなくて、涙を止めて鋭い視線を向けてくる園部さんから距離を取る。

正直、タレイアさんの知り合いかというほど関係はないし、実験のことを話していくのかもよくわからない。改めて考えると、どうしていま僕がこんなところにいるのかすらよくわからないくらいだ。

雪菜さんと抱き合つたまま立ち上がり、警戒した視線を向けてくる園部さんは、僕から距離を取り部屋の隅に逃げていく。

警察でも呼ばれたら面倒だ、なんて考える僕が、園部さん側にある部屋の扉をどう

やつて通過しようかと考えてると、女神が現れた。

「その子は私の助手よ。うちの学生の湯川君」

「二ーナ・AINシユタイン教授？」

園部さんの後ろから、金糸の髪をかき上げながら現れた女神、二ーナ教授。

悲愴な顔をしている園部さんに笑みを向けた後、彼女は怒りを露わにした視線を僕に突き刺してきた。

「……ということは、例の実験の関係者ですか」

「ええ。今回の実験も助手として使っていたんだけど、運悪くタレイアと接触してしまったのよね。何もないよう計らう予定が、止めきれなかつたわ。ごめんなさい」

どうやら園部さんは知り合いらしい二ーナ教授。

いまここでは言わないようだけど、明らかに「後で言いたいことがあるからね！」と目で語りかけてきていた。

「いいえ。結局、これは俺と彼女の問題ですから。おそらく、彼が何もしなかつたとしても結末は変わらなかつたでしよう。むしろ彼が介入して、二ーナ教授がそれに気づいて俺に連絡してしてくれたんだとしたら、それで最悪の事態を避けられたんでしよう」

「そう言つて頂けると助かるわ。彼のことも含めて、あとはこちらで対応するわね」

「お願ひします」

雪菜さんを抱き締めた園部さんと二ーナ教授の会話に入る隙間もなく、僕はできるだけ小さくなっていた。

「とにかく、いまは無事だつたとは言え、念のため妹さんを病院に——」

そう言つて二ーナ教授がふたりを外に誘導しようとしたとき、バタバタという足音が近づいてきた。

「二ーナ！ 大変よつ

慌てた様子で部屋に走り込んできたのは、ミレーユ助教授。

ただでさえクセが強くてよく乱れていたりする髪をさらに振り乱した彼女は、園部さんと雪菜さんの方をちらりと見、二ーナ教授の耳に口を寄せた。

「構いません。おそらく彼女のこと、ですよね？」

毅然とした表情で言う園部さんに、ミレーユ助教授は二ーナ教授に目配せする。

頷きを返されて、ミレーユ助教授は小さなため息の後、話し始めた。

「タレイアが死んだわ。彼女の店のところから、転落死。そのときの様子を見た人の話だと、事故じゃなく、たぶん自殺だろうって……」

「タレイアさんが?!」

驚いて声を上げてしまつた僕だつたけど、二ーナ教授はため息を吐いただけだつた。

「そ、うか」

園部さんに至つては、さつきまで婚約者だつた女性の死を聞いても、そのひと言つぶやくように言うだけだつた。

「では俺は雪菜を病院に連れて行きます」

「わかつたわ。後日報告に覗うわ」

「はい」

そんなやりとりをして、僕たちは園部さんの部屋を出た。

病院に向かつてホウキに乗り飛び立つていった兄妹を見送つた後、怒つてゐるけれど、どこか冷たいものが籠められた視線に向き合つた。

「ミレーユもありがとう。落ち着いたら貴女にも知らせるから」

「ええ。そうお願ひするわ」

「彼女が運び込まれた場所はわかる?」

「ここよ」

「ありがと。私たちは行くわよ」

言つて二ーナ教授は、ミレーユ助教授から受け取つたメモをポケットに收め、ホウキに腰を乗せた。

「どこへですか?」

「タレイアのところよ」

「でも、タレイアさんは……」

「わかつて。けれどこれも実験の一環よ。一緒に来なさい、貴方も関係者なんだから」「……はい」

ニーナ教授の鋭い視線に頷きを返し、僕はダブルサイクロンホウキにまたがつた。

*

ホウキに乗つてやつてきたのは、園部さんの家からそう遠くない、僕もこの前まで通つていた大学付属病院。

それも患者向けの正面入り口ではなく、地上から頂上まですべて病院になつてゐる建物の、かなり下層の方。

たぶん関係者とかしか入れないだろう、それほど大きくない入り口に降り立ち、ホウキを駐箒ラックに立てかけて窓口に向かう。身分証なんかを出して入り口を通つていつたニーナ教授の後を追い、僕も廊下に踏み込んでいつた。

人が三人並んで歩いても余裕があるほど広い廊下には、煌々と照明が点けられ、しかし明るいのに薄暗く感じる重苦しい雰囲気がある。

いくつか並んでいる扉からも、人が行き交つていない廊下からも気配はなく、病院ら

しい消毒液のものとはまた少し違う、独特の匂いが感じられた。

奥へ奥へと進み、一度廊下を折れてもう少し進んだ先にあつたのは、小さな広場のような場所。

奥の壁には小部屋らしき両開きの扉が並び、そのすべてが閉じられている。キツチリとしたスーツを着た男性が脇に立っている扉に近づいて、ニーナ教授はその男性に話しかける。

少し離れた場所に立つ僕は、ここがなんであるかを理解していた。

消毒液と、据えた匂いよりも特徴的な、雰囲気にはそぐわない清々しさを感じる香り。それがこここの場所が何であるかを表していた。

話をし、書類を示して何かを交渉していたらしいニーナ教授は、話がまとまつたのか僕に目配せを飛ばしてきた。

たぶん刑事さんだろう男性に鍵を開けてもらい、踏み込んだ部屋。

薄暗く灯りが点けられた部屋にはほとんど何もなく、真ん中に簡素な寝台があるだけ。

線香と、血の臭い。

誰かが寝ている様子の寝台には白い布がかけられ、誰がいるのかはわからない、
——タレイアさんだ。

ついさつき、ほんの少し前に話をしていた女性が、いま靈安室で横たわっていることに、僕はどこか心が身体から離れてしまいそうな感覚を覚えていた。

「さつさと終わらせるわよ。こっちに来なさい」

たぶんまだちゃんと処置されていないんだろう、線香と血の臭いの他に、生肉が発するなんとも言えない据えた臭いに吐きそうになつた僕を、ニーナ教授はそう促す。

寝台の奥へと回つた教授は、かけられた布を少しだけ開いた。
美しい、タレイアさんの左腕。

「持つて、しつかり支えて」

言われて僕は彼女の手を取つた。

——冷たい。

死んでいるのだから当然だけど、彼女の手は冷たかった。ただ冷たいだけでなく、そこまで温度が低いはずはないのに、氷に触れて体温を奪われているような錯覚があつた。

ニーナ教授は震えそうになりながらタレイアさんの手を両手でつかんでいる僕に近づき、彼女の手首に填まつたブレスレットを慎重に外した。

それは一番最初、実験を始めるときにはニーナ教授がタレイアさんに渡していた、たぶん実験用のブレスレットだ。

「もういいわ。戻してあげて」

「はい」

指示通りに腕をベッドに戻して、布もかけてタレイアさんの身体を隠す。

吐きそうになつてゐる僕のことも、死んでしまつたタレイアさんのことも気にする様子もなく、靈安室の外へと向かうニーナ教授。

取り外したプレスレットと書類を刑事さんに示して外へと促された僕とニーナ教授は、靈安室の前を離れて出口に向かつた。

「こんな風に巻き込まれるだらうと思つたから、詳しいことは話さなかつたのに」

そうつぶやくように言つて、どこか泣きそうな、やるせなさを含んだ瞳を向けてくるニーナ教授。

「はい……」

どんな言葉を返していいのかわからず、僕はそう返事をするだけで精一杯だった。

* 7 *

「被験者や関係者に危険が及ぶ場合には、実験を中止しても危険を取り除くのは当然のことよ？」 でもそうしたことがあるなら、まず最初に報告すること。ひとりで突つ

走つたりしないこと。そんなこといまさら言われなくてもわかっていることでしょう？

「はい……」

もうすっかり日が暮れ、泊まりがけの実験をやつてるとこにしか灯りがなく、静まり返つた国立魔法科学大学の実験棟。

その廊下を歩き、ニーナ教授の実験室に向かう間、僕はこつてりと教授に絞られていた。

ミスや勘違いなどで怒られるのは当然のこと。

でも今回、タレイアさんに自分の勝手な判断で接触し、ニーナ教授に報告しなかつたことは、全面的に僕の落ち度だ。

そのことをこうしてしつかり言い聞かされていた。

——いや、たぶんそれは三分の一だ。

三分の一は、たいして話しても仲が良かつたわけでもないけれど、知り合いとなつたタレイアさんがついさつき死んで、そのことに衝撃を受けている僕への配慮。

こうやつて怒られている間は、ただ落ち込んでばかりじやいられない。

残りはおそらく、ニーナ教授自身。

それなりにつき合いがあつたろうタレイアさんを失い衝撃を受けているのは、僕だけ

じゃない。

国立魔法科学大学の教授で、学長でもある凄まじい天才と言えるニーナ・айнシュタインと言えど、彼女はまだ一六歳の女の子。

僕もそうだけど、彼女もまた人の死に馴染んでいるわけじゃないことは、いつもより早口で、途切れることなく喋り続いていることからもわかる。

「まあでも、結果から考えれば、褒められた行動とは決して言えないけれど、貴方が介入したからこそ雪菜さんは助かつたんでしょうしね」

「園部さんにもそう言つてもらいましたね」

「ええ。だからと言つて、良いことではないわ。後日報告と、大学としても謝罪に覗うから、そのときはちゃんと着いてくるのよ」

「わかりました」

「けれどねえ……、今回の件はあれに誘導されたんだろうし、不可避な状況でもあつたのよね」

「あれ……。ゾフィアさんですか？ やっぱり僕は、あの人に利用されたんですね」「ええ。もちろんね。そのことも含めて後で始末書書いてもらうからね」

「はい……」

いつもの実験室にたどり着き、灯りがついたままの部屋の中に入る。

「あ……」

実験室に入つた途端、見えた。

蕾が落ちた、三号と四号のプロミージア。

そして、花を咲かせている、五号。

「どうして花が……」

「ふうん」

驚いてる僕に対し、ニーナ教授は落ち着いた様子で、なめらかな絹の布地を小さく集めたような花を見つめていた。

「……プロミージアって、どういう植物なんですか？」

「それはあれにも聞いたんでしょ」

「ええ。ゾフィアさんにも聞きましたし、本にも書いてありましたが、よくわからんないです」

タレイアさんは約束を破り、園部さんとの婚約を解消された。

約束を破ることで蕾が落ち、約束が成就することで花が咲くのだとしたら、五号に籠められた約束とは何だったんだろうか。

タレイアさんと園部さんの間で、いまさら果たされる約束なんてあつたんだろうか。「貴方も知つてる通り、プロミージアの花が咲く条件は約束の成就。過去の事例では、約

束は破られたけれど、被験者から強い精神波の放射が確認されたときには花が咲いたことがあるらしいわ。でも、基本はやはり約束の成就が条件なのよ」

「でも、タレイアさんと園部さんの間で成就する約束なんて、いまさらないですよね？」

「なるほど。そういう刷り込みをされたのね」

隣に立つて、碧い瞳で僕の顔を覗き込むように見上げてくるニーナ教授は言った。

「プロミージアに籠められる約束は、人間同士で交わされる約束ではないの」

「え？」

「約束は、ひとりでするの。自分自身にする、制約としての約束。それがプロミージアに籠められる約束なの。タレイアはたぶん、最後に何かの約束を、命をかけた約束を成就させたんだと思うわ」

これまでのことが腑に落ちた気がした。

ニーナ教授から視線を外し、美しく咲くプロミージアの花を見つめる。

タレイアさんが被験者で、園部さんが実験開始の際に実験室に来ていなかつたことも、蕾が落ちたのはタレイアさんが約束を破つたと自分で認識したタイミングであろうことも、なんとなくわかつた。

でも不思議なことが残る。

——このプロミージアに籠められた約束は、何だつたんだろうか。

「約束の内容は、データを確認して、咲いた花が次、どうなるかを観察し終えてからになるから。今日はお疲れさま。明日もやることたくさんあるから、今日は帰りなさい」「はい……」

まだ実験室に残るらしい二ーナ教授に言われ、僕は仕方なくその場を後にした。

*

僕と二ーナ教授を挟む実験用机の間に広げられたのは、開封された封筒とその中に納められていた便せん。

五通あるそれは、一号から五号までのプロミージアに対応した、タレイアさんが籠めた約束が書かれている。

「これは……、どういうことなんでしょう

「ううーん。わからないのよね、私にも」

うなり声を上げて、いる二ーナ教授のティカツプに紅茶を注ぎ足した僕もまた、うなり声を上げてしまつていた。

一号、園部さんやその家族を探さない。

二号、園部さんやその家族を追いかけない。

三号、園部さんやその家族の家に無断で踏み込まない。

四号、園部さんやその家族を傷つけない。

ここまででは約束の内容はわかる。

正直わざわざ約束をするような事柄でもないだろうと思わなくはないが、タレイアさんはとつて、これらはプロミージアに薔をつけさせるほどに強く、重い約束だつたんだ。問題は最後の約束だつた。

五号、死んでも園部幸夫のことを見し続ける。

ラブロマンスもののストーリーで使われるなら疑問にも思わない約束だけど、プロミージアに籠められ、花を咲かせることになつた約束だと考えると、疑問を覚える。

ふと思つて、僕はニーナ教授に訊いてみる。

「タレイアさんって、どんな人だつたんですか」

「……そうね、湯川君は結局ほとんど面識なかつたのよね、彼女と。いろいろと凄い人のよね」

タレイアさんが亡くなつてから、もう一週間。

その間に園部さんに謝罪に行つたり、実験妨害の廉で大学老院をやめさせられなつたのを、ゾフィアさんのことをしてニーナ教授が説得してくれたりと、いろいろとあつた。

不安や悔恨だけでなく、様々な気持ちと行動によつてアツという間に時間が経つてしまつた一週間の間に、僕は結局タレイアさんのことを知ることができなかつた。

湯気の立つ紅茶のカップを口元に寄せながら、ニーナ教授は語つてくれる。

「元々彼女の一家は、園部さんと同じ宇宙貿易商で、相当大きな資産を成してたんだけど、事故でタレイアを残して一族郎党亡くなつちやつたのよね。一種の成金というのかしら？ 金に執着した一族で、稼ぐ人のことはもてはやすけど、子供だつたタレイアのことは家政婦任せだつたという話ね。で、事故で生き残つたタレイアは、一夜にして新興開拓惑星ひとつかふたつくらいなら買えるくらいのお金を手に入れたわけ」

「凄いんですね、タレイアさん。……それに、美人でしたし」

「それだけじゃなく、本人が凄い努力家だからね。家事全般も得意だし、料理は宇宙人料理までマスターしてたらしいわ。もちろんできないこともあるだろうけど、超能力染みた植物の見抜きもあるし、その気になれば相続した資産をもう一回ひとりで稼ぎ出すことも不可能じやなかつたんじやないかしら？」

「……ええっと、なんかもう、とんでもない人だつたんですね。それなのに、小さな花屋をやつてるだけだつたなんて」

想像もつかないような資産を持つていて、女性らしい技術も優れていて、さらに美人であつたタレイアさん。

見た目なら二十代半ばくらいだろう彼女が、まだ結婚してなかつたことの方が不思議なくらいだった。

「花屋をやつてたのも子供の頃からやつてみたい仕事だつた、つて話してたからね。あれだけ何でも持つてたらそりや引く手数多だつたのよね。——でも、湯川君も見た通り、彼女はヘタすればあいつに匹敵するほどの壊れた、いわゆる地雷物件なのよ」

「……そうですね」

確かにあの日のタレイアさんは、ゾフライアさんに匹敵するほどの恐ろしさを感じた。多くのものを持つていたとしても、ついでにあんな性格まで持ち合わせていたら、付き合いたいという人もあまりいないだろう。

「育ちが悪かつたんでしょうね。異常に愛情に飢えてて、凄まじい独占欲だつたの。それも、攻撃的なくらいに。実際、半分くらいは噂だけど、園部さんの前に付き合つた恋人は、自殺した人が三人、行方不明が五人、逃走した人は十人は下らないって話よ」

「そんな人なのに、園部さんはタレイアさんと婚約したんですか」

「ええ。一年くらい前だつたかしら？」園部さんの会社が事業に失敗して危機に陥つたとき、貿易の仕事で知り合つたタレイアがかなりの金額を貸したそうよ。女性として最高、資産もあるしお金を借りてしまつてはいる。でもやっぱり、結果はあの通りだつたわね」

大きくなため息を吐き、ニーナ教授は目を伏せる。

園部さんとはあんまり話してはいないけど、たぶん彼はタレイアさんのことを愛していたんだと思う。愛情があつた上で、でも妹さんを殺そうとしたタレイアさんに我慢ができなくなつたんだろう。

約束さえ守られていれば、不幸は起こらなかつた。

けれど、約束を守れるタレイアさんだつたら、たぶんもつと早くに結婚して、納まるところに納まつていたんだろうとも思えた。

「まあタレイアのことも問題なんだけど、とりあえず私たちにとつての問題なのは、こつちなのよね」

そう言つて二一ナ教授が目を向けたのは、密閉プランター。

五号のプロミージアは、笑顔だつたタレイアさんを思わせる美しさだつた花も萎れ、いまはそこに小さな種ができつつあつた。

地球ではたぶん初めて、宇宙でも記録に残つてゐる回数は少ない、プロミージアの種だ。

「何が問題なんですか？」

「五号の約束、『死んでも園部幸夫のことを愛し続ける』つてのは、どの瞬間をもつて成就したと認識されると思う？」

「ん？ 成就のタイミング、ですか？」

「ええ、そうよ」

言われて僕は顎に手を当てて考えてしまう。

死んでも、ということは、死なないと成就しない約束だ。でもプロミージアは、成就したもしくは破つたと約束を籠めた人が認識した時点で発せられる念信波を受け取つて、花を咲かせたり薔を落としたりする。

だとしたら、死ぬ前でも死ぬことが確定した時点でタレイアさんが約束の成就を認識すれば、プロミージアはそのときの念信波を受け取ることができることになる。

「やつぱり、死ぬ直前だつたんじゃないですか？」

「そう思うわよね。これを見てくれる？」

そう言つて二ーナ教授が見せてくれたのは、五号に接続されたレベルレコーダの波形。

デジタル記録されたデータと照合して、波形が大きく動き出した時間と止まつた時間が追記してある。

もう一枚見せてくれたのは、弱い波形が記録された、たぶんデジタルデータを印刷した紙。

そつちのデータの方は、途中から波形がまつたく動かない、真っ直ぐな線が引かれて

いる。

「ん？」

二枚目の波形データを見た僕は、その前の四号や三号のデータと、ニーナ教授が差し出してくれた紙を照合する。

三号、四号の蕾が落ちたタイミングで、レベルレコーダにはプロミージアの生体活性が大きくなつたことが記録されている。

ニーナ教授が渡してくれたデータの方も、完全に一致する時間、ほぼ同じ波形が記録され、それぞれが三号と四号に対応することがわかる。
しかし、五号は対応しない。

「あの、こつちの紙は、なんのデータなんですか？」

なんとなくイヤな予感を覚えつつ、僕は顔を上げてニーナ教授に訊いてみる。

表情を引き締め、眉根にシワを寄せつつ、ニーナ教授は答えてくれる。

「タレイアに持たせていたブレスレットで記録した、精神波のデータよ。強い念信波が放射されるとき、必ず精神波も大きな乱れが観測される。プランターは精神波を完全にシャットアウトする構造だから、間接的ではあるけど、空間を飛び越える性質があることがわかつてゐる念信波の放射と受信が観測できたと言えるわね」「なるほど……。でも、五号はおかしいですよね？ プロミージアの方は生体活性が記

録されてるのに、プレスレットでは観測されてない」

もう一度見直した、五号に対応したタレイアさんの精神波のデータ。

たぶん飛び降りたタイミングだと思うのに、驚くほど乱れがなく、むしろ落ち着いている様子すら感じられる穏やかな精神波の波形。

そしてプロミージアが念信波を受信したと思われる時間には、精神波が観測されなくなつて、一本の真っ直ぐな線になつていて。

「これって……」

「ええ、たぶんね」

あることに気がついた僕がつぶやくと、ニーナ教授は大きく頷いて見せた。

プレスレットの波形が線になつた瞬間に、タレイアさんの脳の活動は停止した。つまり、その瞬間に彼女は死んだ。

精神波も、念信波も人間の脳から放射されることはある。

でも、プロミージアが念信波を受信したと思われる時間には、タレイアさんは死んでいた。

「じゃあいつ、どうやつて、プロミージアは念信波を受け取つて……。いや、違う。タレ

イアさんはいつ、願いが叶つたと認識したんだ？」

死んだはずの人間から念信波を受け取つたプロミージア。

じやあその念信波はいつ、誰が、どうやつて放射したものなんだろうか？

僕にはそれがわからず、口元に笑みを浮かべ始めたニーナ教授の顔を、ただ見ていることしかできなかつた。

「さあね。精神物理学最大の命題は、まだまだわからないことが多いわ。今回のデータを元に、これからも研究を重ねていくしかないわね」

「そうですね」

小さく息を吐いて微笑んだニーナ教授に、僕も笑みを返していた。

「もしかしたら、幽霊の存在や、死後の世界を科学的に解明できるかも知れないわね」

「それって、何かメリットあります？」

「そりやあもう！ 理屈さえわかれば夜の暗がりを恐れる必要はなくなるでしよう？」

「……そうでしようか？」

最先端と言える精神物理学の研究をしているニーナ教授だけど、意外に幽霊とか怪談話とかは苦手だ。

金糸のような美しい髪をかき上げつつ、残りの紅茶を飲み干した、師であるニーナ教授を、僕は不思議な気持ちを抱きながら見つめていた。

空になつたティポットを取り、新しい紅茶の準備を始めながら、僕は問うてみる。

「もし幽霊とか死後の世界の存在が証明されて、その証明のために幽霊と会わないとい

けなくなつたら、どうします?」

「……それはあまり、考えたくないわね。もし会う必要があるなら、できれば」先祖様辺りで頼みたいわ」

実験用机に肘を着き、げつそりした顔でため息を吐くニーナ教授。

そんな姿でも彼女は美しく、可愛らしい。

——僕は、ニーナ教授の助手になれて良かつたな。

ここ最近の女運の無さを思い出しながらも、一番身近にいる女性がこの人であることを嬉しく思う僕は、心を込めて新しい紅茶の準備を進めた。

「清廉欠白」 了